

ふるさと岐阜・魅力発見大作戦

# 岐阜町金華の誇り

NPO法人わいわいハウス金華  
岐阜市歴史博物館



【目次】

ふるさと岐阜・魅力発見大作戦「岐阜町金華の誇り」

金華街角コラム

・金華山という名前―伊奈波神社の縁起

・長良川―豊かな川の恵み

ふるさと金華歴史発見  
町並みトピックス

- 一 戦争と平和の記念碑―岐阜護国神社と日中友好庭園 11
- 二 大切な遊び場―忠節用水路 15
- 三 ふるさとのメモリアル―岐阜公園 19
- 四 川沿いの景勝地―鏡岩・御手洗・湊町 23
- 五 上川筋への川港―上材木町・湊町・玉井町・元浜町・西材木町 27
- 六 近代の古城址再開発―大宮町一〜二丁目・松ヶ枝町・松下町・松山町・夕陽ヶ丘 33
- 七 尾張藩による旧城下再生―木挽町と益屋町・大仏町・梶川町 37
- 八 繭糸商人の活躍―木挽町・山口町・下茶屋町・上茶屋町周辺 41
- 九 紙問屋の町―玉井町・東材木町・今町二丁目周辺 44
- 一〇 興亡した商人町―今町一〜四丁目 47
- 一一 北美濃への道筋・郡上街道―東材木町・上大久和町・久屋町・魚屋町 49
- 一二 思い出の通学路―中大桑町・大工町・布屋町・下新町・甚衛町・下大桑町 53
- 一三 かなめの町筋―本町一〜三丁目・鞆屋町・上新町・中新町 57
- 一四 お稻荷様の町―末広町・新桜町 61
- 一五 御鯨街道―鞆屋町・米屋町・上竹屋町・間之町・大和町・中竹屋町 63
- 一六 おしゃれな商店街―伊奈波通一〜三丁目・万力町 67
- 一七 岐阜町を守る神仏―伊奈波神社と伊奈波の諸寺院 71
- 一八 岐阜町の新たな玄関口―常盤町・白木町・栄扇町・松屋町 78
- 一九 川下筋への川港―下新町・本町四〜七丁目・木造町西組 82
- 二〇 外郭からメインロードへ―木造町・啓運町・矢島町一〜二丁目 86
- 二一 外郭を守る諸寺院―信長ゆかりの古刹と浄土真宗寺院 90



町並みトピックスあとがき

参考文献

金華街角コラム

・板垣退助と岐阜——「板垣死すとも自由は死せず」

・正法寺の籠大仏——日本三番目の大仏？

・岐阜提灯——世界に誇る日本の伝統工芸

・金華山焼——時と人を越えた伝統の技

・金華水防団——金華を襲った水害

・長良川の鶉飼——日本一の格式を誇る

・濃尾震災と岐阜——俄然天地鳴動する

・信長館の発掘調査——国史跡を指して

・芭蕉と岐阜町——金華の人たちの熱意が

金華歳時記

春——伊奈波神社の桜と岐阜まつり

夏——長良川の鶉飼と花火大会

秋——岐阜公園の紅葉と菊花展

冬——金華山とまちの雪景色

金華史年表

金華の寺院

95

96

97

98

99

101

103

105

107

109

111

115

119

123

127

131

135



ふるさと岐阜・魅力発見大作戦

## 「岐阜町金華の誇り」

金華地区は、岐阜市発祥の地にあつて、目前に聳える緑豊かな金華山、清らかな長良川という風光明媚な環境に恵まれ、斎藤道三公や織田信長公が拠点として築きあげた城下町である。岐阜市の歴史や文化、観光を語るとき、この金華地区を抜きにしては語ることはできない。

岐阜市では、今、「金華山と長良川まるごと博物館構想」やITを活用した「町歩き」を進め、「まちなか博士」による「もてなしの心」の育成に取り組んでいる。

こうした事業を進める上で、金華地区の住民が、地域の歴史や文化を再発見し、市民や観光客に伝えることが、「ふるさと金華」や「ふるさと岐阜市」の歴史や文化を誇りにし、「もてなしの心」を自信を持って発揮することに繋がると考える。まちなか歩きを推進し、「もてなしの心」を育むためには、散策や観光の拠点となる金華地区の住民が積極的に参加し、理解する意識の向上が成否を決める。

そこで、NPO法人「わいわいハウス金華」では、平成十九年五月、岐阜市と事業委託契約を締結し、岐阜市歴史博物館の絶大なるご指導・ご支援を得て、

- 一、岐阜町金華・写真発見
  - 二、岐阜町金華・歴史発見
  - 三、岐阜町金華・文化人発見
  - 四、講座「岐阜町金華を学ぶ」
  - 五、岐阜町金華もてなしクラブの組織化
  - 六、出版「岐阜町金華の誇り」
- の六事業を展開してきた。

第六番目の事業である本書の出版の目的は、金華地区の住民がまち歩きをするための案内書を作製することである。金華地区に暮らす住民自らが、まち歩きを楽しみ、出会う人たちと、その場で目に見えるものを語り、笑顔で声をかけ合うことができるようにすることである。

本書を通して、金華地区の歴史や文化を身近な存在としてとらえ、金華地区全体に、歴史や文化に対する興味と関心が倍加し、笑顔での道端会議が増え、「ふるさと金華」を誇りに思い、誇らしく語る「もてなしの心」が、地域の歴史や文化は異なっても、やがては岐阜市全体に育くまれる先駆けとなればと願う。

最後に、地元下茶屋町在住の篠田壽夫氏の並々ならぬご尽力に厚く感謝し、各町内でお話を伺った方々、神社・寺院の関係者、各種団体の方々、その他多くの方々にご支援・ご協力をいただいたことを厚く御礼を申し上げます。

平成二十二年三月三〇日

NPO法人 わいわいハウス金華

理事長 吉田 好成

# 金華山とついで名前 — 伊奈波神社の縁起

## 金華山伝説

金華地区の名は、いうまでもなく金華山に由来する。標高三二九メートルの金華山は、長良川とともに岐阜市のシンボルである。古くは、因幡（稲葉）山と呼ばれていたことはよく知られている。

では、金華山という名前は、と  
いうと、いろいろな説が唱えられている。

在原行平が、勅命により奥州金華山から運んで来た金石を、美濃国に置いていったから金華山（享和元年一八〇一年の序をもつ『尾濃葉栗見聞集』。奥州の金華山に似ているため（文化二年一八〇五年出版の『木曾路名所図会』）。「雄総の放蕩息子が流浪先の奥州金華山で改心した。金華山の小石を拾って帰郷したところ、父親は話を信じずに小石を投げた。これが一夜で成長して山と

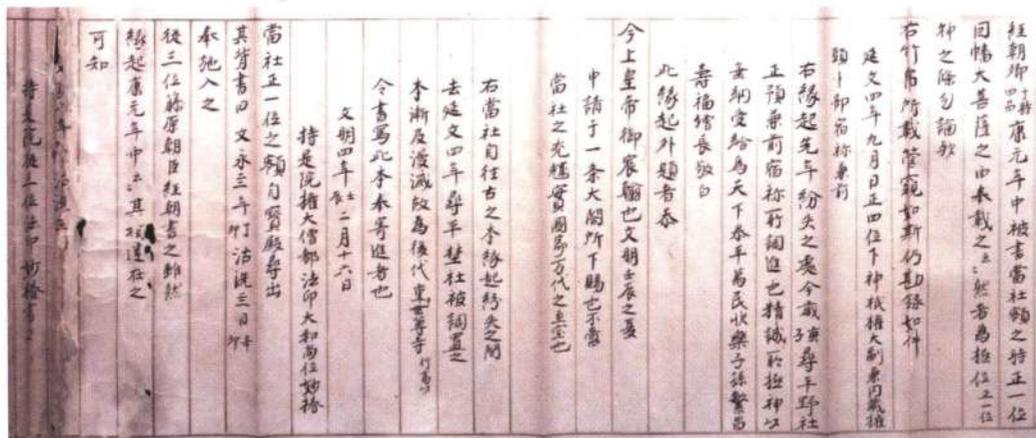
なつた」という伝説（大正四年発行『美濃国稲葉郡誌』。初夏に咲くツブラジイの花で、全山が金色に彩られる姿から金華山となつた、という視覚的な説などである。しかし、これらの説がどこまでさかのぼれるかはわからない。

## 伊奈波神社の縁起

金華山という名前を使った最も早い例は、現在知ることができ限りでは、清巖正徹（一三八一〜一四五九）の歌集『草根集』である。正徹は、美濃国の武将とも交流が深かった歌人だが、『草根集』には「美濃国いなばの山に社ありとて、人の法楽の歌すすめ侍りける中に五首」として、いなばの山・一石山・破鏡山・金花山の名が挙げられるとともに「弥陀・葉師のみます」と題した一首も含まれる。実はこの正徹の和歌は、伊奈波神社の縁起が下敷きになっていると

考えられる。下に掲載した縁起は、原本が傷んできたため、一五世紀末に、斎藤妙椿が改めて書写させ奉納したものの写だが、その内容はおよそ次のとおりである。

垂仁天皇が、皇后のヒバスヒメとの間に生まれた二人の皇子に望みを尋ねたところ、兄のイニシキイリヒコノミコト（五十瓊敷入彦命）は弓矢を、弟のオオタラシヒコノミコト（大足彦尊）は皇位を望んだ。天皇はその希望をかなえ、兄皇子に弓矢を賜り、弟皇子は垂仁天皇が亡くなった後に即位して景行天皇となった。景行天皇は、イニシキイリヒコノミコトを大変重んじたが、兄弟の仲を裂こうとした陰謀により、ミコトは因幡守として赴任させられる。一方、都では天皇家の宝剣が毎夜姿を消すという大事件が起こり、占つたところ奥州の金石に心を寄せたため



伊奈波神社縁起（伊奈波神社所蔵）の末尾

とわかった。そこで金石を都に召し寄せることになり、イニシキイリヒコノミコトが命じられて因幡国の兵とともに、奥州に向かう。金石を渡したくない奥州の民は、同形の石を八つ集めるといふ計略をめぐらせたが、ミコトは「鏡を石にあてたとき、鏡が破れれば本物」との、亡き母后のお告げにより、金石を見分けることができた。

これは、高さ約一・一メートル、周囲約二・四メートルの丸石であった。ところがそれを都に運び帰る途中で、ミコトの成功をねたんだ者の陰謀により、景行天皇が、ミコトを討つために大軍を派遣した。両者が対戦したのが、美濃国厚見郡（現在の岐阜市南部。金華地区もここに含まれる）である。

戦いの間、金石は椿原に安置されていたが、一夜で高さ約一〇メートルの山となり、ミコトとその王子たちはそこに姿を隠した。

ミコトは、因幡大菩薩となって「金山」で衆生に利益を施され、奸計を信じて兄を討伐してしまっ

たことを知った景行天皇は、椿原の麓に社壇を造らせ、ミコトと王子たち、母后のヒバスヒメを祀らせた。これが伊奈波神社の始まりと伝え、椿原は、現在の丸山のこゝと考えられている。なお、景行天皇の皇子の一人がヤマトタケルノミコト（日本武尊）である。

ここには、正徹があげる因幡山・破鏡山・一石山という名前の由来が語られる。金華山はないが、金山という名は出ている。正徹が「弥陀・薬師みます」と述べているのも、伊奈波神社の縁起で、弥陀はイニシキイリヒコノミコトの、薬師はヒバスヒメノミコトの本地仏とされていたからだろう。

文明五年（一四七三）に美濃を訪れた一条兼良は、その紀行文『藤河の記』に「因幡山は奥州から金が化来したものと因幡社の縁起にあるそうだ」と記し、「峯におふる松とは知るや因幡山　こがね花咲く御代の栄を」の歌を詠んでいる。「黄金花咲く山」「金が化来した山」つまり金花（華）山・

金化山である。

なお、同社は天文八年（一五三九）に、斎藤道三が現地にうつしたと伝え、これらの和歌が詠まれた時代には丸山に鎮座していた。こうした古い用例から考えると、奥州との関係を意識しつつ、伊奈波神社の縁起を踏まえて、金華山の名が成立したのではないだろうか。

### 「御山」金華山

尾張藩領となった江戸時代には、因幡山・金華山は、どちらも使われていた。また、歴代尾張藩主が岐阜町を訪れると、必ず登山や遊獵を行う場であり、領主の山ということで単に「御山」とも呼ばれる。一七世紀には、藩の役人である山廻り二名がおり、元禄八年（一六九五）に岐阜奉行所ができる。この「御山懸り」の同心が、山内をまわって倒木などを改め、毎年正月二日には、山上に残る天守跡に鏡餅を供えた。

明治六年（一八七三）に陸軍省に所属、同二三年に皇室御料林と

なるが、このころの公文書類には、「因幡山」は姿を消し、金華山と記されるようになる。

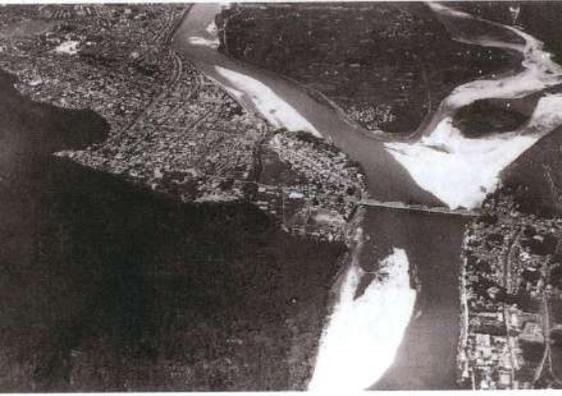


江戸時代の金華山  
(岐阜市歴史博物館所蔵「鶉飼遊楽図」より)

# 長良川 — 豊かな川の恵み —

## 長良川の変遷

地区の北側を流れる長良川は、郡上市高鷲町大日ヶ岳（他説に、郡上市高鷲町見当山の本谷）の吹谷（他説に、郡上市高鷲町見当山の本谷）を源流とし、揖斐川に合流して伊勢湾へ注ぐ、県下随一の長流である。古くは因幡川いなばがわともいい、郡上郡では郡上川むぎぐん、武儀郡では藍見川あいまがわ、墨俣付近では墨俣川すのまたがわともいった。当地は、長良川が山地から濃尾平野へと出る境にあり、川を利用



分流する長良川（昭和初期）  
岐阜市歴史博物館蔵



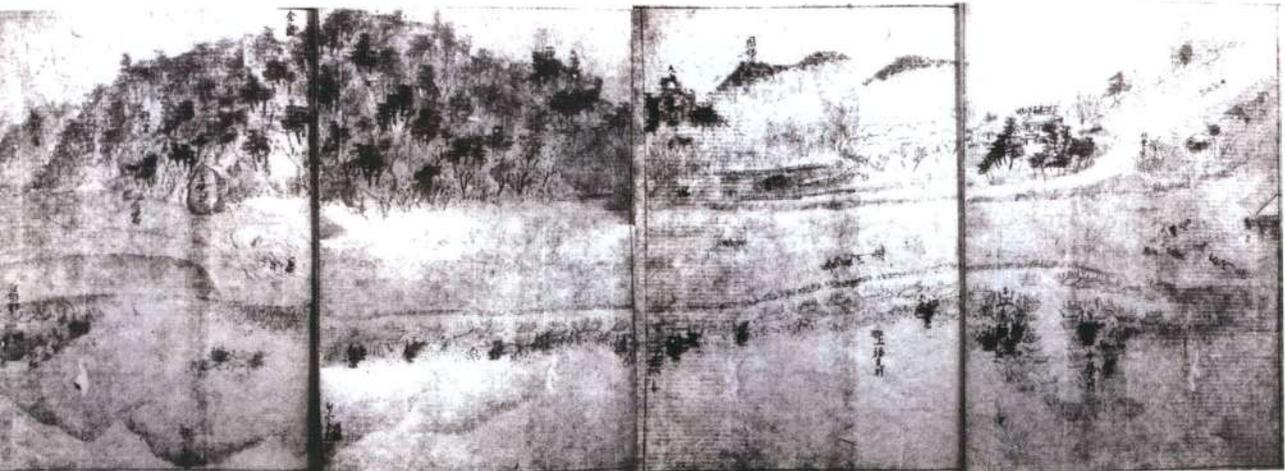
早田から長良橋を望む  
（昭和初期・『長良川の清流』より）  
岐阜市歴史博物館蔵

した物資輸送の中継地であった。中世、岐阜は井ノ口いのかちと呼ばれていたが、これは金華山麓長良川左岸に、井水の取水口があったためとされている。当時、長良川は、金華山麓から西流して早田、則武を通り、木田で現在の伊自良川筋を南下して、河渡に至っていたようである（長良古川）。天文三年（一五三四）大洪水が発生し、井水口が破れて井川となり、岐阜市江口

で長良古川に合流するようになった（現長良川）。また、慶長年間（一五九六～一六一五）の洪水により、長良崇福寺前（のりたけ）から鷺山の南、則武（まさき）と正木の間を経て、木田（きだ）で伊自良川筋に合流する新川（通称「古々川」）が出来たといわれている。

江戸時代後期の作と考えられている「金華山之麓長良川之図並鶺鴒飼下御鯨調手順一通」（岐阜市歴史博物館蔵）によれば、金華山麓、長良川左岸の景観は、現在の鶺鴒飼納涼観覧所付近の山腹に「鏡岩」、その下の水際に「二ツ岩」、やや下って「立壁岩」が立っていた（立壁岩を鏡岩とする書物もある）。そのすぐ下流から「小坂ノ瀬」があり、現在もこの辺りが瀬となっている。

瀬を過ぎると広大な「石河原」が広がり、「丸山」の麓、「御手洗」池付近までは「藪」、続いて「畑」になっていた。柵がみえるが、こ



江戸時代後期の金華山麓長良川両岸の様子

れは金華山への一般の立ち入りを禁じるためである。また、明確に図示されていないが、この付近から総構えの土居(堤防)が築かれ、「畑」はその堤外であった。なお、「石河原」には昭和初期まで筏場があり、郡上市の高原土場より美濃市立花を経て流してきた筏は一旦ここに着いた。

対岸の「宮」(神明神社)と相對して、「長良川御役所」の二階建ての建物が建ち、その隣の建物は「問屋西川家」であろう。この付近が中河原湊で、秋葉堂を先頭に、「中河原町」の町並みが続いている。この秋葉堂は、現在も鶴飼観覧船事務所横に祀られている。なお、護岸の状況は、対岸「上福光村」から「中福光村」にかけては石積み表現であるが、「中河原町」はそれと異なるようである。川はここで「古川通」と別れ、井川には、すぐ「入口ノ瀬」があった。

## 古川、古々川の締切工事

長良川の景観が一変したのが、昭和十一年(一九三六)内務省直

轄木曾川上流改修工事の一環として実施された、古川、古々川の締切り工事で、同一四年八月に竣工した。それと同時に、忠節に至る左岸、全長一八〇メートルの区間に、川表は練玉石張、上部の擁壁はコンクリートの「角落し構造」(出水の際には、柱の間に畳を差し込んで越流を防ぐ)を備えた、強固で急勾配な「特殊堤」が築堤され、昭和十一年に完成した。これは、家屋が密集し、拡幅する土地の収用が困難であるが、



特殊堤(忠節町から金華橋方面を望む)

万一破堤の際は、岐阜市街(加納輪中)をはじめ、場合によっては境川を突破し、羽島郡内にまで水害が及ぶ危険性が懸念されたためである。「特殊堤」は、社団法人土木学会による「日本の近代土木遺産」において、現存する重要な土木構造物としてAランク評価を受けている。

## 川の恵み

さて、長良川では、古来より鮎が名物であり、それを原料とした鮎鮓、ウルカ、粕漬けなどは、江戸時代献上品にもなった名産品である。

『増補岐阜志略』では、ウルカについて「洩鮎」「取交」「子鮎」の三種を載せている。なかでも献上用の「御用洩鮎」は、六〜八月(旧暦)の七日から一三日にかけての夜、月が没してから夜明けまでの鶴飼(暁鶴漁)でとれた鮎からつくくるウルカで、鮎が腹の砂を吐き出して清浄であるため、別名「暁川」と称したと紹介している。

現在でも初夏の若鮎の腸を漬けた「洩ウルカ」、落ち鮎の雄の白

子を漬けた「白ウルカ」、秋の産卵期の雌の真子(卵巣)を漬けた「子ウルカ(真子ウルカ)」などがあり、土産物として観光客に好まれている。

また、寒バエを佃煮にした「いかだばゑ」もよく知られている。その名は、冬季、上流から流してきた筏の下に群れる寒バエを、網でとったことに由来するもので、土産物として、人気のある商品である。

## さまざまな漁

このような魚を獲るための漁業権は、金華地区では、「長良川漁業協同組合」が管理している。鮎の場合、遊魚期間は、五月一日から一二月三十一日まで(平成二〇年度)。

漁法は鮎漁の場合、代表的な友釣りのほか、瀬張り網、夜川網、中狹網などの方法がある。

瀬張り網は、かつて「マワリ」回し投げ」などと呼ばれていたもので、落ち鮎のシーズンに、川幅いっぱい、白布を張った縄を張り、下ってきた鮎の群れが、それに驚

いて逃げようとする瞬間に、船上などで待つていた漁師が、次々と網を投げ入れる。長良橋付近などで、毎年よくみかける漁法である。中猟網は、船で網を半円形に流し、上流から下りながら漁をする。夜間、照明灯で川底を照らし、棹で川底の石をたたいて、カリカリと音をたてたり、船縁をたたいたりして鮎を脅し、逃げようとするところを網にかける。この魚は水が出てくるときが良い。



鶺鴒のとった鮎

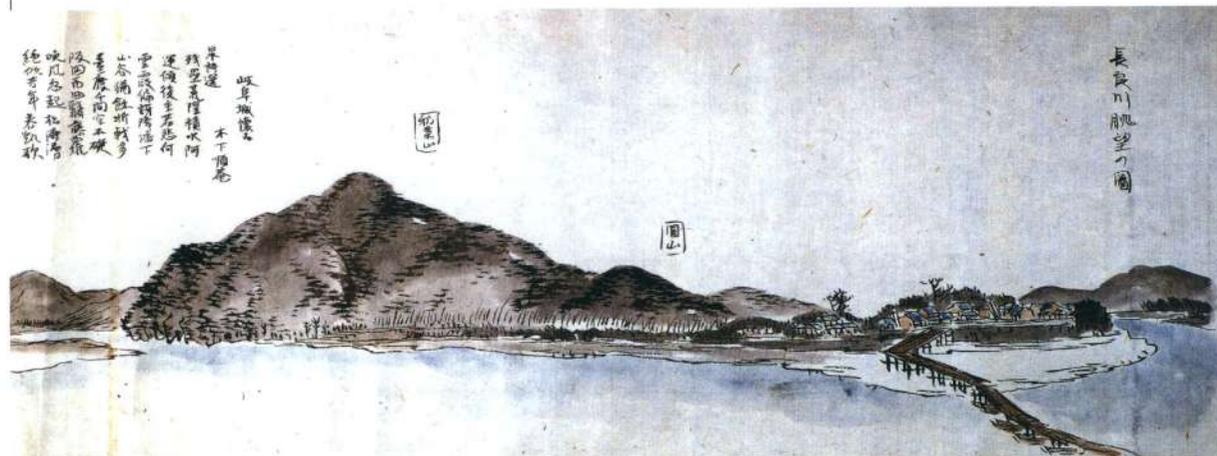


瀬張り網（長良橋上流）

江戸時代、網漁は鶺鴒の鶺鴒が網にかかる恐れがあるため、鶺鴒の近くで行うことは禁止されていた。現在も鶺鴒期間中は、鶺鴒い大橋から長良橋間での網漁は、自粛されている。その他、雑魚を対象としたものに、四ツ手網をつかった「ボウチヨウ」や、浅瀬の流れをせき止めて、受け箱を仕掛ける「登り落ち」など、様々な漁法が今もみられる。

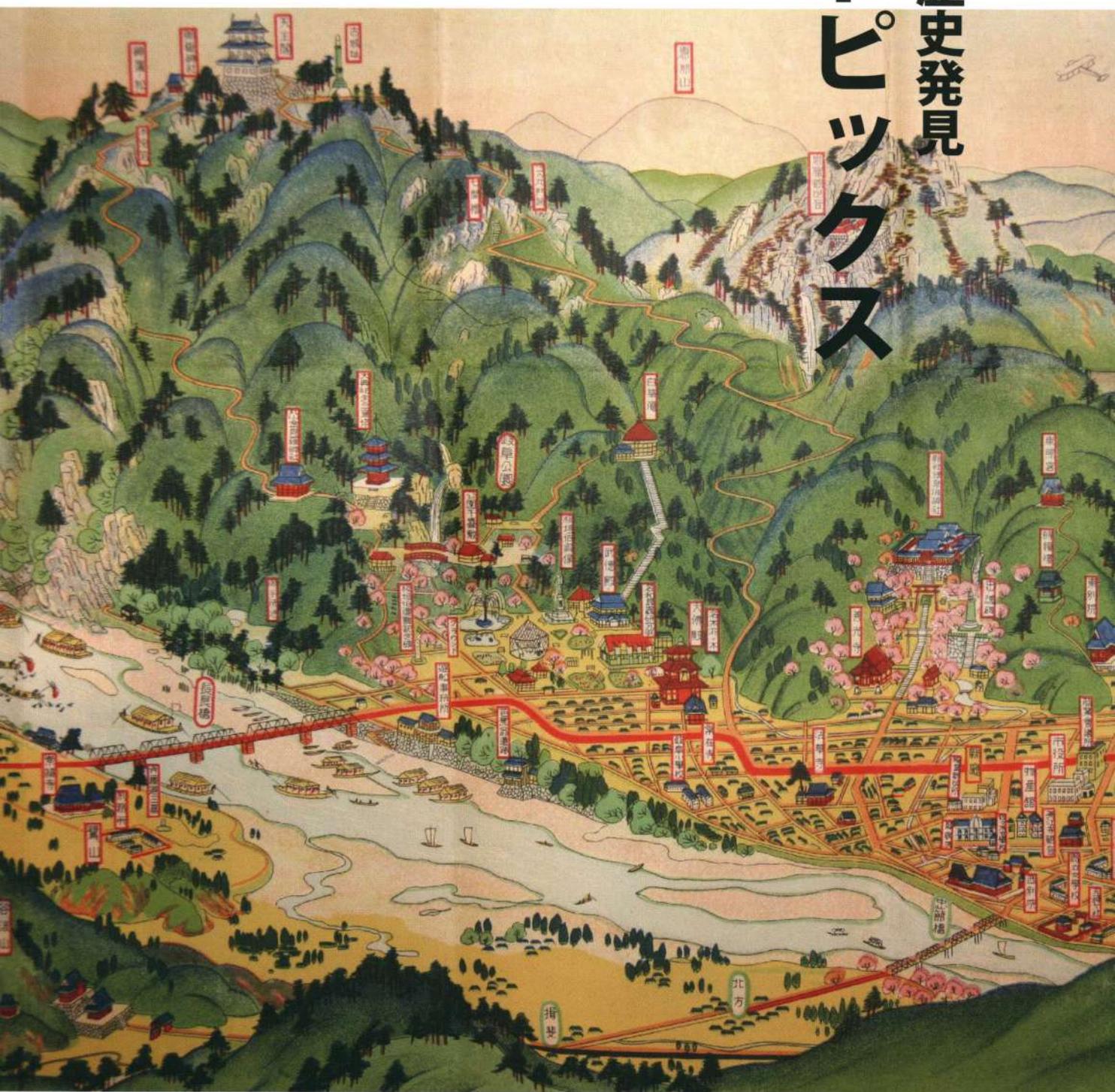


中猟（明治時代・『飛騨美濃両国魚漁之図』より）  
岐阜市歴史博物館蔵  
中猟網漁は、当地方の伝統的な漁法のひとつ。

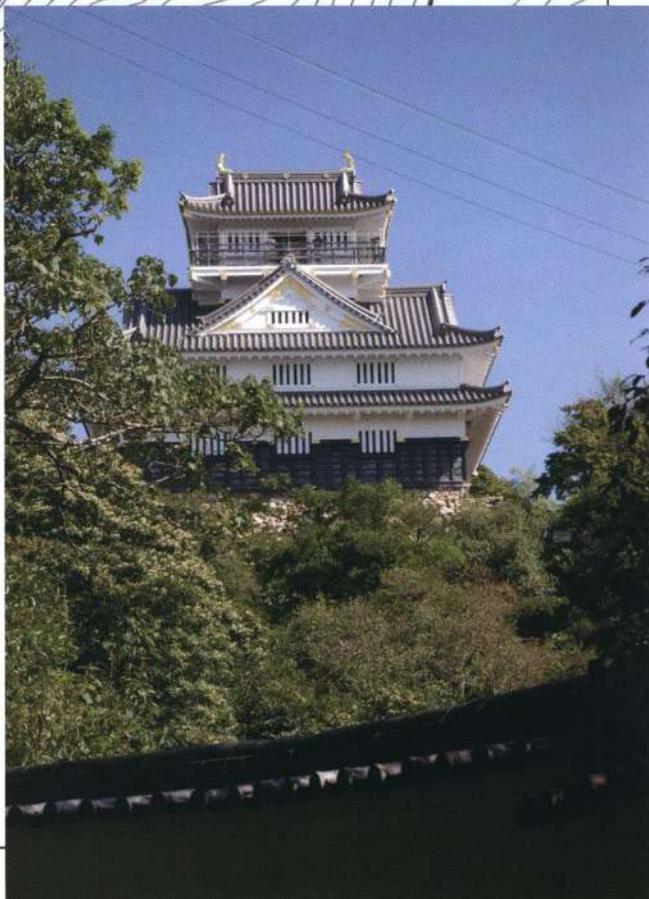


「美濃奇観図巻」池田崇広筆（明治13年頃）岐阜市歴史博物館蔵  
手前にかかる橋は明七橋。

# ふるさと金華歴史発見 町並みトピックス



大正14年「岐阜名所図絵」より





建設中の岐阜小学校（平成 21 年 3 月）



# 一 戦争と平和の記念碑 — 岐阜護国神社と日中友好庭園 —

？なぞの大穴？

本殿の裏に古木が生えた縦穴たてあながある。これはなんだろう。護国神社の周辺は四季の自然が美しく、不思議さを感じる記念物も多くあって、散策を楽しむにはよい場所である。



## 岐阜護国神社の由緒と境内

岐阜護国神社は、旧陸軍歩兵第六十八連隊関係の戦没者三万八千の霊たままを奉祀ほうししている（連隊区の違いにより県内には高山と大垣にも護国神社がある）。昭和一〇年に護国神社制度が制定されたことを受けて関係市

町村が協議し、昭和一五年一月に創立された。多くの人々が勤労奉仕に参加して、川原や藪を整地した。いま本殿の裏に古木を囲む大きな穴があるが、これはその木を保存するため埋め残したものである。これを見れば、社殿を建てるため、どれだけの土盛りをしたかわかる。東大鳥居の近くには樹齢百年余のエドヒガンザクラの巨木がある。対岸に住む鶴匠が、この開花ぶりで漁の吉凶うらななどを占ったというので、「鶴飼桜」として有名になった。金華山原生林の緑の中であって、しかも開花が早いいため、対岸からよく目に入ったのである。その見事さを惜しんでこれも保存された。当神社は平成二一年に、鎮座七〇周年を迎える。

神苑は、国生み神話を造形した「大八洲」おおよしまとして整備されている。本殿に向かう参道の右側は伊弉諾尊・亀をイメージした横石で生まれ、左側は伊弉冉尊・鶴をイメージした立石で組まれている。

本殿の右脇にある鎮霊社には、戦没者以外の戦争犠牲者が奉祀されている。この附近にはサイパン島・テニアン島遺族会が設



神苑「大八洲」の銘碑

満開の鶴飼桜





鶴のイメージの立石



防人像



春季例大祭



鶺鴒能



献灯



置した「郷国思慕防人像」や、フィリピンのルソン島に建ててあった「岐阜県出身戦没者慰霊碑」から持ち帰った銘板「平和の碑」を安置したものなどがある。  
手洗舎の脇には「軍人勅諭の碑」がある。昭和四年に鏡島の小学校に建てられ、昭和二〇年に廃碑になっていたものである。

### 護国神社の行事

春季例大祭は四月一二日に、秋季例大祭は一〇月五日に執行される。多くの遺族が参拝され、雅楽クラブ鳳松会が組織されていて舞楽も奉納される。春季例大祭は特に盛大で、岐阜県神社庁々長による奉幣がある。

満開の桜のなか前後一二日間、献灯行事として数百の行灯（今は提灯）が飾られるし、一夜は、桂会による鶺鴒能が催される。ほかに歳旦祭・終戦記念日祭と夏冬の大祓がある。夏の大祓には、茅の輪くぐりのほか、河童まつりが行われる。これは、多くの子どもたちが、河童の扮装をして、河童堂に



河童祭り



茅の輪くぐり

きゅうりを奉納し、相撲大会などを行うものである。元旦には日本正剛館空手道士会が奉納寒稽古をする。長良川の流れに首まで浸かる稽古もあって迫力がある。居合道の寒稽古も行われる。

また神前結婚にも力を入れ、本殿での挙式と、長い参道を長持唄に合わせて進む道行きなどが行われる。

平和祈念の碑



平和一神



軍人勅諭の碑

### 平和祈念公園と日中友好庭園

内苑のみが神社所有地で、外苑は市有地である。そのうち東大鳥居の前を「平和祈念公園」という。中央に大きな岐阜県戦没者「慰霊塔」がある。平成五年の全面改修で「世界平和をねがって」という銘板が加えられた。向かって右側には「平和一神」がある。修養団捧誠会が建設したもので、陶製の「和平竜」が置かれている。三上卓「日本青年の歌」の碑もある。向かって左側には、

岐阜県傷痍軍人会が建設した「平和祈念の碑」がある。碑文には「苛烈を極めた戦争を身をもって体験し二度と戦争を繰り返さないよう傷痍軍人は心より願っております」とある。その隣は大野伴睦の句碑で、岐阜県遺族連合会が設立した。

日中友好庭園は昭和五四年に、岐阜市と中国浙江省杭州市との友好都市提携一〇周年記念事業として開設された。



中国人殉難者之碑



日中友好庭園杭州門



満蒙開拓者慰霊碑

杭州市は浙江省省都であり、国際的な観光保養地である。浙江省は鶉飼が盛んな地域でもある。庭園に中国情緒豊かな杭州門や、西湖を模した池が作られた。岐阜市と中国の友好関係は、昭和三十一年に中国の要請に応じて中国人捕虜殉難者遺骨を送還したことに始まる。昭和三十七年に訪中した松尾吾策市長が杭州市長と会見し、相互に友好の碑を建てることを約束し、碑文を交換した。日中国交正常化より一〇年も前である。庭園東側に白い塔と赤い煉瓦壁の「中国人殉難者之碑」があり、右側に「岐阜杭州友好盟約記念碑」と杭州市長の碑文「中日両人民世世代代友好下去」がある。左側には「友堂千里記念植樹」の碑がある。昭和三四年に岐阜地区在留朝鮮人帰国者が一〇〇本の桜を植樹したと書かれている。ここは、以前は新公園といわれた桜の名所であり、老人たちのゲートボール場であった。この庭園を取り囲むように、昭和三六年から四三年に設置された満蒙開拓青少年義勇軍の記念碑が三か所ある。

これら、護国神社内外苑・友好庭園にある多くの碑文を読むと、戦争について様々な想いがよみがえってくる。戦争を知らない世代を誘って訪れてはどうだろうか。

蜜蜂之碑



花木広場では老人たちが「ペタンク」を楽しんでいる。ここには、岐阜県養蜂組合の「蜜蜂之碑」、岐阜県労働者福祉協議会の「やすらいの碑」などかわいらしいものがある。

以上の庭園や御手洗池にはまた、平成天皇・松平静・塩谷鶴平・谷川健三などの句碑もある。散歩のついでに読解に挑戦するのも、楽しいのでは。



やすらいの碑

## 二 大切な遊び場 ― 忠節用水路 ―

？岐阜公園に「忠節用水」がある？

金華山トンネルの入り口付近に「忠節用水」の樋門（取入口）があるのはなぜだろう。



### 忠節用水の歴史

忠節用水は、岐阜市南部のために設けられた農業用水である。本来の取水口は、忠節村（現四屋公園）にあった。

岐阜町の旧名の井ノ口は、長良川から取水する樋門があったからであろう。天文三年（一五三四）の洪水で、その樋門が破壊され、井筋が井川（現在の長良川）になったといわれている。江戸時代、岐阜町とそ

の周辺が幕府領、さらに尾張藩領となり、この井川の南岸に堤防が築かれた。

江戸時代に尾張藩は、現末広町にあった御殿のため、鏡岩から御用水道を引いており、その余水が総構え（旧岐阜町を取り囲む土居と堀）の南の堀に流れていた。その後御殿が廃止されて、長良川からの取水は停止され、金華山の谷水や雨水を排水するため水路のみが残された（大宮町西裏にいまもある。第七節）。

明治時代になると、総堀は全くの悪水溜になり、クソ堀と呼ばれるほど不衛生になっていた。

一方、岐阜町南方の農村を領地にした加納藩は、井川から取水する必要がある、尾張藩と交渉して寛文一三年（一六七三）忠節村に取水口を取り立てた。この忠節用水は、昭和九年に長良川改修工事に伴って閉鎖されるまで約三〇〇年間、多くの水田を潤してきた。そのことを記念して、四屋公園に「普済功碑」が建てられている。

しかし、長良川の水位が低下して忠節用水の取水が困難になった。



地中化された柳生町の第一分水



改修された余水吐樋門



もとのままの鏡岩取水樋門



改修された「ロボット」水門



自然が残る逆水防止樋門付近の桜



御手洗地区のアジサイとヒガンバナ



そこで、四屋樋門に替わって、丸山下の鏡岩に新樋門を設け、もとの御用水道と総堀を利用して、忠節用水に水を送ることになったのである。クソ堀の浄化と用水確保の一石二鳥のねらいであった。

岐阜公園より上流は新水路が建設され、下流も全面的に改修された。完成は昭和九年である。新水路は、金華地区の東側から南の端を大きく迂回し、四屋公園の少し南（柳生町）で元の用水路に接続している。取水量は毎秒三・三立方メートルで、水量調節のため、四か所に水門がある（岐阜県近代化遺産に指定）。昭和四二年に東材木町に、逆水防止樋門が増設された。

## 用水の思い出

忠節用水は、鏡岩から西材木町まではほぼ一直線に伸び、兩岸が土手になっていた。土手には桜やモミジが植えられ、お花見の名所になっていた。子どもたちは、つくし摘みや昆虫採集、ホタル狩りを楽しんだ。途中に「ロボット」の愛称をもつ放水調節水門がある。その上手は水深が深く、飛び込みや潜水ができ、また護国神社前の辺は、流水プールのような感じで、絶好の水泳場になっていた。戦前の躍進日本大博覧会ときは、ここで鶴飼の実演が行われ、戦後の納涼博覧会には、ウォーターシユートが設けられた。

いま友好庭園南の土手には、アジサイが植えられており、ヒガンバナも増えて、それぞれの季節を楽しませてくれる。

ロボットより下流は、余り水を流す放水路で、ふだんは水深が浅かったし、折戸橋（おりとぼし）（おりととは下り口の意味、上茶屋町北）附近は水面に下りやすかったため、小さい子たちのよい遊び場になった。堤は、昔からの土手で根元は玉石積み、川底に水藻も生えていて、手拭いでもすぐえるほど小魚がいた。逆水樋門ができるまでは、シーズンオフの遊船係留にも使われた。伊勢湾台風で、堤



コミュニティ水路

防を越えて、川水が町へ流れ込んだため、昭和三七年、まず大宮陸閘が建設され、その後、上茶屋町・今町・材木町の三陸閘も建設された。

昭和六三年、この放水路が湊コミュニティ水路として改修された。住民や観光客が水辺の散歩を楽しむ新しい観光スポットに、ということであった。しかし、肝心の川水が流れなくなり、旅館などの排水路になってしまった。ホタルの復活どころか、川底の小石より多かったカワニナもほとんど見



材木町陸閘での水防団の訓練



岐阜公園に新設された水路



ホタルを養殖している水路



整備された歴史博物館南側

かけなくなった。

岐阜公園北の第二取水樋門は、文化遺産にふさわしい趣きある造りになっている。ここから総構えの内部に、用水を引き入れていた。水路は、両側が垂直に近い壁になっていて、底が深く、水面に下りることは難しい。岐阜公園が史跡公園化されたとき、上部を覆ってその上に「信長のまち」の水路が造られた。万松館東側のみ開渠のまま残された。ここは金華山の谷水が流れ込むので、それを利用して、ホタルを復活させ

ようと、近くに住む吉田尚弘氏が頑張っている。しかし自然繁殖する環境を整えることは、なかなか難しそうである。

大仏裏にはかつて桜並木があった。大仏町から堀江町辺まで、どこでも水泳や魚取りをして遊べたが、子どもたちの遊び場は、地区ごとに分かれていた。栄扇町にも桜や柳が植えられていて、風情を楽しむように船がつないであったこともあり、縁台将棋をする姿も見られたという。昭和四〇年代以降、道路に面した部分は、ほとんど暗渠

化されてしまった。雨水・排水が流れるだけであるから、住民も存在を忘れていた。

忠節用水は、井ノ口の名の由来を語る記念物であるし、水の流れは、日常生活に潤いをもたらす。金華のまちづくりにもっと活用できそうである。

平成二〇年、歴史博物館の南側水路のふたを外し、開渠に戻されたが、これを区間延長することや、積極的に活用することには、多くの問題があるらしい。まず北の放水路を、生き物が棲める場所に戻して、将来岐阜小学校と自治会が協力して自然観察園として守っていくことも一案である。



霞橋付近の水辺で遊ぶ野鳥



妙照寺前の水路



自然豊かな霞橋付近



伊奈波通り北の水路



末広町北の水路

## 三 ふるさとのメモリアル — 岐阜公園 —

### ? 万松館は公園か?

万松館ばんしょうかんの前に、「ここは公園ではありませんせん」という立て札がある。はじめて岐阜公園に来た人がよく間違えるらしい。本当に公園とは無関係なのかな。



### 思い出の場

岐阜公園は、地元住民にとっては懐かしい思い出の場である。たびたび改修されたので、人によって、また子ども時代・子育て時代・孫のお守り時代と、それぞれに違った思い出がある。一方で、公園の諸施設には歴史が秘められている。岐阜公園は単なる都市公園ではない。金華山・長良川と一体になった大規模な自然公園であり、史跡公園でもある。

### 万松館と板垣退助銅像

岐阜公園は明治一五年に、設置が許可されたが、開園したのは明治二一年（一八八八）である。明治一一年に、町の三紳士といわれた小川汲三郎くみさぶろうらが発意したという。明治六年の太政官布告を受けたものであるが、岐阜中教院ちゅうきょういんの支援策でもあったらしい。中教院とは「大教宣布」

運動を推進するため、神官・僧侶の中から教導職を任命し、それを府県単位で統括する機関であった。岐阜では国学者・高木真蔭まかげが努力して明

治一〇年に開業した。真蔭は伊奈波神社祠官にも選ばれており、明治八年に丸山神社を再建している。その麓ふもとを選んで千畳敷など二千坪余の払い下げを受け、伊勢皇太神宮の分霊を奉迎したのである。一年に真蔭が死亡したこともあって、中教院は経営に行き詰まった。明治一五年四月、濃飛自由党主催懇親会に出席した板垣退助がここで刺客に襲われた。中教院が貸席として利用されたことで、その名が歴史に残ったのである。大正七年有志によって板垣の銅像が建てられ、除幕式には板垣夫妻が臨席している。ただし今の銅像は当初のものではない。



板垣退助像  
(初代の像とどこが違う?)



長良橋の廃材で造られた三重塔



岐阜公園のシンボル女神像



岐阜市指定重要文化財の名和昆虫記念館

公園整備は、消防組が担当し、その費用は町家に資力に応じて負担させた。当初の主要施設は物品陳列場と倶楽部万松館であった。物品陳列場は、現歴史博物館附近に造られ、全国から名物を収集して展示した。万松館は会員制の宴会場で迎賓館を兼ね、老舗料理屋松半が魚屋町から移って経営に当たった。どちらも濃尾大震災で倒壊し、万松館は町の有力者によって再建されたが、物品陳列場は復興できなかつた。公園の維持が民間の手に余るようになり、明治二六年公園は、岐阜市所属に移されたが、整備できずに放置された。明治期の公園は、紳士たちが主導する民営公園であった。

万松館は公園のルーツであり、その周囲には松が、また中教院の前には梅、桜が大量に植え込まれていた。いまは万松館の庭を含め、紅葉がとても美しい。

### 名和昆虫博物館と女神の噴水

公園が再開されたのは、大正三年一〇月である。明治三九年に、名和昆虫研究所が京町から移転してきたことが、再整備の端緒となった。名和靖はギフチョウの発見者である。彼の「昆虫思想」普及をめざす志を知った新聞社が、義援金を募り昆虫標本博物館を建てて寄附した（現昆虫記念館）。大正八年には林武平の寄附により新たな昆虫博物館が建てられ、修学旅行のメッカと

なった。

また、明治四一年に「武徳殿（武道場）」が創設された。大正七年には衰退した中教院を移転させ、跡地を公園に編入して相撲場・運動場が造られた。こうして公園がスポーツの場になった。大正から昭和にかけて金華小が少年野球全国大会で活躍した一因は、この運動場にあるという。

公園が再開できたのは市内電車の開通によって足の便が改善されたことにもよる。金華山模擬城・板垣の銅像・三重の塔・白華庵などが建てられて観光名所としての充実も計られた。

今も公園の象徴である「女神の噴水」は、昭和一一年に開催された「躍進日本大博覧

会」の遺産である。この博覧会は、満州・朝鮮にも出品を求め、テレビの公開もあって、五二日間で一九五万人もの入場者があった（中部未来博は七三日間で四〇七万人）。一方武徳殿が、昭和二九年に焼失してしまい、体育施設に代わって、こどもや家族連れが気軽に楽しめる文化施設が作られた。その第一は小動物園で、ライオンやペンギンまで飼われるようになった。土地柄にふさわしい淡水魚水族館も作られた。昆虫博物館に加えて、県立図書館と児童科学館が建設されたことで、岐阜市の文化教育センターになった。

大正・昭和の岐阜公園は、基本的には市民のための都市公園だった。戦争で銅像も金属回収され、大水禽舎（たいすいきんしゃ）のツルもいなくなった公園だったが、こどもにとつては自然の動植物や地形だけで十分楽しめた。このように整備されたことで、子育てには最適の環境になった。

岐阜公園にあったスポーツ・学習施設は追々時代遅れになり、それぞれメモリアルセンター・畜産センター・県図書館・科学館・アクア・トトなど大規模施設となって郊外に移った。岐阜市が誇るこれらの施設は岐阜公園でノウハウを培ったのである。

## 岐阜市歴史博物館と信長居館跡

昭和六三年は岐阜市制一〇〇周年であり、それに向けた事業の一つとして、都市公園から史跡公園への抜本的な改造が掲げられた。観光資源として、これまでは金華山・鶉飼観光のつなぎの場でしかなかったが、この地を「信長居館跡」として浮かび上がらせることである。昭和五九年に千畳敷の発掘調査が始まり、六三年に信長居館跡が整備公開された。続いて公園の全面的改造が始まった。動物園、子ども広場が廃止され、

平成一二年、「信長のまち」、「信長の庭」が開設された。その池にある二羽の鶉像は、もと岐阜駅北口の大噴水にあったブロンズ像（中村輝の作品）である。天理教岐阜教会も移転させて駐車場が作られた。昭和六〇年十一月に開館していた岐阜市歴史博物館も、平成一七年三月に「戦国ワンダーランド」を目玉にした展示に改められた。魅力ある史跡公園になるよう、さらなる取り組みを期待したい。



織田信長居館跡



岐阜市歴史博物館とボランティア活動



## 四季のイベント

岐阜公園の魅力は、金華山と一体になった庭園としての美しさにある。四季それぞれに味わいがあるが、惜しいことに八方美人で、「○○の名所」という話題性が少ない。「信長まつり」「道三まつり」にも、いまは蚊帳の外に置かれている。

公園のイベントとして自慢できるものに、秋の菊花・菊人形展がある。岐阜市は明治・大正時代には「浅野菊楽園」などがあって、菊人形の先進地として有名であった。その伝統が復活したことは大変うれしいことである。

夏には、イルミネーションとホテルの夕べが行われる。イルミネーション実行委員

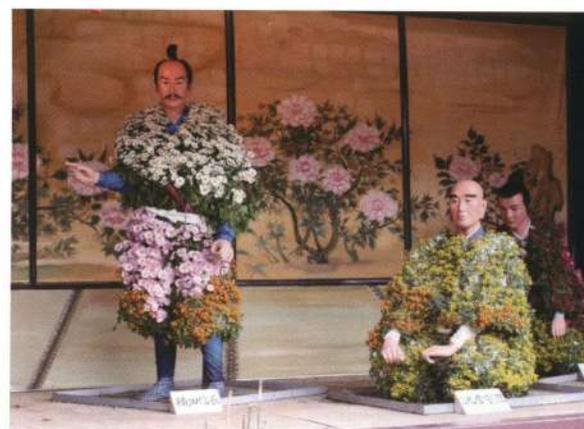


市民の手作りイルミネーション

会が組織され、多くの人が参加するようになった。内容も年々充実している。

また、歴史博物館や、加藤栄三・東一記念美術館では、絶え間なく特別展・企画展や講座・講演会を開催し、ボランティアとの協働、学校教育との連携にも努めている。休憩所「華松軒」では来園者にお抹茶サービスをしており、茶室では、「表千家芳青会」などによる茶会が催されている。

内容の乏しい建造物・記念物を増やしても活性化にはならない。そこで行われる展示・催事とその運営に当たる組織・人材を含めた整備・充実が必要である。



伝統ある菊人形



華松軒の月釜



## 四 川沿いの景勝地 — 鏡岩・御手洗・湊町 —

？「十八楼」の名の由来は？

ホテル「十八楼」は、むかしこの付近にあった建物の名前をとって商号にしている。もとの「十八楼」とは何だったのだろうか。



### 桜のトンネル

長良橋から納涼台にかけての長良川堤は、岐阜を代表するお花見場所として、毎年新聞の「花だより」欄に紹介される。かつては、町内総出で護国神社の外苑へ岐阜祭りの「山おろし」に出かけるところもあった。近年は、桜の木数が減り、樹勢も衰えてきたようである。

### 納涼台

市営納涼台は、鶺鴒遊覧の大衆化を図るため、大正一二年に開設された鶺鴒観覧所



納涼台付近



樹林広場付近



護国神社付近はお花見名所

に始まっている。鶺鴒遊覧は、戦争によって中断されたが、昭和二八年に大衆鶺鴒観覧所として再建された（三六年に第二観覧所を増設）。しかし、遊船による鶺鴒観覧やロープウェイによる岐阜城見学などに観光客を奪われ、現在は閉鎖されている。昭和六一年の金華山トンネル開通で鏡岩水源地附近はすっかり静かになった。この辺は大樹が多く茂り、秋には黄金色に染まって美しいところである。いまは「かじか」と鈴虫水車「山水庵」の飲食店二軒が、営業を続けている。

## 岐阜市水源地

鏡岩水源地は、昭和五年に市南部地区への上水道の水源として建設された。この時建設されたポンプ室とエンジン室は、とてもおしゃれな外観を持ち、壁面全体に川原石を埋め込んだ象徴的な造りである。平成一三年に国の登録有形文化財になり、翌年からそれぞれ「水の体験学習館」「水の資料館」として活用されている。なお、安定した配水を行うため、平成一三年度末に、背後の金華山の内部をくりぬいた巨大な配水池が完成した。直径三〇メートル・高さ三〇メートルの円筒形空洞で、給水対象一一人分の最大配水量を八時間分貯水できる。水の資料館から長い維持管理用トンネルが通っており、見学することができる。



水の資料館と管理用トンネル



## 御手洗池

池は丸山神社（元伊奈波神社）崖下にあるその御手洗だったという。底なし沼だとか、御殿女中の祟りがあるとかいわれ、薄暗くて踏み込むのが怖い場所であった。水面に張り出した枝に、モリアオガエルの卵が下っていることもあった。岐阜市の名木になっていた「巨蛇ケ藤」がなくなったのは残念だが、昭和三五年「古城の滝」が作られ、周辺一帯が滝庭園として整備された。



明るくなった御手洗池の付近

## 富茂登小学校

明治六年から四四年まで、友好庭園の北に富茂登小学校があった。当時は川沿いに家並みがなくて、校門は長良川に面して開かれていた。校下の富裕さを反映したモダンな洋式建築で、閉校後は鶯谷に移築され商工会議所となったほどのものであった。その跡地に最近まで県知事公舎や国鉄、電電公社の宿泊所があったが、いまその一郭にマンション「ウェリスリビオ岐阜公園」が建設されている。

## 鵜飼観覧船事務所

鵜飼は全国一二か所に残っているが、岐阜の鵜飼は名実ともに群を抜いた存在である。鵜匠が宮内庁式部職に所属しており、毎年八回ほど御料鵜飼を行うこと、観覧船事業が市営で、その乗船客数が全国一であること、また技術も高度で、各鵜匠が鵜一二〇羽を操ることや鵜船六艘による集団漁法であることなど、多くの特色がある。



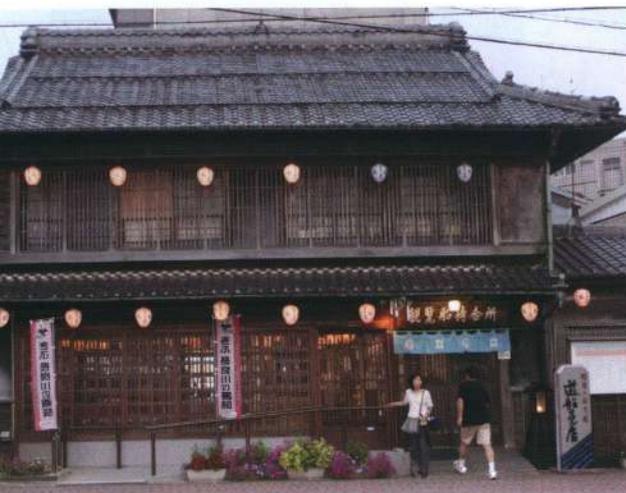
沢田家の石垣の手前に小学校の石垣が続いていた。



鵜飼観覧船造船所



鵜飼観覧船事務所



旧鵜飼観覧船待合所（新築中）

昭和五六年にポケットパーク一号として長良橋取付け道路上に「鵜かがり」ができた。館野弘青作の鵜匠像や碧梧桐（へきやどうら）の句碑がある。六一年には道路の東側下に「名水」もできた。長良川中流域が環境庁選定の名水百選に選定されたことを記念したもので、松尾芭蕉の句碑、北原白秋と川端康成の文学碑などが置かれている。

岐阜市の顔ともいえるべき鵜飼であるから、市としてもその維持発展に尽力してきた。観覧船事務所は昭和六三年に建て替えられ、川灯台の模型を建てるなど周辺の町づくりにも配慮してきた。待合所は昭和五八年、旧「柿内材木店」を利用して開設されたが、平成二〇年耐震強度不足が指摘され、建て替えることになった。

観覧船は一時、一四五隻に達したが、今はじっくり観覧できるように四五隻に制限している。警備船一一隻分と合わせて船頭登録者は一三〇人ほどいる。中央卸売市場関係者など本業の余暇時間に働く人が多いという。踊り船の踊り手は「西川流」を習った若手一〇人ほど（代表杉山寿生）で担当

している。平成一七年から、友好庭園の北東にある造船所も見学できるようになった。豊田忠光棟梁（とらりょう）は、もと長良橋北詰にいた船大工の七代目で、新長良橋建設で立ち退きになり、現在地に移ったという。三〇人乗り以下の観覧船を毎年二隻ずつ建造し、鵜飼開きと七月下旬の御料鵜飼の日に「舟おろし」をしている。一隻造るのに一四〇日掛かるという。

観光客が飲食物や土産品を求める店舗として戦前から付近で営業しているのは、東寿司・魚光（仕出し）・小森酒店・玉井屋製菓舗・名産館（提灯など）・住井商店（団扇）などである。



住井商店の団扇づくり

## ポケットパーク

昭和五六年にポケットパーク一号として長良橋取付け道路上に「鵜かがり」ができた。

名産館の提灯づくり





## 旅館

昭和三〇年の住居地図をみると、湊町界隈にはみなと館・小川・美ノ里・草月荘・鶴川・松源・玉家・月見荘・十八楼・大竹など多くの旅館があった。

十八楼は舟宿山本屋が前身である。幕末万延元年（一八六〇）ころ、芭蕉の旧跡「十八楼」の再興をめざして屋号を改称したという。ただし、貞享五年（一六八八）松尾芭蕉が来遊して、十八楼と命名した、賀島鴨歩の水楼は玉井町カワボシ附近といわれている（もつと西方という説もある）。

十八楼とはこの付近が、中国の名勝、瀟湘八景（湖南省）と西湖十景（浙江省杭州市。岐阜市の姉妹都市）を兼ねた風景だとほめたたえたものである。

「ホテルパーク」は、大正六年名古屋から移転開業

したもので、川端康成の小説「篝火」にも登場する。戦後は進駐軍将校官舎として接収されたが、昭和二十七年に「みなと館」として営業を再開した。なお、付近の澤田家なども同様に接収され、折角の和風建築に白ペンキが塗られてしまったが、白い家とブランコのある芝生の庭は、当時の子どもたちには憧れの的だった。

小川・いとう・大竹は料理旅館であって、政治家などがひいきにしていた。いとう旅館では舟橋聖一が近くの紙問屋をモチーフにして「白い魔魚」を執筆した。芭蕉園は映画のロケ隊がよく利用し、長谷川一夫などが泊まった。

いま長良川温泉旅館協同組合に加盟しているのは十八楼・ホテルパーク・金華旅館（と北岸の四軒）のみである。昭和六二年に鶴川が廃業し、ローヤルシャトーウカワという一〇階建てマンションを建てた。この頃から旅館の廃業が目立ち始め、その跡地などに高層マンションが建ち始めた。特に平成一五年にライオンズマンション岐阜公園（日の丸タクシー跡、一一階建て四〇戸）とメイツ長良川（松源・玉家跡、一一階建て五〇戸）が相継いで竣工したことが注目を集めた。大手企業が、岐阜市の優良建物等

整備事業の指定を受けて建設したものであったからである。旅館街はすっかりマンション街に変貌した。

新名所 マンション街の景観



# 五 上川筋への川港 — 上材木町・湊町・玉井町・元浜町・西材木町 —

？秘密基地？

日中友好庭園杭州門の向かい側にあるこの施設の正体は。



長良橋

現在の長良橋は、すでに五代目である。長良村が岐阜市に合併したのは、昭和七年である。しかし、斎藤道三が<sup>おおが</sup>大桑城下（現山県市）の住民を移住させて大桑町筋を開いたことからわかるように、岐阜町と長良方面とのつながりは、古くから重要なものであった。

明治七年、いち早く岐阜町の有力者が株式会社を組織し、船を並べた上に板を敷く構造で明七橋を架設した。以後、明治一七年に木製の恒久橋ができ、明治三四年には県費によって架け替えられ、渡り賃が廃止された。大正五年には鋼鉄製になり、電車も通行できるようになった。現在の橋ができたのは昭和二八年である。三代目の廃材で岐阜公園の三重塔が作られたこと、四代目は床が木材を並べた造りだったからシロホン橋とあだ名が付いたこと、五代目は橋の高さをめぐって反対運動が続いたため、強制代執行によって昭和三二年にようやく開通したことなど、いろいろ話題になった。

川まつり

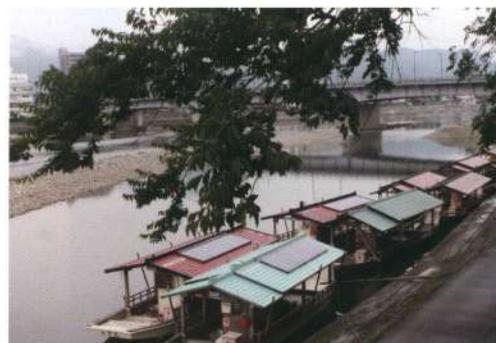
七月一六日に、長良川の川まつりが行われる。以前は、伊奈波神社と長良神明神社の<sup>みこし</sup>神輿を長良橋南詰めに据えて祭事をしたが、新長良橋建設後は湊町秋葉神社（と神明神社）で行っている。紅白の提灯を、いろいろな形に飾り付けた提灯船も出された。今は、鳥居と三重塔の二隻になったが、神明神社から秋葉神社裏までの川面を、神職を乗せてお祓いをする。川まつり前に川に入るとドチに吸い付かれる（河童にしりこ





こよみのよぶねの出発

玉を抜かれる)などといわれたものである。平成一八年から、岐阜市出身のアーティスト・日比野克彦の提案で「こよみのよぶね」が始められた。冬至の日に観覧船一三隻が一から一二の数字と干支の大形行灯を点けて川面を巡航させるものである。



場になった。  
西材木町法蓮寺の門前に、石の地藏尊がある。これは長良川で水死したこどもを悼んで、三浦・北川家などを中心に御詠歌を組織して浄財を募り、善澄寺立江地藏尊の分身を祀ったものである。

### 長良川役所と材木屋

湊町は長良川の上流、武儀郡・郡上郡と結ぶ川湊であった。明治中期の移出入をみると、移入金額は雑穀・木材・紙の順に多かった。移出は楮・木材・紙の順で、紙屑や傘もあつたが、大幅な移入超過となっている。ここは、材木や美濃紙を仕入れ、加工して再出荷する問屋街だった。その中で紙の取引は幕末ころから盛んになったもので（九節参照）、元来は木材市場だった。



西材木町の立江地藏尊

江戸時代、現長良橋南詰め附近に、長良川の水運を支配する尾張藩の長良川役所（関所）があつた。東隣にはその実務を担当する（筏や舟から税金を徴収する）付問屋西川家があつた。いま西川コーポラスがあるところであり、役所の目印であつたと思われる太いムクノキが残っている。ここから元浜町西端までの川沿いには、土場（船着場）の目印だったムクノキやエノキの大木がいまも各所に残っている。

「岐阜木材界今昔物語」には、金華地区に四七軒もの関連業者があり、その半数がこの地区にあつたとある。筏を利用する最大手は、伊藤孫左衛門・雛屋木材・丹羽木材と三共組（忠節町岩崎力丸）であつた。

玉井町の雛屋桑原家は、家伝によると、先祖は京都から来た人形商人だという。江戸時代中期には筏乗り四六人前のうち七人前の株を持ち、その総代であつたことがわ



長良川役所跡のムクノキ



旧篠田薬局



かる。江戸時代後期には、役人化した西川家に替わって材木問屋として発展した。一〇代目桑原善吉は、十六銀行頭取・岐阜商工会議所会頭・貴族院議員などを歴任した。前掲書によると、市内には雛屋の奉公人だったという木材関連業者がかなりあった。安田梅吉（中新町）・西垣秀吉（矢島町一）・森嘉七（西材木町）・森義男（本町四）・野口嘉七（大久和町）などである。

西材木町の丹羽家は、家伝によると、先祖は戦国武将丹羽勘助氏次の一族だったが、江戸時代初期に、与三右衛門の名で材木商人となったという。川役所・西川家が尾張藩領の板取川流域を対象に取り引きしたのにたいし、郡上藩と結ぶことで成長を遂げ

たという。宝暦九年（一七五九）以降は岐阜町人を代表する惣年寄に任命されて、その地位を固めた。

湊町伊藤孫左衛門は、永年市会議員を勤めた。いまは伊藤建設となり、日中友好庭園の西にユニークな展示場がある。

材木業者は鉄道開通により順次岐阜駅周辺へ移転していった。いま雛屋林材は城東通りで、丹羽木材は茶屋新田で営業している。

大日本土木（株）は御手洗の地で発足した。その始まりは、大正一三年に遠藤健三が設立したエンド建築工務所である。旧篠田薬局の洋風二階建てはその最初の作品であるという。遠藤の提唱で、喜多福松・安田梅吉・桑原善吉・丹羽種次郎と五者が昭和一七年に大洋組を結成した。その後、軍当局の幹旋により企業合同して大日本土木（株）となった。昭和二七年、安田梅吉が第二代社長に就任し、昭和五八年まで勤めた。その間に新幹線や名神高速道路の建設にも参加する全国業者に成長した。

湊町を象徴する業者として、ねじかや松井運送店があった。現十八楼の北西部に船着場を持っていて、荷物の配送を手配して



桑原善吉家

いた。通りの向かいには、茶徳という茶碗問屋があったという。洋画家・坂井範一もこの近くに住んでいた。

### 玉井町

江戸時代に、この附近は中河原新田（村）と呼ばれていた。玉井町は、中河原三か町の中心街であり、その庄屋を勤めることが多かった桑原善吉と松井三治郎は、ともにここに住んでいた。

十六銀行は明治三〇年富茂登出張所（同行最初の支店、現NOA研究室）を桑原家の前に開設している。

岐阜川原郵便局は、明治二七年岐阜河原湊町郵便受取所が、篠田薬局に置かれたの



松井三治郎家の跡地



旧十六銀行富茂登出張所



屋根神と半鐘



カワボン松井家

町裏に並ぶ倉庫群



川原町屋（旧大野家）と内部

が始まりで、たびたび名称と所在地が変更されたが、大正一〇年から昭和七年まで、玉井町の十六銀行支店東側に置かれていた。松井三治郎は、マルカワの屋号で知られた文政元年（一八一八）創業の老舗紙問屋であった。いまその跡地にイタリア料理店ラ・ルーナピエーナが建っている。

丁子屋深尾家は懐紙が専門であり、紙兵岡田家は、松井家の別家で紙ナプキンを主体にしてきた。岡田家工場跡地に、「粋いき元気の金華館」が建てられた。現川原町屋は製紙原料商大野家の旧宅である。折戸橋からの景観形成に欠かせない野々垣家も、松井家の別家の紙商であった。

岐阜祭りで京町地区が曳く山車「清影車」はもと中河原三か町のものである。三か町とも山車を保有していたが、濃尾震災で焼失してしまい、玉井町の謡曲「玉ノ井」を舞うからくり人形が残ったので、三町内としてからくり山車一両を建造したものである。毎年交代で奉納祝いをしてきたが、伊勢湾台風後に伊奈波神社へ寄進した。なお玉井町の名はこのからくり因んだものかも知れない。

## 元浜町

かつて元浜町の西南端に後藤・大野・大橋の三軒の薪炭商があった。信長から認可された薪座たきざに始まるという由緒ある職業である。美濃市から日野にかけての舟が運んでくる薪を荷揚げして、岐阜町内外に供給する仕事であった。かつては、早田への渡し舟もあり、川岸にエノキの大木があつて、時代劇のロケ隊が訪れていた。なお、中大桑町南谷家も薪炭商であつた。平成四年に金華まちづくり会がその蔵を活動拠点にした。

ここの町裏には由緒ある庚申堂こうしんどうがある。寺伝によると、古くから東伝寺という庚申

堂があつたが、斎藤義龍の時代にこの辺り一帯に伝燈寺という大寺が建立された。義龍の死後廃寺になったので、信長によって庚申堂が再建されたが、それも洪水によって破壊され、慶長六年（一六〇二）に再興したものという。もとは境内が広く、老人たちの社交場、子どもの遊び場になっていた。今も美江寺住職による庚申会が続いているが、会衆はめつきり少なくなった。



川原庚申堂と三猿



古い町屋を新感覚でデザインした店舗



元浜町船着場跡



野々垣家



地元で生産を続ける富国工業(株)

## 川畔町

かつて長良川の本流(古川)は、早田村の北側を流れており、早田は岐阜町に接していた。元禄時代から今の川筋(井川)になったといわれ、中河原北側の町裏は、正式には今も字早田である。紛らわしいので、戦後その西寄りを川畔町と通称することになった。字早田の大部分は、雑屋の材木置き場であったが、戦争中にこの町裏に、湊町から元浜町・みどり橋へ抜ける新道が開かれた。江戸時代に松尾芭蕉が来遊した十八楼があった場所であり、眺めがよく閑静な土地なので、戦後この道沿いに大竹・芭蕉園・いとうなどの料理旅館ができた。いま旅館は営業していないが、趣のある和風家屋と洋風住宅が並び、レストラン・クラ



旧いとう旅館



旧大竹旅館



旧丹羽木材本社とお稲荷様



丹羽家



フト店などができている。平成一三年に川原町まちづくり会が発足し、岐阜市都市景観重要建築物等指定制度を活用して(一〇件の指定を受けた)景観の維持につとめている。平成一四年に玉井町筋が都市景観賞に選ばれた。

## 西材木町

西材木町には丹羽木材(株)があった。丹羽木材の工場は、長良川から木材を運び込むため、堤防を貫通する閘門こらもんがあることで有名だった。昭和八年に長良川改修工事によって閘門が締め切られたが、トロッコの線路が後まで残っていた。また、戦後まで郡上郡相生村に工場を持っており、いま元の会社事務所に住んでいる山下氏は、郡

上出身で木材を運ぶトラック業者だった。会社は昭和五三年に茶屋新田へ移転したが、丹羽家と敷地はそのまま残っている。住宅や倉庫は濃尾大震災の翌年、明治二五年にいち早く再建されたものである。屋敷内には、もと金華山にあったという稲荷があり、いまも年四回お祀りしている。森銘木店の初代は、雑屋で修業した人である。二代目から銘木専門店になった。

紙商だった天野利兵衛家は、家伝によれば二階堂出羽守の子孫であるという。江戸時代には、代々町年寄を勤めた家柄で、清泰寺の開基徳三上人も出ている。別に法運寺の南で電線製造所を営んでいた天野太郎家もある。

## 六 近代の古城址再開発

— 大宮町一〜二丁目・松ヶ枝町・松下町・松山町・夕陽ヶ丘 —

？極楽への階段？

この上には何があるの



### 岐阜城山下

この地区は、もと岐阜城の城郭の一部であり、武家屋敷が置かれていたが、慶長五年（一六〇〇）の岐阜城陥落後は荒廃のまま放置された。その後、町に近い部分は畑地に開墾されたが、金華山の麓には竹藪が広がっていた。江戸時代には、ここは古屋敷新田と呼ばれ、その特産物が竹皮・礫・松茸という状態であった。

明治六年岐阜県庁が岐阜町南郊に開設されたことにより、官公吏・奉公人など移入

人口が増加した。ここが再び住宅用地として脚光を浴びるようになったのは不思議な縁である。

### 大宮町

ほとんどの土地が雛屋など少数の人の所有地であり、地主によって借家が建てられた。高級勤め人向けの板塀を廻らした屋敷と、奉公人向けの長屋の二種類があった。

「大宮町一丁目史誌」は、過去の居住者として鷹森六八連隊長と鳥井軍医中將、渡辺病

院や日赤病院の院長、伊奈波神社宮司、岐阜商業や富田学園の校長など多数の名士をあげている。

一方、雛屋など川原町の商家で働く人も多かった。

大宮町の町名は、中教院にちなむものであるが、それに替わって明治一九年に、天理教岐美教会が進出した。昭和四六年に新築された神殿が偉容を誇っていたが、平成九年、岐阜公園再整備のため、市の要請を受けて長良福光へ移転した。跡地は観光



戦前に建ったアパート



金華地区に多い画廊・古美術商の一つ



大仏裏の長良橋通り（歩道下が忠節用水路）

バス駐車場と総合案内所などが整備される。歴史博物館の前にファッションホテルが出現して驚かされたが、さすがにこれは長続きしなかった。平成元年ここにオンダ国際特許事務所が進出した。トヨタグループとも取引し、東京・大阪・上海にもオフィスを持って、業界のトップをめざす事務所である。大宮町はいつも金華地区に新風が吹き込む窓口である。

### 禅林寺

大桑町通りの正面に当たる金華山麓に、急な長い石段があり、その下に白華庵道と記した石碑がある。白華庵は明治三五年伊自良村の臨済宗甘南美寺の渡辺紹文老師が隠居所として建てたもので、岐阜公園の展望休憩施設を兼ねていた。大正一〇年に落成した本堂も含め、他から移築したものであるという。戦後、禅林寺の寺号を得て再



アジサイ寺禅林寺

興され、いろいろな団体が風趣を愛でながら会合する場にもなっていた。京町小学校が、虚弱児の日曜教室に使っていた時代もあった。近年はアジサイ寺として知られるようになった。ここの小字名は三重塔とおなじ槻谷である。

### 松下町・松ヶ枝町

松下町の町名は、百曲がり道の登り口にあった名木「手の平松」に因むという。松ヶ枝町も同様であるといわれるが、郷土史家の道下淳氏は、明治二五年一月に置屋団地として開町したのだという。芸者嫌いの小崎岐阜県令が、濃尾震災後の復興景気で繁昌している芸者を取り締まるため、大仏裏と金津郭内に集めさせたもので、年末までに六戸一六人が入居したという。萬松館が迎賓館であり、伊藤博文ら名士が来泊して芸者を呼ぶことが多かった。戦後まで



松ヶ枝町の路地

松ヶ枝町に伊藤公の想われ人であった西川小房という日本舞踊の師匠がいた。この町にも連隊長や警察隊長の住まいがあった。各務虎雄（美濃派俳諧獅子門道統三七世）もこの町の住人であった。松下町との境に南北に一五〇メートルも狭い路地が貫通している。

戦前の岐阜市案内は藤谷家の庭にあった花の木（目通り五尺四寸・高さ五丈）を市の名物に挙げている。残念ながら戦後台風によって倒れてしまった。

住民の誇りは、大正年間にラムビニ幼稚園が開設されたことである。岐阜市最初の幼稚園であったという。その跡地に昭和三四年浄土宗清泰寺が移転してきた。念仏行者徳本上人とその弟子徳三（西材木町天野利兵衛）の教えを受け継ぐお寺である。今泉美江寺の観音堂を使用していたが、明治一〇年独立して藤右衛門洞に移った。この徳本が岐阜大仏開眼供養の導師であったことはあまり知られていない。



清泰寺（ラムビニ幼稚園跡）

### 松山町・夕陽ヶ丘

松山町付近は藤右衛門洞と呼ばれ、藪が広がっていた。松ヶ枝町の大西家はここの竹を仕出す傘竹問屋だった。

ここに黙山火葬場もくざんが開設されたのは明治一九年である。桑原善吉らが町場での土葬廃止と、近代的火葬場の必要性を訴え、その経営に当たる難遁社なんとんしゃを組織した。ここには宝暦三年（一七五三）、曹洞宗の金龍山圓林寺が建立されたという（開山は黙山元轟）。この寺は廃寺になったが明治期まで古堂が残っていて、火葬場施設の一部として利用された。その後葬礼を営む寺院の必要が感じられ、大正八年、



福島の曹洞宗寺院を移転する形で自福寺が創建された。近年施設が一新され、煙突跡には観音菩薩像が建てられている。しかし、かつての風情を惜しむ声もある。明治期以後にできた松下町禅林寺・松ヶ枝町清泰寺・松山町自福寺は、いずれも



七曲がり登山道

風変わりな感じがするお寺である。

松山町は、岐阜城の大手筋であった七曲がり道の登り口にあたる。明治四三年、岐阜保勝会によって山頂に模擬天守閣が建てられ、七曲がり登山道が整備された。それ以後、開発が進み、昭和六年に松山町が誕生した。昭和三年には夕陽ヶ丘が分離独立している。昭和三年には金華山ドライブウェイが開通した。この工事によって水脈が変わり、山麓一帯では湧き水が涸れた



山麓一帯では湧き水が涸れた

り、大水が出たりするようになったという。

夕陽ヶ丘には岐阜県警察学校があった。昭和三年、警察練習所として開設され、昭和二年警察学校と改称されたものである。昭和四〇年に三田洞へ移転したが、練習所時代に始まった四月と一〇月の

の初任科生による金華山早駆け競争は、いまも続けられている。その後県消防学校として活用されたが、これも昭和四八年に川島へ移転した。その跡地に岐阜県歴史資料館が建設され、昭和五二年に開館した。岐阜県行政文書を収集保存する管理部と旧幕府笠松・高山両陣屋文書などを整理研究する歴史資料部とがあるが、地元には馴染みの薄い施設であった。しかし近年は、史料紹介展や親子歴史教室を開催するなど施設PRに努めている。警察学校の運



千歳窯跡



岐阜県歴史資料館

動場跡には、夕陽ヶ丘県営住宅（五階建て三〇戸）が建設された。

夕陽ヶ丘には、大正から昭和初期にかけて林晃三（ちんこうさん）が作陶をした千歳窯（ちとせがま）の跡が残っており、版画家・武藤六郎は警察学校の門前に住んでいた。

## 岐阜森林事務所

夕陽ヶ丘に、山荘風の趣のある木造建築がある。林野庁中部森林管理局（長野市）に所属する岐阜森林管理署（下呂市）の、さらに下部組織である岐阜森林事務所である。昭和六二年にその前身である岐阜営林署が、市内青柳町からここに新築移転してきた。その後、国有林事業の大改革が始まり、ここは平成一五年度末で廃止される運命にあったが、地元の要望で現地事務所として維持されることになった。森林事務所と治山事務所が同居しているものの、職員はわずかで、ほとんどが本署派遣の駐在員である。管理しているのは岐阜・美濃・関・山県各市にある国有林などである。濃尾大地震で荒廃した根尾川流域の修復がやっと完成し、板取川流域に移るところだという。体験教室などに使えるスペースもあるが、人手不足で活用はままならないようだ。ポ

ランテニアとしてここにある資材を借り出してクラフト教室を開く人はあるという。玄関前に金華山のシンボル、ツブラジイの古木が立っている。なお、隣に岐阜市自然・環境保全学習センターがある。平成一六年に開設されたもので、金華山サポーターズがここに事務所を置いて、保全・啓発活動をしている。



夕陽ヶ丘県営住宅



岐阜森林事務所と自然を活かした工作



# 七 尾張藩による旧城下再生 — 木挽町と益屋町・大仏町・梶川町 —

？サルが御堂のお守り？



元浜町にある庚申堂（こうしんどう）の屋根には猿の像が乗っている。庚申堂とは何だろう。

## 古屋敷

この地域は、かつて岐阜城の一郭を形成する武家屋敷地で、山下と呼ばれていたらしい。慶長五年（一六〇〇）岐阜城陥落（かんらく）にもなっていたん荒廃したが、五〇余年たつてから、その古屋敷が尾張藩の手で整備され、岐阜町附属の新田（村）となった。この村は、岐阜町と狭い水路（今町筋の東裏）で区切られており、さらに中央部にも南北の水路（大宮町の西裏）があつて、その西

半分だけが屋敷地として開発され、東半分は、幕末まで畑と藪であつた。いまもこの二筋の水路は、家並みの裏に残っている。この寺院は、基本的には古屋敷新田になつてから建てられたもので、禅宗の寺院が多い。再開発のために作られた承応三年（二六五四）の岐阜町絵図が残っている。それによると、当時は覚林寺（かくりんじ）しかなかった。それから一〇年ほどの間に、木挽町（こびきちょう）・茶屋町の町筋ができ、御鯨所（おししよ）と岐陽院・般若寺（はんんにやじ）・常在寺（じょうざいじ）・妙照寺（めうしょうじ）が建てられた。少し遅れて正法寺（しょうぼうじ）、さらに地藏寺（じざいじ）ができた。

金華地区三三か寺のうち一〇か寺が、旧富茂登村（ふもと）古屋敷に存在している。やや散在気味なので、伊奈波通り一丁目（いなな）や木造町（きぞうちやう）に比べると寺町という印象は弱い。

## 木挽町の三か寺

木挽町は、旧岐阜町の東北にあり鬼門に当たる。鬼門には神仏が祀られるが、ここは、とくに庚申会（こうしんかい）が盛んだつたようである。人の体内には、三尸（さんし）という虫がおり、六〇日

ごとにある庚申（こうしん）の日は、人が眠ると、天に上つてその行状（こうじやう）を報告する（こうほう）という俗信（ぞくしん）があり、その夜は、眠らないよう御堂（ごだう）に集まつて、



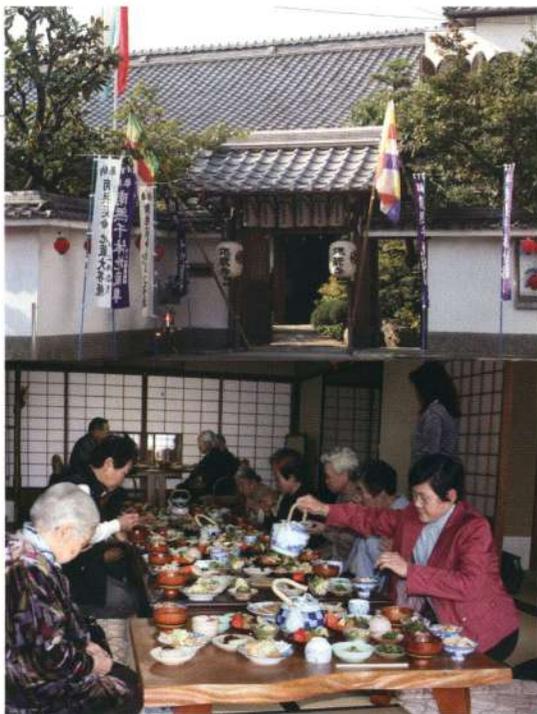
大宮町裏の水路（旧内堀説もある）



玉秀稲荷のある岐陽院



元御鯨所裏の水路



地藏寺の地藏盆（上）と庚申待（下）



般若寺と青面金剛像



雑談や飲食をして過ごす習慣があった。庚

申の本尊は、青面金剛であるが、「見サル・聞かサル・言わサル」の三猿が、置かれていたことも多い。なお裏鬼門に当たる四屋町にも庚申堂がある。

岐陽院（臨済宗）の開山は、長良崇福寺物堂和尚で、もと総構えの土居だった場所を拝領し、隠居所を設け、鬼門除けの祈念所として岐陽院と名付けた。いまも初午祭と施餓鬼会には、崇福寺住職が読経に來れる。

般若寺（天台宗）は、今泉美江寺の盛哲和尚が創建し、最近まで美江寺に所属していた。庚申堂を本堂とし、古い三猿像や庚申塔がある。境内からの岐阜城の眺めがすばらしい。江戸時代には、般若寺から上茶屋町に出る道をオサル横町と呼んでいた。

地藏寺（臨済宗）は、現在の米扇町にあった庚申堂を移し、妙心寺派の盤珪和尚を開山に勧請して創建された。庚申待や千体地藏供養で賑わうお寺で、旧公園前電停の場所があり、よく目立つ。

庚申は、女人の罪障を除くとされることもあって、木挽町の三か寺は、いずれも尼寺になっていたが、近年その後継者を得ることが難しくなってきた。

### 岐阜城山下をしのぶ諸寺院

岐阜城の大手は、七曲がり口であり、搦め手が、百曲がり口であった。尾張藩は、この間を町場とはせず、寺院屋敷などで景観を整える方針をとった。

覚林寺（臨済宗）は、織田家家臣の子孫が、上加納瑞龍寺悟溪和尚を開山として創建した。井ノ口山下に伝來した薬師如来の古仏を祀ることで、この地で戦死した人々を、弔おうとしたのであろう。元和元年（一六一五）創建というが、古いわりによく知られていないお寺である。

常在寺（日蓮宗）は、美濃国守護代の一族、齋藤利藤が宝徳二年（一四五〇）、京都妙覚寺日範を開山として、創建したという古刹である。しかし慶長五年の兵火



常在寺の齋藤道三公追悼式



覚林寺の施餓鬼会

妙照寺の芭蕉の間と  
三光稲荷



建された。古屋敷に移転したのは、やはり江戸時代になってからのようである。松尾芭蕉が一月間滞在したお寺であり、その建物やカキツバタの池を保存している。

で焼失し、一時今泉村へ移転した。現在地は、織田秀信の重臣だった梶川弥三郎屋敷跡といわれるが、ここに再建したのは寛文五年（一六六五）である。斎藤道三ゆかりのお寺で、道三・義龍の画像（国重文）を所持している。

妙照寺（日蓮宗）は、天文三年（一五三四）、京都妙顕寺の日舜によって今泉村に創建された。古屋敷に移転したのは、やはり江戸時代になってからのようである。松尾芭蕉が一月間滞在したお寺であり、その建物やカキツバタの池を保存している。

三年（一五三四）、京都妙顕寺の日舜によって今泉村に創建された。古屋敷に移転したのは、やはり江戸時代になってからのようである。松尾芭蕉が一月間滞在したお寺であり、その建物やカキツバタの池を保存している。

お経の紙で表面を覆った乾漆の大釈迦佛像と、大仏殿が完成したのは、天保三年（一八三二）である。ただし、大仏建立は寛政六年に始まり、文化八年に開眼供養をしている。なにしろ像高一三・七メートル（奈良大仏は一四・七メートル）ある。江戸時代に、民間の力でこのような大仏を造ろうという構想が生まれたこと、実現のために、

### 岐阜大仏



正法寺と旧満願寺の石塔



林稲荷の月参り



大仏殿の施餓鬼会と大仏フェスティバル



わう。常在寺では、稲荷が仏様として祀られ、

この地区の諸寺院は、創建が比較的新しいといふことは、住民との関係がホットであるともいえる。境内には住民が奉祀する様々な神仏が置かれている。その第一は、お稲荷さんで、岐陽院の玉秀稲荷、覚林寺西の林稲荷、大仏殿の運授稲荷、常在寺の最上位経王大菩薩、妙照寺の三光稲荷などがある。三月の旧暦初午の日には、紅白の幟が立てられ、甘酒などがふるまわれて賑わう。常在寺では、稲荷が仏様として祀られ、

### 季節の行事

仏像造りにも建物にも独特の技法が考え出されたことは、岐阜町の誇りにしてよいと思う。五百羅漢も大仏と同時につくられた。

妙照寺では、社前に篝火を立てて住職が読経されるが、林稲荷は手力雄神社から神職を迎えるなど、様々な変化があつておもしろい。林稲荷は、毎月第二日曜日にも、伊奈波神社の神職を迎えてお祀りしている。年に六回ある庚申の日には、地蔵寺・般若寺と元浜町の庚申堂で庚申会が催される。地蔵寺では、毎会旬の野菜を使ったご馳走が出されるので、このお齋が目的という参会者もあつて賑わしい。

八月の地蔵盆には地蔵寺で千体地蔵尊供養が催される。

なお、七月は寺ごとにお施餓鬼が催される。正法寺では、境内に独特の施設を設けて、多数の黄檗宗僧侶が読経されるので、夜店が出るほど参詣者がある。近年は、地元がその前後に「大仏フェスティバル」を開催し、盆踊りなどが行われている。

平成二〇年「井の口まちづくり会」が発足した。初午などの年中行事も、昔の賑わいを取り戻すような、効果があがることを期待したい。



大仏フェスティバルのバザー



「井の口まちづくり会」を励ます木挽太鼓

## 御鮎所

益屋町は、江戸時代、山口横町と呼ばれ、岐阜城搦め手の百曲がり道に通じていた。

この南にあつた、御鮎所の遺構が何もなくなくなつてしまった。長良川鶴飼は、徳川將軍家に、鮎鮎を献上させるために、手厚く保護されてきたのである。御鮎所あつての鶴飼であつた。現益屋町の南北筋は、献上鮎鮎の出発点であつた。御鮎所御用を勤めたのは河崎喜右衛門・善太郎両家である。その子孫河崎助太郎は、日本毛糸紡績（現ニツケに合併）など諸会社を創立し、岐阜商工会議所会頭も勤めた。住まいは芦屋市に移されたが、立派な門構えの屋敷は、戦後も三菱レイヨン青山荘として残つていた。鎮守のお稲荷さんは最近までであつた。御鮎

街道を売り出そうというのに残念なことがある。

昭和五年ごろ、河崎家と常在寺の寄附により、下茶屋町から梶川町に通じる新道が開通した。また、昭和二〇年、強制疎開で益屋町南側の母屋が取り壊されたため、道幅が二倍になった。

平成一九年これを「戦国の大道」とする修景事業が完成し、益屋町の面目は一新された。

新装なった「戦国の大道」



御鮎所跡にできた住宅群

# 八 繭糸商人の活躍 — 木挽町・山口町・下茶屋町・上茶屋町周辺 —

？「繭糸屑物商」？

本町一丁目に明治四五年に建てられた「金華山道」という石碑がある。その裏面にあるこの職業はいったい何だろう。



## 絹紡糸原料商

伊奈波通り三丁目には大正五年の「伊奈波神社」という石碑もある。どちらも施主は「村瀬兼次郎」であり、自分は、大仏町の住人で繭糸屑物商であると記している。その事跡は何も伝わっていないが、この近辺には、村瀬が寄進した石碑・石灯籠があとこちにあり、またこの地区で屋敷構えの立派な家は、かつて村瀬と同じ繭糸屑物商

(絹紡糸原料商ともいう) だったところが多い。大正期をピークとしたこの産業の繁昌ぶりがしのばれる。

大正七年、岐阜市の南郊五坪町に、大日本紡績岐阜絹糸工場が設立された。絹糸紡績というのは、繭から生糸を引く過程で出るキビソ・ビスなどの屑物を、木綿のように紡績によって絹糸に再生するのである。生糸より太いので帯・布団裏地に使う富士絹にしたり、紬・羊毛と交織したりする。

その原料を福島・群馬から四国・九州までの広い範囲から買い集め、大日本紡績岐阜工場に納入した。屑物という聞こえが悪いが、同工場は、昭和七年には職工一五二九人を抱える市内有数の大工場であったから、取引規模の大きさがわかる。余談になるが、岐阜商出身の清沢忠彦投手の父はこの工場長であった。絹糸紡績は、ほかに東洋紡(姫路)・鐘紡(信州)・近江絹糸(彦根)・大垣・中津川)等の工場があった。中国へ輸出したこともある。

なお、養蚕過程で出来るタマ繭・毛羽など屑繭も買い入れ、真綿や絹綿布団の製造



旧加藤岩次郎家と倉庫

業者に売り込んだ。(上茶屋町日比野信雄氏談)





岐阜町は、江戸時代から生糸・絹織物の取引が盛んであった。岐阜を代表する大商人の織甚こと渡辺甚吉は、岐阜縮緬ちぢめんの間屋として家を興したのである。明治期には、地元で安田製糸場（山口町）・川島製糸場（益屋町）などもできていた。またこの附近には、紙問屋・紙原料問屋が多く集まっていたが、製紙原料には紙屑が含まれている。それにヒントを得て絹紡糸原料商が興ったのかもしれない。

営業所	氏名	商号	営業所	氏名	商号
今町一	杉山銀太郎	カネサ	下茶屋町	梅原清吉	川清
山口町	加藤岩次郎	ヤマヨ	本町四	西村清助	ヤマ三
上茶屋町	日比野彦吉	マルヒ	下茶屋町	篠田梅吉	ヤマ口
山口町	加藤石太郎	カネヨ	末広町	浅井與一	ヤマト
大宮町二	高瀬彌助	マル高	上茶屋町	谷川武右衛門	

昭和六年の繭糸屑物商（「岐阜県商工人名録」）



## 町並み

上記の住宅や蔵は、今も存在して町並みの景観を引き立てているものが多い。山口町現笹川家は加藤岩次郎の家、下茶屋町の現河村家（棟に鍾馭像しゅうぎが乗っている）は、かつて同業の最大手だった岩井伊三郎の家で、現浅野鉄工所本社のところに蔵があった。



下茶屋町西部の家並み  
（二軒目が旧岩井家）



民営公民館「わいわいハウス」



地区唯一の公衆浴場「公園の湯」



おしゃれな窓飾りのある驚見家



浅野鉄工所旧本社と軒下の馬の水飲み場



この地区は、かつて武家屋敷地だったが岐阜城陥落によって一時荒廃していた。江戸時代には尾張藩領となり、古屋敷新田として再開発が計られ、明暦元年（一六五五）に今の茶屋町・木挽町の二筋が新町に取り立てられた。

当時すでに一四三軒もの萱葺き・板葺きの家並みがあった。職人や小商人が多い町であった。そのたくましさを受け継いだのか、いまでもユニークな営業ぶりで、世情の変化を克服し、頑張っている人々が住んでいる。

木挽町の「公園の湯」は地域内で唯一の銭湯になったが、サウナや整体治

療室を設けたりしてモダンなニュー銭湯に脱皮している。平成二〇年に、「木挽太鼓」のグループが結成された。上茶屋町には、県下初の民営公民館を名乗る「わいわいハウス金華」がある。伝統家屋を改装し、金華ふれあいクラブと連携して、高齢者が多い地区に適した多彩な活動をしている。下茶屋町には（株）浅野鉄工所がある。精麦機など食料加工機製造から始まったが、ふるい機など粉粒体処理機のメーカーとして独自の地歩を築いている。また千太屋紋章工芸・かのこしぐれ製造元・ふくろう専門のクラブ作家・岐阜エアライフル射撃場もある。



ふくろう作家



紋章上絵師

# 九 紙問屋の町 — 玉井町・東材木町・今町二丁目周辺 —

？何をしているの？

せせらぎ公園ができる前、川原でよく見かける風景だった。これは何の作業だろう。



## 紙問屋の周辺

美濃紙といえど、美濃市周辺の産業だと思われるかもしれない。確かに紙漉き屋は

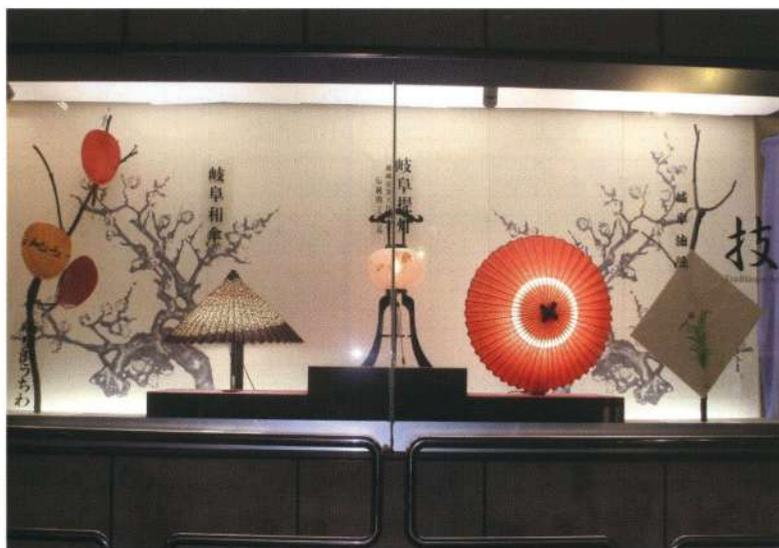
武儀郡に多いが、美濃紙は、全国ブランドの産業であり、大市場への出荷体制が必要である。また原料の格・三楹（みつまた）の主要産地は四国である。昔はリサイクル社会であつて、都市の紙屑も貴重な原料であつた。製品を運び出し原料を送り込む大動脈が長良川であるが、岐阜を境にして上流と下流では荷船の種類が違うから、積み替えが必要になる。それらの紙問屋の立地条件を満たしたのが、川原町とその周辺である。

中河原の紙問屋は、幕末のころから、舟による行商で美濃紙生産地との取引を開いたものだといわれる。その立志伝を体現したひとりに、湊町で明治二年（一八六九）に生まれた澤田文治郎がいる。父は紙問屋

の番頭、長兄は水運問屋を経営していたが、幼時に死に別れ、一一歳と一五歳の兄弟で、どたぐるまを引いて紙の行商を始めた。後に、岐阜繭糸（けんし）（株）の書記になり大正一一年にその社長にまで登りつめた。鶴飼ホテル・劇場美殿座・金華山鉱泉など様々な事業を手掛け、県会副議長にもなった。白木町に松竹座・松竹館が設立されたのも彼の努力による。



古紙の倉庫



岐阜市役所南庁舎のショーウィンドー

昭和前半までは、下表のように紙問屋が軒を連ねていた。紙問屋がそれぞれの得意商品に応じて、漉き屋を抱え原料を供給して生産させた。また、岐阜町周辺には、職人になる人が多くいたし、金華山麓には竹藪がたくさんあったので、紙と竹で二次製品を作る問屋もあった。なお、紙屋の会合は、いつも元浜町の料理屋吉権で行われたという。

岐阜提灯の名は江戸時代からあったが、幕末には衰退していた。それを復活し、岐阜の名産品に仕上げたのは、西材木町に生まれた勅使河原直次郎である。明治一年天皇御巡幸の際、彼が新工夫した提灯を行在所に飾り、それが東京人士の注目を集めたのがきっかけである。彼は提灯だけでなく、涼団・団扇・絵日傘・紋典具帖・紙ナプキンなど、美濃紙を使った商品を次々に考案し、岐阜職人の名を全国に知らしめた。明治四〇年頃、米屋町に建てられた勅使河原合資会社の洋館社屋（現桂翠館）がその業績を物語っている。

東材木町小原屋は花合羽を製造していて、金華小裏の川原でそれを天日干しするのが、近年まで地区の風物詩になっていた。

住所	屋号	氏名	住所	屋号	氏名
玉井町	丸川	(名)松井三治郎	東材木町	丸久	林 春吉
同	川杉	松井磯治郎	同	丸カ	松原周助
同	ヤマ叶	安田善七	同	カネヤ	大野新吾
同	丸小	岡田兵助	同	丸ヤ	大野実三郎
同	カ十	後藤市三郎	同	丸カ	田代嘉平
同	丸大	深尾寅之助	今町二	ヤマ三	(名)宮島商店
同	ヤマト	加野久八	同	丸吉	村瀬吉助
同	ヤマ庄	宮部庄吉	同	ヤマ川	河合為四郎
同	サヤマ三	櫻井 吉	同	ヤマ丸	長屋善平
同	カヤ	大野常三郎	同	カネ十	山田宗助
同	大ヤ	大野淳吉	同	丸太	藤澤太吉
湊 町	カネ久	野々垣益兵衛	同	サヤマ十	家田政男
同	ヤマ大	(名)深尾商店	今町三	ヤマ太	山田清治郎
同	ヤマセ	久保田小三郎	上大久和町	サヤマヤ	大野定七
元浜町	山比	神山嘉助	久屋町	ヤマ上杉	今井武兵衛
同	カ上	後藤圓治	魚屋町	ヤマ矢	矢島伊兵衛
同	丸さ	酒井佐助	本町一	ケヤ	大野軍治
同	丸山	神山勘助	中新町	カネ川	関谷善助

紙商原料商大進組（昭和8年「岐阜市案内」）



紙製の「のぼり鯉」づくり (小原屋)



提灯絵のすり込み (木村商店)

川合玉堂や太田稻吉などの有名画家も、若いとき提灯の絵を描いた。上大久和町の足立彫刻所は、菓子木型や提灯絵の版木も造った。松ヶ枝町大西家は、傘竹問屋だった。紙問屋の周りでは様々な職人や商人が活躍していたのである。籠大仏は、まさに紙産業の町岐阜の象徴である。また、戦後アメリカの彫刻家イサム・ノグチが、湊町に住む洋画家・坂井範一を訪ねてきて、岐阜で「光の彫刻AKARIシリーズ」を生み出した。

(木村富造氏談)

平成二〇年に、有力紙問屋であったマルカが閉店したのは残念であるが、団扇の老舗住井商店が水うちわを復活したり、家田紙工が若手職人を起用して、水うちわや透かし和紙など新商品を開発するなどして、伝統産業を守っている。なかでも提灯関係は好調で、浅野商店と安藤商店は、市内に工場やショールームを何か所も展開している。

住所	屋号	氏名	業種
玉井町	マル矢	中村彌七	紙・紙原料
元浜町	松惣	西松金次郎	紙・化粧品・雑貨
今町一	マル市	木村市三	紙・紙原料
今町二		且野栄吉	紙・紙原料
今町二	大菱	大橋徳次郎	紙・紙原料
今町四	鯛嘉	河崎嘉吉	傘・紙・澱粉
東材木町	島又	森瀬廣三郎	合羽
東材木町	又上	西松浅吉	紙・頭甲紙・合羽
中新町	武井	堀田治平	ナプキン
久屋町		日本抄紙(株)	紙製造
鞆屋町	マルカ	山田嘉兵衛	和洋紙・紙製品
鞆屋町	鱗屋	宮島助三郎	傘
米屋町		濃飛蚕座紙(株)	蚕座紙・紙
米屋町	紙喜	尾藤喜平治	紙袋・和洋紙・蚕座紙
米屋町		勅使河原(資)	提灯・団扇・ナプキン
米屋町		小坂井誠一	紙
伊奈波一		説田紙器工業所	紙箱
白木町	安田屋	宇佐見千代吉	小間物・紙・傘
常盤町	さし源	伊藤直二郎	結納品
常盤町	水戸屋	水戸栄蔵	襖紙・建具
矢島町二	マル善	酒井曾市	紙・紙原料
四ツ屋町		服部丈太郎	団扇・カレンダー

紙関係商工業者(昭和六年「岐阜県商工人名録」前頁の紙商を除く)

提灯の仕上げ (安藤商店)



# 一〇 興亡した商人町 ― 今町一〜四丁目 ―

？なぜここに水路があるの？

今町と大仏町・益屋町との間に古びた水路がある。北へ行くほど狭くなり、二丁目の裏切りは水も流れていない。いったいこれは何だろう。



今町四丁目裏



梶川堀

今町の由緒

ふつう城下町で今町というのは本町に対応する由緒ある町筋だという。たしかに岐阜城健在のころはその武家屋敷部分と隣り合わせの位置であり、大手門・搦手門の



「戦国の大道」の南



今町三丁目裏

門前であったはずである。いまも東側町裏に堀跡ともいえる水路がある。常在寺が、梶川弥三郎の屋敷跡とされているので、その付近では梶川堀と呼ばれている。しかし、廃城によって町はずれになってしまったよう、江戸時代前半には、記録に残る人物は出ていない。江戸時代前期の地図によると、今町は現在の二丁目を指し、一丁目はずきぬき町、三丁目は中ノ町、四丁目は油屋町となっている。

江戸時代後半になると、長良湊の繁栄に伴い新興商人が住むようになった。

文政一三年（一八三〇）の岐阜町長者番付には、上今町の村瀬宗兵衛（大関）・林平六・山田屋善兵衛、中今町の村瀬権右衛門・塩屋佐兵衛、下今町の吉田屋圓七・油屋甚六が上位にあげられている。多くは近在で盛んに生産されるようになった紙・縮緬ちぢめん・縞木綿しまもめん・縮緬などの問屋だったようである。近代になって、馬車の通行が盛んになったが、霞橋へ上る坂が難所で、よく馬が倒れたという。一丁目杉山家の軒下に馬つなぎの鉄輪が残っている。



見所のある横町

風情のある建物としては、一丁目に旧竹勘米穀店がある。座敷から岐阜城を借景とした庭の眺めがすばらしく、これを生かして、カフェ今昔庵が開店した。この横に東西に抜ける横町があるが、この路地を、西方から見通す景色もなかなかのものである。繭糸屑物商であった杉山家も、町屋らしい造りを保っている。二丁目・三丁目は、紙・紙原料商が多かった。二丁目には、今、丸市木村合資会社・宮嶋商店・(株)エルイエ

## 町並み

大正時代には電車道に富士万ピヤホールがあったが、いまも近辺で一番飲食店が多いのは不思議である。一丁目には、津田屋と平成二〇年に開店した今昔庵が、三丁目には東亭食堂が、四丁目には老舗かわらやと、のやま亭が営業している。



旧大沢家に開店した今日庵と庭園



ダがある。一新した「戦国の大道」との四つ角の建物は、それにふさわしくなるよう補修され眺めが良くなった。益屋町林稲荷は、三丁目にあった紙商道太山田家の関係者がいま中心になって奉祀している。また、河崎家は油屋甚六の子孫で元は紙商だったという。三丁目には、油久醸造の醸造蔵があったが、平成一九年に



卯建のある林家



梶川町の高橋家

取り壊された。四丁目にある旧丸半林太物店は、近辺で唯一の卯建のある建物として有名である。元は織甚渡辺家の建物であって、濃尾大震災にも倒れなかったしっかりした造りである。なお梶川町高橋家は林家の住宅だったとのことである。



取り壊された油久醸造蔵



「戦国の大道」交差点

# 一一 北美濃への道筋・郡上街道・東材木町・上大久和町・久屋町・魚屋町――

？何のおまじない？

家の軒下にある鉄輪、おなじようなものが久屋町・東材木町・玉井町にもある。いったい何のためにあるのだろうか。



## 郡上街道

江戸時代、長良渡船場から岐阜奉行所前にいたる表通りは、どの町筋だったのだろうか。いまは、元浜町から今町に入る霞橋と、東材木町に入る美登里橋があるが、江戸時代初期には、西材木町へ入る橋もあった。しかし、長良川の本流が総構えに直接当た

るように変わったためか、この橋はなくなり、上茶屋町へ入る折戸橋ができた。もとは、西材木町から魚屋町へ出るのが主道であったが、東材木町経由に切り替わったのではないだろうか。ただし、東材木町は上大久和町止まりだったので、ここで鉤の手に二度曲がることになった。祭りの日に、川原町の山車が伊奈波神社へ向かうときは、このコースをとっていた。明治一四年の「町村略誌」は、やはり美登里橋を郡上街道としているし、郵便ポストも東材木町と中新町にあった。警察も緑橋巡査派出所であった。その脇にあった火の見櫓の基礎部分が道端に埋まっている。ここは、馬糞交番の異名があったという。荷馬車にとって、土手に上がる坂道は大きな障害であった。かつては、荷馬車の往来が盛んで、商家の軒下に馬つなぎの鉄輪があった。各町筋に二、三か所は井戸があつて、馬に飼葉を与えられるようになっていた。平成二〇年、東材木町北部に残っていたポンプが撤去されてしまった。

この通りには、紙・紙原料・紙加工品の

間屋だった家が多く、今もその居宅や蔵がかなり残っている。御鮎街道ではなく、「紙屋通り」と呼ぶのがふさわしい。(九節参照)



東材木町を通るふれあいウォーク

## 東材木町電車通り

大正元年に、本町から長良橋まで幅八間の新道が開設され、市内電車が開通した。これによって、新道に繰り込まれた東材木町の南半以外は、表通りの面目を失い、徐々に賑わいが薄れていく。昭和七年に、玉井町の川原郵便局に替わって、岐阜材木町郵便局が開局し、十六銀行も、玉井町の富茂登支店に替えて、昭和一年に材木町支店を開店した。材木町の銀行・郵便局の向かい側は、宅地が扇形になっている。これは電車道を作るため北側から移動させられたからだという。



東材木町の北西部



長良橋通りの急カーブ



旧旅館「のむらや」

長良橋通りのハナミズキ並木



この急カーブで、電車が時々脱線したもののだが、いまも自動車がよく事故を起こす。昭和六三年に電車が廃止され、十六銀行材木町支店はなくなった。両側にハナミズキの並木道が整備されたが、平成一五年の鶴飼い大橋開通で交通量はやや減少した。

東材木町は、旧家の建物がとくによく残っている。島又森瀬家（和洋傘・現役）・柏周松原家（和紙・現役）・丸松松原家（和紙）・林紙店（現役）、ほかに戦争中の強制疎開などで建物は古くないが、小原屋河合家（花合羽）・大野家（製紙原料）・田代商店（和洋紙）

も営業を続けてい  
る。のむらやは、商  
人宿であった。

上大久和町の旧大野家



## 上大久和町

上大久和町にも、サシヤマヤ大野家（紙原料・現渡辺家）と井川商店（和洋傘）、上新町になるが、岐阜紙料神山家（製紙原料）など紙商の家が残っている。

黒板塀の立派な家は、丹羽家である。その先祖、又左衛門は西材木町丹羽家の分家であり、松尾芭蕉の門人となり「蕉笠」を号とした人もあった。先々代種次郎は、本家の次男であったが、丹羽木材を引き継ぎ、以後当家がその社長を務めている。



上大久和町の丹羽家



上新町の神山家

蔵の屋根の鍾馗様



久屋町の宮田家



旧電車の道の東側に足立彫刻所があった。和菓子用などの木型彫刻師で、いつも窓際で仕事をする姿が見られた。



仕事ぶりが目に浮かぶ足立彫刻所

## 久屋町・魚屋町

この通りは近辺で一番土地が高く、戦前からの趣きある造りの建物が多くある。西側に残っているのは、紙商今井家の分家、和菓子の両香堂は元海産物問屋山勘こと山田勘三郎家、桜井家が元紙商淀武こと今井武兵衛家、田中家は元呉服商であった。東側にあるのは、宮田家が元呉服商、関谷家が元「綿いさ」こと鷺見治助家、酒井家は元金融業、上新町角の梶川家は、元濃厚銀行の建物である。どの建物にも屋号入りの鬼瓦が残っている。



旧今井本家と両香堂（旧山田家）



久屋町の酒井家

今井武兵衛は、老舗紙商で、四国から紙原料の楮などを仕入れており、現地に持ち山や畑があった。一方、同業者と組んで田子の浦（富士市）で製紙工場を経営し、満州国紙幣の用紙も手がけたという。戦時統制で廃業したが、軒下に馬つなぎの鉄輪がある旧宅が残っており、中大桑町の原料蔵も残っている。

セキヤパンは、宮田家南側（現空地）にあって、元は飴屋だった。戦後、パンの製造を始め、学校給食にも供給した。今は早田地

区に移っている。

明治中期の「岐阜みやげ」は、「魚屋町は家並みの大半が魚屋であり毎朝市を開きたいへん賑わしい」と記している。岐阜一番の料理屋といわれ、万松館の営業を委嘱された松半は、もと魚屋町にあった。久屋町と中新町との角に、餅菓子市川屋があった。この店の栗粉餅は評判がよく、店頭の招き猫が目立つことからネコモチヤの名で知られていた。魚屋町と本町との角には、老舗うどんや角忠があったが、平成の道路

拡幅でなくなつた。

いま久屋町・魚屋町にある商店は、昭和二七年に大垣から進出してきた柿羊羹の両香堂のみである。

# 一一一 思い出の通学路 — 中大桑町・大工町・布屋町・下新町・甚衛町・下大桑町 —

？ここに何がいた？

金華小学校は飼育学習が盛んであった。あなたのときは何がいたかな。



## 金華小学校

金華小学校は、明治六年に設立された、大観舎（のち岐阜尋常小学校、現新桜町）と有道義校（のち富茂登尋常小学校、現御手洗）とを前身にしている。明治四二年か

ら義務教育が六か年に延長されたため、両校とも既存施設が手狭になった。翌四三年、岐阜小学校に富茂登小学校を合併し、大工町に新校舎を建設して移転することになった。移転が完成したのは四四年度からである。

学校の敷地は、地籍図によると大工町・下大桑町・中大桑町・蜂屋町の四町内にまたがっている。大工町北側・下大桑町南側は、濃尾震災後の復興が進まず、長らく焼け跡のまま、ただ中央に武井商会の輸出向けナプキンの工場があったという。それが新校地に選ばれた理由の一つかもしれない。

大正一二年から高等科が併設されることになり、校舎の増築と運動場の拡張（大銀杏のある南東部分）が行われた。また尋常科・高等科併設で、明治二六年に鶯谷へ分離移転した高等小学校（のち京町へ再移転）と、校名が紛らわしくなってしまう。そのために大正一四年、それぞれ金華小学校・京町小学校と改称されたのである。

昭和三二年から三六年にかけて校舎の全面改修工事が行われたため、木造校舎で学

金華小学校最後の姿と撤去後の校庭



金華小学校最後の入学式（平成 19 年 4 月）





ふれあいフェスティバル  
(平成19年11月4日)

「夢づくりふれあいフェスタ」タイムスケジュール

歴史を絆に！ありがとう！みんなの金華小学校！

10:00	10:05	10:15	10:30	10:45	11:00	11:15	11:30	11:45	12:00	12:15	12:30	12:45	13:00	13:15	13:30	13:45	14:00	
本校スタッフ職員	開の会	地区分譲 投票券授	開会式	ふれあいウー グループ作り	「歴史の取 組まへんじょう」 ・コロッセ	発表	発表											
	(各教室)		(校庭)															

んだ世代と、鉄筋コンクリート校舎で学んだ世代とでは、小学校の思い出に大きな差ができた。アゲハチョウの幼虫がいたカラタチの生け垣もサザンカに替えられた。

その新校舎も、平成二〇年に閉校式が行われ、取り壊された。金華小学校の名は大正一四年から平成二〇年まで八三年間の思い出となった。

こどもたちが利用する文房具店として、東門前に三ツ星堂文具店と、みなとやがあり、上大久和町に三ツ星堂支店があった。三ツ星堂本支店はいまも健在である。学校医を一〇年以上勤められたのは、加野春次・史郎（内科・上新町）、松井太郎（内科・上茶屋町）、安部重蔵・敏彦（歯科・上大久和町）、服部貴芳（耳鼻咽喉科・今小町）、山田守（眼科・今小町）などである。給食のパンはセキヤパン（久屋町）や末広パンが供給していた。

### 金華公民館

昭和四一年に、小学校講堂の和室を利用して開館した。独自の施設が建設されたのは四六年、現在の立派な小学校体育館・図書館との複合施設になったのは平成七年である。運営委員会には小中学校・PTAと自



岐阜市金華公民館

金華地区市民体育祭



治会連合会、消防団からまちづくり協議会まで、二〇余りの団体の代表が参加している。公民館としての講座やクラブ・サークル活動の場であることは勿論、市民体育祭・地区文化祭・防災訓練など、地区行事の企画調整・運営の核になっている。



金華地区文化祭



金華小学校東門前の三ツ星堂文具店



## 金華保育所

昭和二三年に、しもしんまち下新町に市立金華保育所が開設された。ここには、大正一一年設立の岐阜市保育会北部保育園の施設があったが、戦争中に閉鎖されていたのである。それは、黒板塀で囲まれた平屋で、門の脇にアオギリが立っており、所長の白井先生は、家族ぐるみ所内に住んでいた。戦災を免れた金華地区には、多くの縁故者が身を寄せていたうえ、ベビーブームが始まって町中に子どもの姿があふれていた。金華小学校の新入生数をみると、昭和二〇年以前は二五〇〜三〇〇人であったが、二三年には三三〇人、二九年には三八二人に達した。当時は、子どもの面倒を見きれない家庭が多かった。金華保育所は定員八〇人で開所し、昭和二九年に全面改築している。その後は急速に子どもの数が減少し、昭和四五年に定員を六〇人に減らすとともに乳児保育も始めた。

ちなみに、金華小新入生は四六年に一四九人、五六年に八〇人になった。平成二〇年の卒業生は、三五人であった。小学校統廃合に先立ち、平成一二年に金華・中央・京町の三保育所が統廃合され、金華地区から保育所がなくなった。



旧青木医院



こどもみこし

## 蜂屋町・大工町

西野町にある浄土真宗上宮寺は、貞享三年（一六八六）、岐阜大火にあうまでは蜂屋横町にあった。小学校のイチョウは、護持舎という堂の境内にあったという。このお堂は上宮寺に関わりがあったのかも知れない。

大工町に、旧青木医院の趣ある建物がある。幕末の当主雄哉は大坂の緒方洪庵塾に学んだ蘭方医で、明治七年に、奉行所跡に医学講習所（岐阜大学医学部の前身）を開設したり、初代濃飛医学会会頭にもなった。洋館診察室を含む屋敷を、大切に保存したものである。

## 甚衛町・下大桑町・下新町

下大桑町と甚衛町は、たびたびの道路と堤防の拡張で、土地が大幅に減少してしまっただ。平成四年には甚衛・下大桑町としても九世帯しかない。昭和五年の人口は、下大桑町が一四戸四六人、甚衛町が七戸三七人、下新町は、なんと六四戸二三五人であった。ちなみに人口の第一位は末広町の一六五戸六七三人、二位が矢島町の一〇六戸五一人、三位が木造町の一〇八戸四一五人で

ある。人口三〇〇人超の町が一〇もあった。

下新町には、格子造りの建物がかなりある。本町筋の土地が低いので、大雨が降ると金華小のイチョウの葉が下新町通りを流れていった。下新町の家も土地を玉石で囲って、土盛りしてあるらしい。裏の堤防も、かつては低い土手に過ぎなくて、たらいを抱えて川へ洗濯に行ったものだという。宮嶋染物店のもと本町五丁目にあり、染め物を川水で晒していた。その後自前の晒し場を持つ時代になり、その土地を求めて現在地へ移転した。手拭い（特に剣道用の）が得意で法被や幟も扱う。近年は中国製のプリント製品が増えているが、本染め物とは持ちが違うという。かつて川港があった町

なのでいろいろな商家があったが、ほとんどなくなってしまった。いま営業している加藤商店の初代は、もと町内で味噌溜を製造していた山田徳次郎家に奉公していたという。

普賢寺



法光寺の大銀杏



ロータリーができた下大桑町

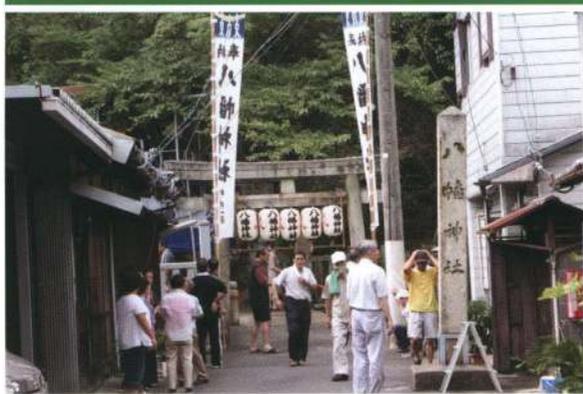
長良川の堤防から見た下新町



一三 かなめの町筋 — 本町一〜三丁目・鞆屋町・上新町・中新町 —

？この神社はどこにある？

金華地区の町内自治会で、秋葉神社以外の神仏のお祭りをするところは少ない。八幡神社はここ一か所だけだ。



本町筋の役割

関ヶ原の戦いまでは、都は京都であり、美濃の国主はみな、京都とのつながりを重視していた。岐阜町は、京都を正面に見立てて設計された町である。本町筋は、岐阜



本町三丁目から見た黄金花咲く金華山



本町一丁目から見た伊吹山の銀嶺

城の大手門から町の西端、京口（あげもん上ヶ門）に至るメイン道路であった。本町一丁目から西方を見ると、伊吹山が道筋の正面に美しく眺められ、かみがた上方をめざす旅立ちにピッタリの場所である。

本町は、どこの城下でも町の「かなめ」である。ただし、一丁目から七丁目までの町名に改められたのは大正五年からで、もとは一丁目かが加和屋町、二丁目わが元来の本町、三丁目やが釜石町であった。江戸時代に

は釜石町に、火の見櫓が建てられていた。いまも二丁目に、岐阜市中消防団の金華分団本部がある。

本町の役割は、交通運輸の需要を賄うことである。明治一六年に出版された「美濃の魁」によれば、本町に内国通運会社岐阜出張所堀荘七と旅籠屋斧屋甚兵衛があった。昭和一年の躍進日本大博覧会開催当時に、二丁目に津田運送店があり、近辺にはみつげや（本町二）・富山屋（鞆屋町）・山縣屋（米屋町）・清水屋（中竹屋町）・大津屋（布屋町）・野村屋（東材木町）・佐賀阪屋（末広町）などの旅宿があった。一丁目角には黄金水という井戸があり、人力の立場になつてい

た。今町四丁目のかわらやは、馬車曳き

たちの弁当場として賑わつていた。本町一丁目の旧名は、加和屋町（革屋町）であり、二丁目から南へ鞆屋町（□屋町）が続く。これは、信長の時代にできた尾張への分道である。革は武器製造の必需品であり、鞆は矢を携帯する道具である。この辺は岐阜城の大手門前であつて、武器関係の店があつた名残ではないだろうか。本町一丁目は八幡神社をお祀りしているが、これは、応神天皇を首座とする弓矢の神である。

## 町の新旧住人

江戸時代に本町町代だつたのは、加納甚左衛門家であり、幕末にこの家から、彫刻家加納鉄哉が出た。東京美術学校の初代彫刻科教諭に選ばれた名工である。釜石町町代だつた柴田四郎兵衛家は、柴田勝家の子孫で、京都に支店を持つ呉服商であつた。名古屋松坂屋の縁戚でもあつたから、近年までその跡地は、松坂屋岐阜出張所になつていた。両家とも岐阜町惣年寄を補佐する

幕末から岐阜の長者番付の上位を占め続けたのは、二丁目のろうそく製造商伊勢嘉



八幡神社夏祭り



梶川堀を行く安宅車



河田剣道具店



後楽荘



蔵ナチュラルカフェ&ギャラリー



浅野商店



後楽荘の庭園

こと矢野嘉右衛門である。料亭後楽荘は、その屋敷の一部を利用したものである。ちなみに、金華地区で料亭の三名庭を選ぶとすれば、水琴亭（米屋町）・万松館（大宮町）と後楽荘であるという。

本町近辺には、履物商がかなり多かった。そのうちでも伊勢長商店は、伊勢嘉の縁戚で江戸時代からの老舗であるが、いまでも頑張っている。また雑貨商伊勢彦は、もと伊勢嘉の番頭であった。

太平洋戦争後でもなお、二丁目に永田一華書道教室、四丁目に村上速算塾があり、商家の子どもたちが習字・そろばんを学んでいた。本町通りは、メイン道路の宿命として、何度も道路拡幅の苦難が降りかかった。北側は昭和六二年の大幅な歩道拡幅により、母屋部分が全面取り壊しになったため、いまま駐車スペースが目立つ不揃いな町並みになっている。そのうち、残った蔵を利用したカフェ・ギャラリーや居酒屋ができた。

旧濃厚銀行上新町支店



## 上新町・中新町

この新町筋に、銀行が三つもあったとは驚きである。江戸時代後半から台頭した商人たちは、本通りの奥に店屋敷を構えたよううで、やや意外な気がするが、明治になって会社・銀行などが設立されたのは米屋町・白木町に対する竹屋町筋や、本町に対する新町筋である。明治中期の「岐阜みやげ」は新町通りについて「第十六国立銀行と岐阜物産会社は中新町にあつて近ごろなかなか繁昌している」としている。

上新町西北角の梶川家は外観に特徴がある。元濃厚銀行上新町支店であった。岐阜県で最初の会社は明治六年設立の岐阜縮緬会社であるが、その仲間金融を図るため明治一四年、小熊町に濃厚会社が設立された。それが明治二四年に銀行になったものである。上新町には、元乾物商山田甚兵衛宅（現城家）も残っている。十六銀行の発起人・取締役の一人であり、のち呉服商や味噌溜商を営んだ。この関係で上新町支店が開設されたのかも知れない。

十六銀行は、明治一五年から二四年の大震災まで、中新町（現社会保険官舎）にあった。呉服商箕浦宗吉が十六銀行支配人に就任する際に、自店に誘致したのである。子息宗吉氏は、日銀理事・名鉄社長・名商會頭を歴任された。その北側には旧安田梅吉宅（現赤山家）がある。雛屋出身の材木商であったが、二代目が大日本土木社長になった。

大工町の小学校のところには、明治二八年から三五年まで、岐阜米系株式取引所があり、その機関銀行として同年岐阜倉庫銀行も設立された。この濃厚銀行・岐阜倉庫銀行と上竹屋町の岐阜銀行は、明治三六、七年に、当時は中竹屋町にあった十六銀行

に合併した。銀行時代が去った後へ、小学校が移転してきたのである。



村瀬家（元材木商）



旧山田甚兵衛家



旧山県トラック運輸



旧安田梅吉家

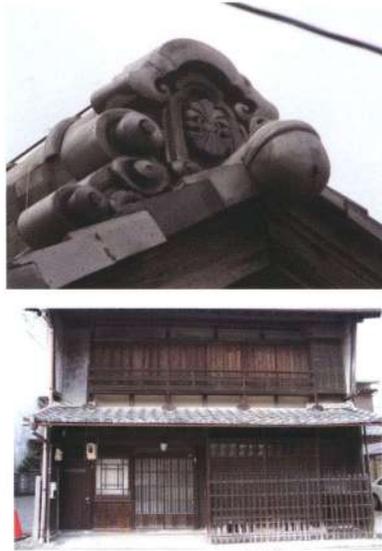


社会保険官舎

# 一四 お稲荷様の町 — 末広町・新桜町 —

？この家の商売は？

商家は屋号で呼ばれることが多く、いまでも家紋や屋号入りの鬼瓦が乗っている家が多い。熨斗のしの紋章と鈴がついているこの家は、なに屋さんだっただろう。



大池があった。両池の間に東照宮が祀られ、稲荷山の峰には、稲荷社が祀られていて、その祭典の日には、町人の参詣まげが許されていた。

大工町へ移転した明治四三年が最後で、すべてなくなった。大正三年に尋常小学校の跡地に新桜町が開かれたが、町の賑わいは下り坂になっていた。

明治五年以後、奉行所が遷喬せんせう学校（岐阜高校の前身）・大観舎たいかんしゃ（金華小学校の前身）になり、門前にあった町会所が戸長役場（市役所の前身）になった。ただしこの部分は、のちに鞆屋町つづほやちやうに編入された。元の馬場を利用して新町筋が開かれ、藪や池も次第に屋敷地になっていった。

明治二二年の岐阜市制施行によって戸長役場が廃止され、諸学校も、尋常しんじやう小学校が

稲荷山公園



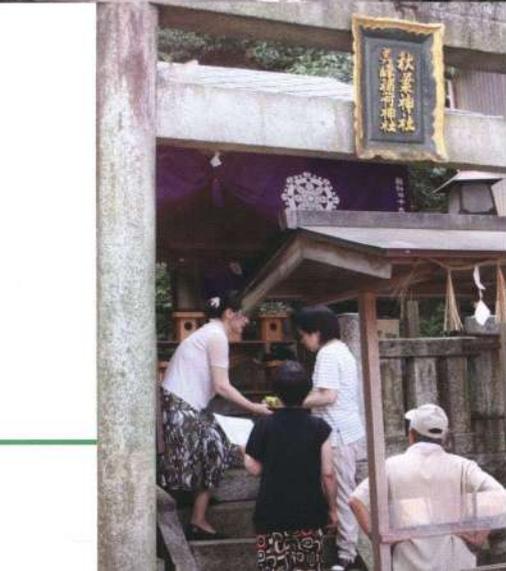
## 町の歴史

末広町は、尾張藩岐阜奉行所跡に明治七年に開かれた新町で、いまでも元奉行所の堀が町を取り囲んでいる。ただし、昭和八年に新忠節用水路の一部として改修され、長良川の清水が流れるようになった。奉行所には、中央に南北方向の馬場があり、その西側に諸官舎が、東側山麓には藪と二つの

奉行所堀跡



美峰稲荷神社夏祭り





末広座の跡地



料亭徳広

## 町の賑わい

末広町は、新たに県都になった岐阜町の中心部にできた貴重な空き地だったので、新時代の賑わいが流れ込み、随一の繁華街に生まれ変わった。その中心は、明治七年前ろにできた芝居小屋末広座（現国島歯科医院）で、団十郎を始め多数の名優が来演した。二年後に寄席小屋花角もでき、遊戯場・芸妓置屋・料理店などが集まった。池に蓮を植え、崖造りに座敷を建てた料亭もあった。

末広町は、東照宮跡に美峰稲荷神社を設け、山上を奥の院として、毎年初午祭と夏祭りを盛大に執り行ってきた。岐阜市制施行後は、その中心が南方に移動して、ここはさびれ始めたが、太平洋戦争前後までは、繁華街の余光を保っていた。昭和八年発行

の「岐阜市発展史」などによると、末広町

にはなお、料理業の徳広・扇寿司・大濱屋、大衆食堂朝日亭、旅館佐賀阪屋、芸妓置屋柳家・新ぼんた・鈴家・新京家・如月（新桜町）などがあった。銭湯や幟（のんぼり）屋・染物屋・仕立屋などもあった。戦後もダンスホールができたり、ヤクザが住んでいたことがあった。西組の道路は西の堀沿いにあったが、新桜町に直通する現在の位置に付け替えられ、稲荷山の登り口には、昭和三二年に稲荷山公園が設けられた。西組道路をクルマ止めして夏祭りを盛大に開催したこともあった。正月や岐阜祭りには、本通りは伊奈波神社参拝者の通路としてクルマ止めになり、軒並みにしめ縄や提灯が飾られて独特の雰囲気醸し出された。

## 町の住人

梶原拓前岐阜県知事は、子どもどころこの町に住み、用水路で泳いだことがある。岐阜商業野球部が甲子園で優勝したとき、チームの主力だった加藤三兄弟も、この町に生まれた。新しいところでは、ミスター・マリックが出ている。



本町一丁目から見た末広町の景観



鈴家前をいくこどもみこし

町の中央部に金色の巨大な観音像を載せた建物がある。岐阜一番の老舗仏壇店藤井であり、いまでも仏壇を手作りしている。以前は、隣に正村という名人仏師が住んでいた。料理業徳廣は、いまでも趣のある座敷で営業している。桐箱製造所や末広湯の建物がなくなったのは寂しい。この町の特徴であった各種の仕事と家構えが、急速に姿を消しつつある。

芸妓置屋だった鈴家の建物は、何とか保存したものである。鈴家は、伊奈波神社へ神輿（いまの金華みこし）を単独で寄進するほど繁昌していたし、大正時代の衆議院議員川村数郎がここに引退して住んでいた。（安藤喜一氏談）

# 一五 御鮎街道 — 鞆屋町・米屋町・上竹屋町・間之町・大和町・中竹屋町 —

？これはどの建物の屋根か？

この辺にはモダンな鬼瓦がいくつかあるが、これはどこの商標だろう。



## 町の由緒

江戸時代、鞆屋町・米屋町は尾張藩岐阜奉行所の門前町であった。尾張藩は江戸幕府の分身として、長良川産の鮎鮎を將軍の食膳に届ける役目を持っていた。また武儀郡の大半を領有していたので、米屋町筋は上有知代官所（現美濃市）と名古屋城とへの南北交通の結節点であり、町一番の表通りであった。米屋町筋は明治九年の地価を

みると、一等鞆屋町（反当たり六五一円）、二等白木町、三等常盤・米屋町の順に高く、北の長良橋へ向かう本町（二丁目）・魚屋・久屋・東材木町筋と、米屋町筋の西に並行する上竹屋・中竹屋・松屋町筋がこれに次ぐ地位にある。以下一九等下今町（同一五九円）でも加納町一等地より高い。

「米屋町史」は江戸時代からの町の名家として次の五家をあげている。賀島勘右衛門（現二七番地水琴亭）・加藤治右衛門（二四番地石原美術）・馬島大智坊（二三番地旧吉照庵）・今川与一左衛門（四番地米屋町郵便局）・宮島平治郎（三番地桂翠館）である。

賀島家は江戸時代を通じて岐阜町人をまとめる惣年寄の地位を世襲し、尾張藩主が来泊する本陣でもあった。幕末期には酢の醸造を営んでいた。今川家の初代は今川義元の次男氏朝で、のちに織田秀信に仕えた。大門町の慈恩寺は彼が創建した菩提寺である。岐阜落城後その子孫は医者になり、今川の陣中薬を子ども薬「赤龍丹」として製造販売した。賀島家は駿河国賀島郷の領主だったが今川義元との戦いに敗れて織田家

に仕官したという。敵同士の子孫が岐阜の同じ町内に住んでいたことになる。

岐阜にはほかにも織田・豊臣両氏の家臣だったが、大坂の陣で大坂方に味方したため浪人になったという家がある。加藤家も大坂落城後に岐阜に来て酒造業を始めたという。



鞆屋町の秋葉神社



呉服屋の店構えが残る杉村家



米屋町の中央西側の景観

馬島家は尾張国馬島村（現大治町）の名門眼科医で大智坊といい、織田信長（秀信か）の命によって岐阜へ移住した。米屋町には由緒ある名家が集まっていた。

日本画の巨匠、川合玉堂は少年時代をこの町で過ごした。

### 「建物博物館」

米屋町にはいまでも、岐阜市の歴史を語りつぐ大切な建物が残っている。

水琴亭は江戸時代から続く料亭である。明治初期までは中竹屋町にあり、その後伊奈波神社の大鳥居脇へ、さらに現社務所付

近へ移転した。神社境内を拡充するため移転を求められて、現在地へ移ったのは昭和五年ころである。移築に尽力したのはひいき客であった原富太郎三溪である。彼は岐阜市佐波に生まれ、横浜の生糸貿易商の婿養子に迎えられた大実業家である。横浜に名勝三溪園を築くなど美術愛好家としても有名だった。伊奈波からの建物（残月の間）のほかに、三溪園の宮大工に同園の建物を模した別楼（しぐれの間）を建てさせ、自ら壁画も描いたという。政治家大野伴睦もここをひいきにしていた。

### 桂翠館の建物は明治四

〇年ころ建てられた勅使河原合資会社の社屋である。洋風一部三階建てで、いまま屋根の上にその社章が残っている。勅使河原直次郎は岐阜提灯を再興し、岐阜の代表的産業に育て上げた功労者である。明治二〇年に西材木町から米屋町へ本拠を移し、団扇・油団など伝統品に改良を加え、紙ナプキンも製造するなど、新



石原美術の建物と内部の吹き抜け



製品の開発を続けた。同社は第一次世界大戦後の世界不況で行き詰まり、ここは岐阜県洋服会館などに使われていた。まちづくり運動の高まりを受けて、ひら井がこの由緒ある建物を改修し、平成一七年にカフェレストランを開業したのである。

石原美術の建物は大正六年創立の日下部株式会社が生かしたものである。英国人による設計で、四万数千円をかけてレンガ・タイルまですべて輸入品を使用した、本格的な西洋館である。日下部久太郎は若くして北海道交易に乗り出した。海運業に進出し



水琴亭正面玄関と庭園





たところで第一次世界大戦の好景気の波に乗り、百万長者になった。大正九年には日下部信託(株)を設立し、中竹屋町にも洋館を建てて営業した。米屋町の洋館は昭和四七年に改装して画廊になったが、竹屋町の洋館はキャッスルハイツ建設により消滅した。また日下部邸の和風建物を利用して、昭和三四年にカニ料理専門店ひら井が開業した。平井照二氏は伊奈波にあったうどん屋「丸桂」の跡取りで、事業拡大を計るため東京のレストランで修業したという。ひら井が新館に移ったあとは美濃そば吉照庵として営業していたが、平成一九年に惜しまれながら解体売却された。

伊奈波界限では古い建物の活用に取り組んでいる。とうふ茶屋万福は白味噌製造商山内家の跡を利用して平成一六年に開業したが、敷地を有効利用するため建物全体をレールに載せて移動するという工夫をした。

### 竹屋町筋

米屋町筋は岐阜城主に縁がある門閥町人が多かったが、竹屋町筋は江戸時代後

旧岐阜銀行の河口家



長崎屋総本舗



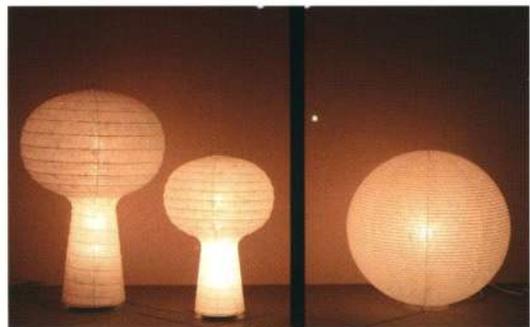
和食の布武

半に経済的に台頭した家が多い。文政一三年(一八三〇)の岐阜町長者番付には、上竹屋町の浅野彦左衛門(関脇)・菱屋彦右衛門、中竹屋町の長谷川茂兵衛(小結)・高橋善左衛門、下竹屋町の渡辺甚吉(大関)・横山七右衛門が上位にランクされている。西方三役がみなこの筋に住んでいた。

上竹屋町の河口家は明治一五年に近郷の地主らが設立した岐阜銀行(頭取郷佐太郎)の建物だった。鬼瓦に「銀行」の文字が入っている。同行は明治三六年に中竹屋町の十六銀行と合併したため、建物が売却された。浅野商店本社のある広い敷地は、清酢醸造商遠山八右衛門の跡である。

中竹屋町に長崎屋総本舗がある。宝暦三年(一七五三)に因幡山の古歌にちなむ銘菓「松風」を考案したという老舗である。

糰味噌を加えた「味噌松風」も開発した。同家は濃尾震災と空襲と二度被災し、笹土居町や神田町に移転したが、昭和三〇年ころに現在地へ復帰した。笹土居町時代の明治三〇年、漂泊の絵師蓑虫山人が籠庵に乗つ



浅野商店と「ペーパームーン」

て円城寺から志段見へ移る際、同家で休憩した。山人の絵日記にその情景が描かれている。和食の布武は酒造家川原傳次郎の屋敷を利用して開業した。南隣の十六銀行駐車場は味噌溜醸造商高橋善左衛門家の跡である。向かい側には木造三階建ての旅館清水屋があった。

### まちづくり会

米屋町・竹屋町筋は高級感のある飲食店や画廊などが並ぶ町並みになった。大和町には麩兵川島兵助の旧宅がある。ここも御座敷コンサートを開くなど町家の活用を模索している。

「まちまるごと博物館」の目玉の一つになるこの地区に高層ビルが建ち始めている。昭和四六、四七年に中竹屋町に十六銀行の岐阜中央支店と事務センターが建設された。平成三年に鞆屋町にユーハウス岐阜が建ち、平成一四年には水琴亭の南隣にキャッスルハイツ中竹屋町が建った。平成二一年にはユーフォリア米屋町がお目見えする。こうした動きに対して地元でも様々な意見がある。平成一四年、関係二〇自治会による伊奈波界限まちづくり会が結成され、一七年までに「伊奈波界限まちづくり協定」をま

とめた。

平成一九年にこれに基づいて都市計画決定がなされ、法的ルールになった。



とうふ茶屋万福



麩兵旧宅



日下部郵借別式



十六銀行事務センター



キャッスルハイツ中竹屋町

# 一六 おしゃれな商店街 — 伊奈波通一〜三丁目・万力町 —

？この家は？

食卓に欠かせない食材を提供したこの家は何の店だった？



まちづくり

伊奈波通は金華地区で唯一、商店街の体裁を保っている町筋である。それもマーケットや繁華街という感じではなく、シダレザクラの並木がある広めの歩道があつて、散歩するにふさわしい風情がある。以前は柳並木だったがそれも風情があつた。なによ



りも中央の車道が広すぎず、クルマの通行が激しくないのが、町に一体感があるのがよい。桜まつりマップには、欧風料理あじろ亭・イチダ洋菓子店・松万食堂・松風園茶舗・珈琲舎壱番地・丸信食堂・絵本の店のおきな木などの店が載っている。

シダレザクラが美しい桜まつり



平成一四年に伊奈波界隈まちづくり会が発足し、町並みの修景や桜まつり・盆踊りなどのイベント開催に奮闘している。一月は日曜日ごとに落ち葉掃除をするなど地道な活動も怠らない。





みんなで準備し、バザーや踊りを楽しんだ  
伊奈波夏まつり



## まちの歴史

江戸時代には一丁目は善光寺大門といい、寺院ばかりで町家はなかった。二丁目は米屋横町、三丁目は矢島横町（地図によって表記が異なる）などと呼ばれる小路に過ぎなかった。明治五年にそれぞれ愛宕町・榊町と改称され、少し後に善光寺大門も桜町と改名された。伊奈波神社が明治六年に岐阜県の県社に指定されたことにより、この町の繁栄が始まったのである。濃尾地震により社殿が焼失したが、明治三〇年に以前にもまして立派な社殿が竣工した。

盛り場の中心になったのは明治一四年にできた国豊座（現イナバホームズ）で、松井須磨子の白鳥の湖で小屋開きをした。一六年には南側に相生座（現伊奈波公園）ができて、末広座を含めて伊奈波三座と呼ばれた。「濃飛史譚」には「明治二四年の濃尾大震災でこの辺一帯が焼け野原になってから、善光寺前に桜並木が植えられて桜町となり……芸妓屋・待合・料理屋が愛宕山の裏辺から伊奈波山の上までもでき、その上国豊座が開業して活気付いてきた。いわゆる伊奈波芸者としてしられたが」とあり、震災がむしろ歓楽街として発展する好機となったことがわかる。

しかし、伊奈波歓楽街の繁栄は長くは続か

なかった。伊奈波神社が国幣小社になったのは昭和一四年であるが、早くから昇格運動が始まっており、そのための環境整備が進められたからである。明治四〇年に愛宕山を潰して日露戦争忠魂碑が建てられた。麓の芸妓屋・待合が取り払われて、伊奈波一帯は火が消えたようになった。反対にこのとき移転させられた誓安寺が弥八地藏へ同居したが、その一帯に芸妓屋・料理屋ができて賑わい始めた。

大正元年には道幅八間に改修され、同四年に伊奈波通と名付けられた。神社内外の神域としての整備が進むにつれ、町の商業的な賑わいは下り坂になった。そのもう一つの原因として、明治二七年に白木町に開設された岐阜市役所が、大正八年に南方の美江寺町へ移転したことも見逃せない。



日露戦争忠魂碑

## 通りの店舗

一丁目のあじろ亭は明治四〇年に開業した西洋料理店で、いまも健在である。初代高井源左衛門は外国航路の元船員で、妻きんも八ツ寺町三河亭で修業した人である。独特のハヤシライスなどハイカラ料理で人気がある。

古い氷室ひむろがある春日氷店も営業を続けている。かき氷やクーラーボックス用に重宝されているとのこと。かつては恵那郡岩村に製氷場があり、従業員たちは冬場山小屋に籠もって製氷し、春になると笠松まで舟で出し、そこから車で運び込んでいた。製氷場は百々ヶ峯どどがみねにもあった。店には氷水を食べる座敷もあって旧制中学生・高女生が入りびたっていたという。

二丁目には野菜の夜店が出る。昭和五年（大正一三年か）に昔の賑わいを取り戻すため、当時の町総代嵯峨誠吉が岐阜市内外の連合農会に働きかけて開設したという。昭和五〇年ころまでは正月飾りの店なども沢山出て賑わったが、いま店を出すのは日野の二人と鷺山の一人になった。

ハカマヤは神職装束の専門店で、広く県下全般の神社から注文を受けている。もとは京都や米沢から布地を仕入れ、夫婦で古

大衆食堂松万とイチダ



珈琲屋壱番地



夜店の買い物



嵯峨履物店



レストランあじろ亭



白木町北西部（右端がハカマヤ）



式通りに仕立てていたという。

伊奈波神社で式を挙げるには、矢島町一丁目にあった古清貸衣装店もよく利用され、宴会は水琴亭で行うのが格式が高いとされていた。店は替わっても常に写真館があり、近辺には神社に関わりの深い店がいろいろある。

## 万力町

万力町まんりきちょうは、矢島町の呉服商万力こと加藤与三郎によって明治八年に開設された個人町である。含政寺がんせいじの南に明治二四年設立の岐阜魚商（株）という魚市場があった。寺院街から歓楽街への伊奈波の変化を象徴する施設である。前に用水路や広場があった。仕事の都合も良かったのだという。その建物（現西野家）が残っている。

八月下旬伊奈波一丁目の諸寺院では地藏盆が営まれるが、万力町では自治会が大泉寺門前の地藏様のお祭りをする。夕方から町並みに提灯を点して総出でお参りしている。



大泉寺



北から見た万力町の景観



万力町南部の景観



万力町地藏まつり



# 一七 岐阜町を守る神仏 — 伊奈波神社と伊奈波の諸寺院 —

？道三と信長の意志が町を鎮護？

伊奈波神社は、斎藤道三がここに奉祀したものであり、岐阜善光寺は、織田信長が甲州から移したもので、どちらも城下町づくりの要にするためだった。明治六年に、県社に指定されており、いまも初詣の人数は県内第一である。

金華地区住民にとっては、大事な精神的よりどころであり、いろいろな催しが持たれる場所である。



## 伊奈波神社の由緒

伊奈波神社は本来、金華山を御神体として奉祀したもの、と考えられる。金華山は、もとは稲葉山（因幡山）と呼ばれており、神社本殿には、いまも「正一位因幡大神」の神額が掲げられている。因幡社は、丸山に祀られていたが、天文八年（一五三九）斎藤道三がこの山に居城を築くため、周辺の神社を併せて、現在地に遷座したとされている。主神は、五十瓊敷入彦命といい、垂仁天皇の第一皇子で、弓矢をもって地方を治めるとともに、多くの池溝を開いて、産業開発をした方であるという。金華山は、長良川によって、美濃の山地と平野が結ばれる位置にあり、まさにこの地方の統治者が、拠り所とするべき場所である。

丸山の中宮のほか、山頂に主神の母日葉酢媛命を祀る「峯本宮」があり、下宮の金大明神では、主神の妃淳熨斗姫命を祀っていた。また岩戸には、垂仁天皇の功臣で武器庫を管理した物部十千根命を祀る物部神社があった。この四社を合祀したのである。

社殿は、新たに岐阜町の領主になった尾張徳川家二代光友の命によって再建がなされ、貞享二年（一六八五）に遷座式が行われた。その社殿は、濃尾大震災で焼失し、現社殿は、明治三〇年に再建されたものである。なお、徳川秀忠の夫人となった崇源院（信長の妹お市の末娘江与姫）は、当社を氏神として崇敬したという。

江戸時代は神仏混淆だったので、神主家塩谷氏のほか、別当である社僧満願寺の存在が大きかった。満願寺（真言宗醍醐三寶院派、本尊薬師如来）は、いまの社務所付近で神主家と隣り合っていたが、明治維新の神仏分離令によって廃寺となった。仏堂仏具は、境内から撤去されたが、宝篋印塔が岐阜大仏殿の境内に移設されて残っている。（七節参照）



旧跡を祀る丸山神社祭

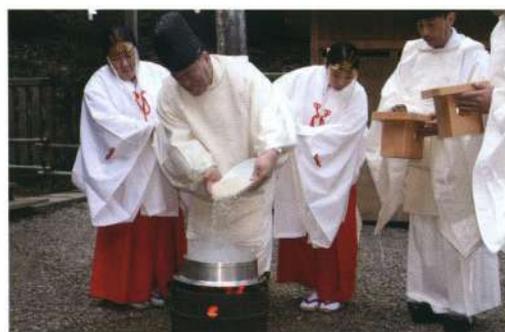


花の撓大祭  
農作業のジオラマが楽しい

## 境内・行事

本殿では、大祭である三月の花の撓大祭、四月の例祭（岐阜祭り）、一二月の新嘗祭が行われ、半月ごとの月次祭なども行われる。花の撓は、一月の筒粥神事で占った農作物の豊凶を、金・銀・赤の玉をもつ人形を並べて知らせる祭事である。七月のみそぎ神事は、茅の輪くぐりや祈願短冊の奉納があり、一二月の御神楽祭は神職・巫女による感謝の舞いが奉納される。摂社については、四月の丸山神社祭と一二月の峯本宮祭は現地出張して行われ、一〇月の物部神社祭は本殿で行い、岩戸地区からの参拝を受ける。

筒粥神事



黒龍神社祭



大黒社祭



また、境内には多くの末社があり、それぞれの講中や奉賛会が中心になって祭事が行われる（金華歳時記に記載）。平成一五年に復元された茶室水月亭では、毎月第二日曜日に裏千家淡交会によって月釜が行われている。参拝者で賑わうのは正月と岐阜祭り、伊奈波通りに沢山の屋台店が並ぶ。以前は見世物小屋が建ち、縁日にしかない品物、飴細工・砂絵・地球コマ、新案の拡大描画機、太陽写真器、にせ菓などが売られ、いかさま賭博もあつて、見あきることがなかった。二月節分の夜は、奉納手筒花火が盛大に行われる。八月須佐之男神神社祭の夜は、八岐大蛇の目に見立てた赤い笹提灯が奉納される。これに合わせて地元自治会が盆踊り大会を開催する。

伊奈波神社には国重文の太刀を含む多くの刀剣や、県重文の本縁起・木造獅子頭など多くの宝物が

ある。

社務所に牧田種麿の板絵額が掲げられている。これは、岐阜祭りに出る一四両の山車に乗る人形を描いたもので、濃尾大震災以前の祭りの華麗さを伝える、貴重な作品である。今は、四両の山車しかないが、すべて神社に奉納されて市重要文化財になっている。

ほかに川合玉堂が、表に「入り馬」裏に「山水」を描いた屏風や、野口雨情が昭和二年に岐阜で作詞した「伊奈波音頭」の板額などがある。

牧田種麿の奉納額



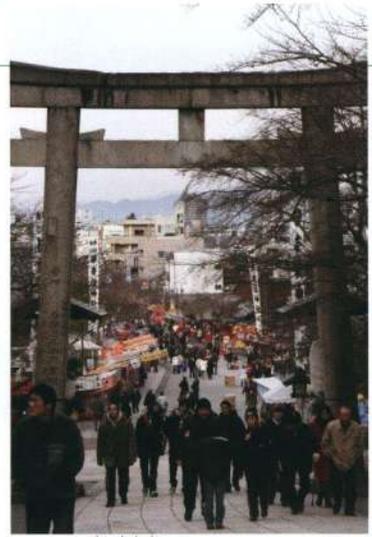
左義長



こどもみこし奉納



宵宮



さいたんざい  
県下一の参拝者で賑わう歳旦祭



例大祭 神幸

みそぎ神事



茅の輪くぐり



須佐之男神社祭笹提灯奉納

## 岐阜善光寺の由緒

岐阜善光寺は、正式には安乗院（真言宗醍醐三宝院派）である。

岐阜善光寺は、武田信玄が信濃善光寺を甲府に移して新善光寺としたものを、天正一〇年（一五八二）に、武田氏を滅ぼした織田信長が岐阜へ移したことに始まる。しかし、その年に本能寺の変で信長が殺され、二男信雄が、すぐに本尊を尾張甚目寺へ移した。本尊が岐阜に留まったのはわずか三か月ほどでしかない。一説には、澤彦和尚が信玄に面会して善光寺如来の分身を持ち帰ったとか、のちに織田秀信が正真の像を模造させて、七堂伽藍を建てたが、戦乱で焼失したともいう。江戸時代には、伊奈波神社の登り口に如来堂があり、付近を善光寺大門と呼んでいた。善光寺如来は一光三尊の阿弥陀仏である。この堂は独立した寺院ではなく、満願寺と安乗院が共同で管理していた。明治維新以後は、満願寺が廃寺になったので、安乗院の単独支配になった。その堂は濃尾震災で焼失し、いまの本堂は、大正六年に再建されたものである。昭和二〇年の強制疎開で、安乗院の諸堂が取り壊されたため、ここが安乗院本堂のようになった。

安乗院は愛護山林泉寺といい、明治維新までは、愛宕社の別当として活躍していた。その愛宕神社というのは、いまは伊奈波神社の末社の一つになり、秋葉神社と相殿の小祠になっているが、もとは忠魂碑のある一帯に広い境内を持っており、伊奈波神社の遷座以前からこの洞に祀られていたようである。伊奈波神社にある県重要文化財の石造狛犬は、天正四年（一五七六）に、愛宕社に寄進されたものである。伊奈波通二丁目は明治五年に愛宕町と改称している。愛宕の祭神は、火の神、迦具土神であり、修験道と結び付き太郎坊という天狗の姿をとることもある。安乗院自体には、青面金剛を本尊とする庚申堂と秋葉堂があった。秋葉堂は、宝暦二年（一七五二）の建立であり、秋葉神も愛宕と同じ迦具土神である。火難除けの神として、秋葉信仰が盛んになったため、秋葉神を追加して、祀ったように思われる。

町場は、火事が最大の悩みごとであり、金華地区各町内には、すべて秋葉様が祀られていた。遠江国秋葉山も神仏分離で、秋葉神社から三尺坊大権現が分離され、曹洞宗寺院の可睡斎に移された。かつては、町内から秋葉山へ代参を立てることが多かつ

たが、いまは秋葉神社が伊奈波神社へ出張して御札を配布し、可睡斎は、勝林寺へ出張して配布されるが、安乗院も独自に三尺坊大権現の御札を配布している。各町内・各家庭で奉祀される秋葉様はこれらが入り交じっている。



善光寺



善光寺お十七夜

## 善光寺の境内と行事

醍醐三宝院は、修験（山伏）の本山であるから、安楽院も屋外に、蔵王大権現を祀る護摩壇が設けてあり、年中行事にもいろいろユニークなものがある。

二月の節分には赤鬼青鬼が飾られる。七月の胡瓜封じはきゅうりを持参して護符を入れてもらう。八月のお十七夜は、善光寺の行事で本尊のお開扉がある。戦前は、一週間続きの人出になり、参詣者の頭上に籠を差し出してろうそく代を受け取るほど混雑したという。一〇月の不動明王大祭は、

山伏によつて柴燈護摩が焚かれる。

境内には、末光稻荷・大黒天・水子地藏などが祀られており、初午祭・地藏盆なども行われる。末光稻荷は、市内の紙屋連が、権現山に祀るつもりで伏見稻荷からお請けしたものだという。



節分星祭り



胡瓜封じ



不動明王大祭

## 伊奈波八か寺

平城京などには、朱雀など四神が配置されているが、道三や信長は岐阜城総構えの鎮護として各地の仏像を招致した。西野不動は蜂須賀村（現愛知県美和町）から、美江寺観音は、美江寺村（現瑞穂市）から、小熊地蔵は、小熊村（現羽島市）から、伊奈波善光寺は、甲府からである。

善光寺大門（伊奈波通一丁目）には、浄土宗西山派（本山は京都永観堂）の寺院が集まっている。織田信長が、善光寺如来を招致したとき、その門前に移転させたもの

である。もとは誓安寺・善澄寺・含政寺・極楽寺・大泉寺・安楽寺・浄土院・西光寺の八か寺があつて、いずれも上加納村（現八ツ寺町）にあつたという。

善澄寺の本尊阿弥陀如来と地蔵尊、大泉寺の本尊阿弥陀如来は、もと比叡山にあつたもので、一寺建立のため信長から拝領したという。本能寺の変が起きなかつたら、善光寺を中心に、信長の宗教政策を実現する一大寺院群になっていたはずである。いまは善光寺との関係は薄れている。浄土院・西光寺と誓安寺が移転または廃寺になったので、現在は五か寺である。



含政寺・施餓鬼会



極楽寺



善澄寺



安楽寺・地蔵盆



## 誓願寺・法圓寺・栽松寺

誓願寺は、伊奈波八か寺と同じ浄土宗西山派であるが、もとは清須にあった寺である。信長に伴って下竹屋町堀外（現上竹町）に移って来たが、信長はこの寺も八か寺と同時に現在地へ移転させた。

法圓寺は、同じ浄土宗でも知恩院を本山とする鎮西派である。斎藤道三がおおが大桑（現山県市）から移した寺で、善光寺との関係

は少ない。古くから広い墓地があり、松尾芭蕉を岐阜に招いた俳人安川落梧やすかわらくこや狂俳選者八仙はっせん斎さい龜遊きぎゆうの墓がある。他にも注目すべき墓があるかも知れない。境内には剣客加藤孝作の石碑もある。

栽松寺は、臨済宗妙心寺派である。ここにはもと天台宗一條院という寺があった。

承応二年（一六五三）に禅宗片岡庵となり、元禄一四年（一七〇一）にいまの寺号に改められた。いまも禅学道場に力を入れ、月例の座禅会・法話会や諸団体の職員研修なども行っている。



誓願寺



法圓寺・施餓鬼会



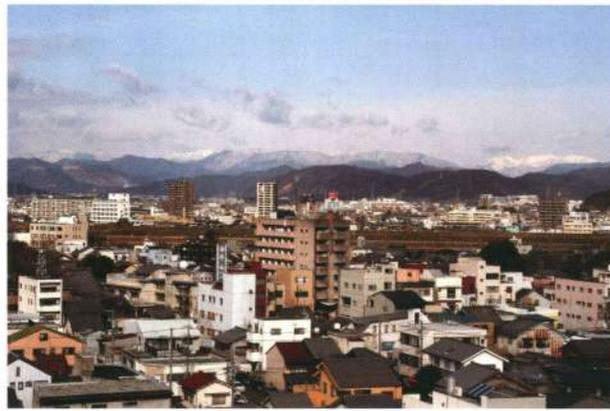
栽松寺・施餓鬼会と大般若会



# 一八 岐阜町の新たな玄関口 — 常盤町・白木町・栄扇町・松屋町 —

？この絶景はどこから見られる？

高層マンションが建ち並ぶ町の頭越しに、遙かに遠く雪山を望むことのできる小高い場所はどこ。



## 町の由来

齋藤道三どうせんは室町幕府時代の人であるから、城下町も西の京口を正面にして建設した。江戸時代になると、岐阜が尾張藩領になったこともあって南が正面になる。最初に岐

阜惣年寄ふつじょうになった加納久左衛門家は、白木町にあったという。岐阜町には町を取り囲む土居と堀があった。これを総構えそうかまえといい、いまの若松町・堀江町・栄扇町えいせんちやうの場所に当たる。総構えの外に伸びていた町場のうち、上下笹土居町ささどしじやうだけは、江戸時代初期に町地に編入された。土居もこの付近は初期に撤去されて、土居原横町が開かれた。ちなみに、明治五年、上笹土居町が常盤町に、東西の土居原横町が扇町・栄町に改められた。同時に、下竹屋町も松屋町に改められた。それぞれ元の町名に屈辱感くつじよくかんがあり、新時代の発展をめざそうとした気概きがいが表れている。

## 白木町

岐阜市役所は、濃尾震災のあと、明治二七年に白木町に新築、移転した。以後大正八年まで、現白木町県営住宅のところにあったのである。白木町の南端西側には、巡査派出所があり、その前に里程原標りていげんひょうがあった。

明治二三年の「岐阜みやげ」には、すでに「其南北に通ずる大路を本町（ほんちやう）通と称し……車馬絡駅（絶え間なく行き来する）行人織るがごとし」「白木町は最も繁華なる市街にして諸種の店肆（商店）を列ぬと雖も唐物店小間物舗（洋品店や化粧品店）殊に多し」とある。

白木町公園



古老の誇りは、「新婚さんが必要とするものすべてが揃う街だった」ということである。昭和三年の商工名鑑をみても、結納品から幟旗、乳母車から仏壇までの営業品目が並んでいる。いま、呉服店・洋品店はないが、金森生糸店や丸屋旗店が健在である。なお、旧松喜仏壇店が平成二〇年に国登録有形文化財になった。

大正一一年、市役所跡に（株）松竹座が創立された。さびれ始めた市北部発展策として、澤田文治郎らが発起したものである。演劇の松竹座（現県営住宅）と、映画の松竹館（現白木町公園）が建てられた。松竹座は、モダンな三階建てだったが、昭和二〇年に、強制疎開で取り壊された。赤煉瓦造りの松竹館は、戦災を免れ、終戦後いち早く営業を再開した。数年間は市内で唯一の娯楽施設として大いに賑わった。

白木町公園ができたのは昭和四五年、県営住宅（五階建て五〇戸）が建設されたのは、昭和六一年度である。公園には、プールが設けられたので、町ではプール当番を出すことになった。

駿河山の崖下に白木稲荷神社がある。ここには、秋葉神社も合祀されており、自治会として年に六回おまつりをしている。八

月の大祭には、社前の広場において、子どもに菓子を配り、大人たちは、用意された飲み物で親睦を深める。一月月は、濃尾震災を偲んで、お祀りしている。



白木稲荷神社夏祭り



丸屋旗店



日本そば 極

## 常盤町・栄扇町

「岐阜みやげ」に、「常盤町には酒肆多し」とある。かつて、常盤町には、醸造蔵がならんでおり、多くの酒樽が干してあったという。清酒の三田屋奥住半兵衛と横山萬造、味醂酒の大洞弥兵衛、味噌溜の三輪治郎八などである。近年、醸造業は金華地区から姿を消してしまった。

戦前からの老舗としては、結納品のさし源本店・唐紙の水戸紙店などがある。

東側山麓には、万力町から東別院にかけて、古くからの水路がある。戦前は、水路には細道しかなかったが、いまは、水路を暗渠にして拡幅され、鶯谷トンネルから長良橋へ向かうクルマの抜け道となっている。

栄扇町は、昭和二八年に栄町と扇町が合併することで成立した。ここは、岐阜空襲で丸焼けになったため、戦前から続く家はない。戦後は、職人や小商人が多く住んでいたが、そのころから営業しているのは賀雲堂印房・杉山板金・ポンプ工事の山兼のみになった。

大正・昭和期に活躍した洋画家・早川國彦は、このまちに住んでいた。伊勢湾台風では、強風による被害がひどかったが、堀

江町方面のように冠水することはなかった。用水が暗渠になったのは昭和四五年である。

総堀（忠節用水）跡



さし源



## 大乘教岐山教会

常盤町の東、駿河山（権現山）の中腹に、眺望閣が建てられたのは明治四四年である。白木町の清水（鏡屋商店）・牧村・井上・牧田の四人が出資して建設した貸席であった。



大乘教岐山教会



岐阜出身の書家・山本竟山の筆による「眺望閣」の扁額を掲げ、岩井延算寺の薬師如来と毘沙門天の分身を奉祀した。正面に伊吹山を中心に、白山から養老の山並みが見渡せ、ことに夕日や雪山の眺めがすばらしい。



眺望閣から時鐘楼に至る山道に、多くの石地蔵が置かれているが、いつもきれいな赤い帽子とよだれかけを着けている。年に四度、取り換えてくれる人がいるからだという。

開設直後に登閣した土方久元・伊東祐亨すけゆき両伯爵が、「飛嵐」閣と揮毫して与えたが、その名は、あまり広まらなかつた。戦後しばらく料亭などに利用されたが、昭和三四年に大乘教会が譲り受けた。

大乘教団は、昭和二二年に杉山辰子たけしよ（一八六八〜一九三二）教祖を奉じて、東京で設立された。教祖は、笠松の生まれで、法華経の信奉者になり、大正三年に名古屋で「仏教感化救済会」を設立した人である。岐山教会は、昭和三四年に、今川町の岐阜教会から分離して、眺望閣に開設された。釈迦如来を本尊として、左右に従来からの薬師如来と毘沙門天を祀つてある。その入仏を記念して、毎年五月三日に大法要が営まれる。現在の教会長は川田法佑氏である。

## 松屋町

松屋町の珈琲茶館左岸さがんは、もと渡辺甚吉の屋敷であつた。渡辺家は、織甚と呼ばれた呉服太物商で、縮緬の織り問屋として台頭した。縮緬は、江戸時代半ばから岐阜町周辺で、盛んに生産されるようになり、尾張藩御蔵物として京都へ出荷された。渡辺家は文政一三年の岐阜町長者番付で、すでに西方大関に掲げられている。明治二三年には、貴族院議員（多額納税者）に選出された、県下第一の御大尽おだいじんであつた。明治一〇年に、第十六国立銀行を創立してその頭取となり、三五年には、衆議院議員にも選出されるなど、政財界で大活躍した。一方

大地主でもあり、戦後の農地解放で大打撃を受け、この屋敷を手放すことになつたらしい。そのあと、料亭大浜屋が末広町からここへ入つた。現在は茶館に模様替えしている。

渡辺家の向かい側（現十六銀行松屋寮）に岐阜税務署があつた。これは何ともいえない組み合わせである。また戦前、ここに私立岐阜理髪学校（井上権一）ができた。

横山七右衛門家は、尾張藩主の御膳酒に指定された名門酒造家であり、その酒粕は、御膳所で鮎粕漬けに使用された。幕末の当主、鈴翁れいおうは、金華山焼の作者として名を残している。



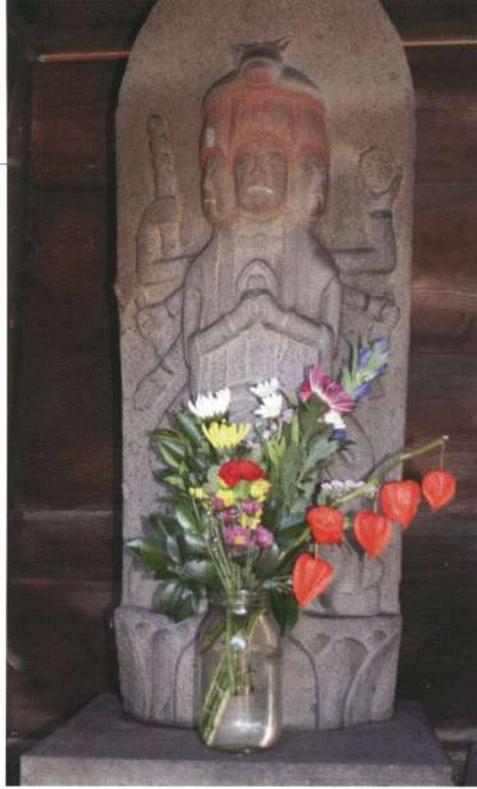
旧渡辺甚吉邸と庭園

# 一九 川下筋への川港

— 下新町・本町四〜七丁目・木造町西組 —

？馬頭観音がなぜここに？

頭上に馬の頭を乗せて優しく微笑む観音様。お供えのお花に、感謝を込めて。



## 上ヶ門の位置

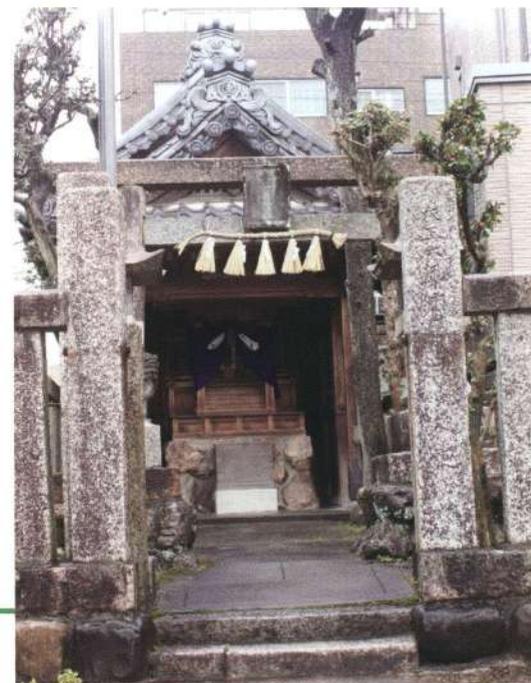
本町七丁目（旧名は上ヶ門町）は毎年八月に馬頭観音のお祭りを行っている。また木造町西組（旧名は天道町）は三・六・十月の一〇日に金比羅様のお祭りをしてきた。馬頭観音は馬の供養碑、金比羅は船の守り神である。それはこの辺りが岐阜町本来の

玄関であり、船や馬車の発着点だったことの名残である。七丁目には、総構えの堀が残っている（二〇節参照）。堤防へ上がる坂口には、石の道標があり、「右谷汲道・左御本坊道」と刻まれている。もと四屋町にあったが金華橋通り改修のため取り除けられたものを、ここに引き取ったのである。この住民は町の歴史に強い愛着を持っている。西材木町北端にある法運寺の旧名は「鳳堆寺」である。それは崇福寺前の長良川が

大鳥が羽を広げたような地形、つまり扇状地だったからだという。昔は、現在の長良橋から河渡橋までの間は、川が幾筋にも分かれて広がっていた。その本流は早田村の北側を流れ、今の川筋は井川という支流にすぎなかった。岐阜町は、井之口・今泉・早田の三か村にまたがって開設されたのであり、早田岩倉地区は、中河原・御園と並ぶ岐阜町の三大市場であったといわれる。長良川の本流が井川になったのは、一七世紀末、元禄時代からで、それまでは桑名へ通う船は主に鏡島湊で発着していた。その後、岐阜町まで遡航できるようになり、上ヶ門や下新町に川湊ができた。明治一四年



馬頭観音堂



木造町金比羅神社



長良川上流改修記念碑の説明板



本町七丁目の坂道（右上に馬頭観音堂がある）

長良川の堤防は、元は低い土手にすぎなかつたが、昭和一五年に、いまの堤防の本体が竣工した。ここは、堤防を拡張する余地がなかつたので、特殊な工法が採用された。川表を垂直に近い玉石張りにし、上部は、非常の場合に畳を差し込んでかさ上げする「角落とし」構造となっており、岐阜特殊堤として、岐阜県の歴史的土木構造物に指定

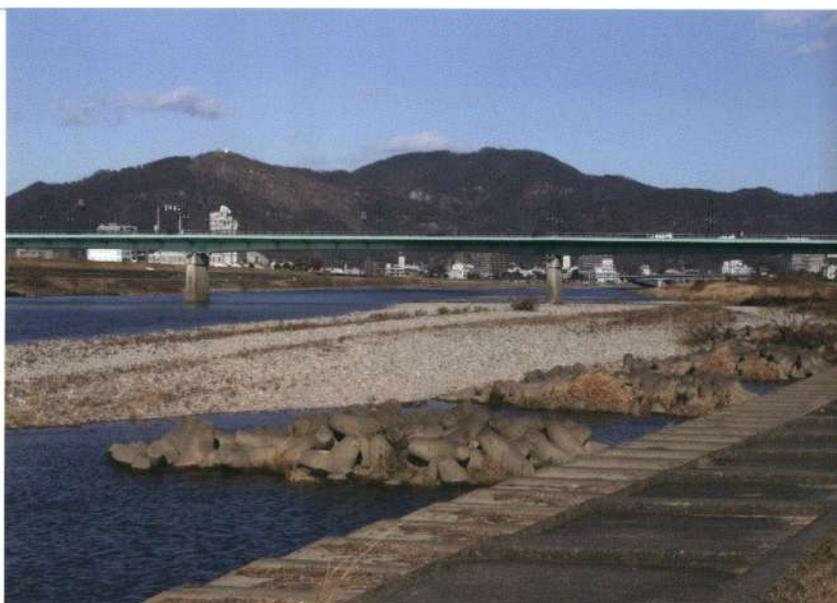
東側にあつた。  
長良川の堤防は、元は低い土手にすぎなかつたが、昭和一五年に、いまの堤防の本体が竣工した。ここは、堤防を拡張する余地がなかつたので、特殊な工法が採用された。川表を垂直に近い玉石張りにし、上部は、非常の場合に畳を差し込んでかさ上げする「角落とし」構造となっており、岐阜特殊堤として、岐阜県の歴史的土木構造物に指定

には上ケ門に荷物問屋二軒・荷船三五艘、下新町に問屋一軒・荷船五〇艘があつた。木造町西組には、かつて船頭たちが住んでいたのので、金比羅神社をお祀りしてきた。また、「海水湯」という銭湯（一八番地現駐車場）があり、桑名通いの船に運ばせた海水で、薬湯を立てていた。また、地続きだった岩倉へは、渡船が必要になり、越前街道の渡船として上ケ門渡しがあつた。昭和三九年に金華橋ができるまで、伊奈波中学校へ通う生徒も、渡船を利用していった。  
明治一二年に、片桐久治郎が上ケ門町で中牛馬会社の分社を開業している。本社は東京にあり、水陸運送と人夫車馬の手配をする会社である。ここから、荷馬車や乗合馬車が揖斐・谷汲方面へ毎日通つていった。その田中馬車屋の厩舎が若松町筋に入った

されている。  
護岸の先に水制が設けられているが、ここが船つなぎ場の跡であるという。なおこのとき、早田側の堤を約一〇〇メートルも引き下げて川幅を広げた。いまでは金華と早田が同じ伊奈波中学校区であることに違和感があるが、かつて早田岩倉は上ケ門の目の前にあつたのである。



岐阜特殊堤銘板



上ヶ門湊跡

## 本町四〜五丁目

本町五丁目の旧名は、車ノ町である。ここに、江戸時代後期に作られた山車（やま）があり、明治二十一年に弁慶・義経のからくり人形を載せる「安宅車」として改修された。この山車は、濃尾震災や岐阜空襲にも焼け残り、昭和三十三年に、岐阜市重要有形民俗文化財第一号となった。車ノ町の名の由来はわからないが、その山車が残ったのは不

思議な縁である。山車蔵は、木造町へ続く道とT字路になった部分にあったが、戦争中の強制疎開で取り壊され、北の堤防へ出る道になった。この町に清酒醸造の山田万兵衛家と味噌溜製造の服部太助家があった。昭和二年、野口雨情が服部家に泊まり、「伊奈波音頭」を作詞した。その直筆の板額が伊奈波神社にある。



伊奈波音頭板額

四丁目の旧名は鍛冶屋町である。ここの山車は残っていないが、その彫刻は、有名な諏訪の立川和四郎富昌の作だったという。貝崎家の仏壇も和四郎作であるという。



安宅車



湯葉作り (湯葉勇)



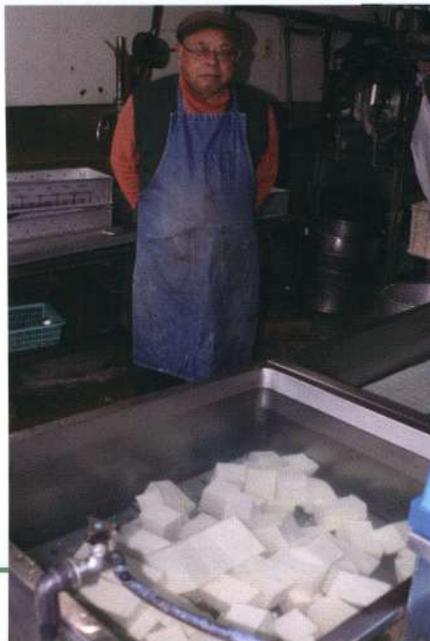
納豆作り (貝崎商店)



洋菓子作り (菊花堂)



金津鉄工所にはふいごがある



松尾豆腐店のご夫妻

本町四、五丁目は、どういう訳かいまも食品製造業者が多い。上ヶ門に続く人通りの多い場所であり、また合羽屋葬具店へ、近在から葬祭の依頼に来る客が、必要な食品を買い調えたという。五丁目の松尾豆腐店では、岐阜名物からし豆腐などを手作りしている。

また棚橋穀粉と八百重製粉が、和菓子原料の餅粉などを製造している。上ヶ門湊の移入品は米・雑穀などが主体だったし、岐阜町には和菓子屋が多かった。棚橋家の初代は服部太助家の番頭をしており、年季明けに「しこらん」(おこしの一種)の材料、白ハゼ製造を始めた。八百重堀家の本家は

麩屋だったが、跡取りではなかったのので、麩作りの廃液から粉を回収することを考えて分家した。出発点は違っていたが、戦時統制のせいで競合する製品が多くなった。かつては落雁の原料であるみじん粉(蒸した餅米を使う)が主製品だったが、いまは、団子やういろうに使う生粉が多いという。

四丁目では、貝崎商店が東京納豆を製造し、湯葉勇は、その名の如く各種の湯葉を作っている。菊花堂は、サブレー・クッキーなど洋菓子を作っている。神谷作市商店は酒・味噌・醤油の老舗問屋である。

# 二〇 外郭からメインロードへ — 木造町・啓運町・矢島町一〜二丁目 —

？どこに川があるの？

平田橋跡とあるが、橋が必要な場所とは思えない。



## 矢島一交差点

矢島一交差点は、いまも国道と県道が交わる交通の要衝であるが、以前に比べれば重要性は低くなっている。大正元年に、岐阜駅・長良橋間の道路が拡張され、市内電車が開通した。同時に伊奈波通も拡張され、

大正一二年には、その先、矢島町から四屋町まで、寺々の境内を削って、新道が開通した。ここにも電車を通す計画があったという。東西南北とも道幅八間というのは、当時としては市内有数の大道交差点であった。

## 木造町の誇り

木造町は、いち早く独自の「まちづくり憲章」（平成三年制定）を定めるほど、住民にまとまりと意欲がある。町内の神様として、東組は秋葉神社を奉祀し、正・五・九月の三度例祭を執り行なう。西組は、金比羅様を奉祀し、こちらも三・六・十月の三度例祭を執り行なってきた。平成二〇年から、東組に祭日を合わせて、両組が相互にお参りすることになった。いまでは年に三回も、提灯を並べ幟を立てて、立派に奉祀する町内は少なくなかった。日常の御神酒当番もしっかり行われている。このコミュニティの健在ぶりは、地域を走り抜けるクルマが、新道を利用するので、旧道が「木造横町」時代のまま残っていることが、支え

になっているのではないだろうか。



矢島町から見た木造町の景観



金比羅神社祭



秋葉神社祭



山崎米穀店

木造町の神輿と桜のトンネル

### 木造町の町並み

本町筋と矢島町筋に挟まれたこの地域は、元来、岐阜城下防衛の最前線であった。前面に土居と堀をめぐらせ、その内側に城の重臣の屋敷と寺院が配置されていた。堀の幅は、広いところは九間もあった。土居の内側も、十二軒屋前（現若松町北部）一丁あまりは竹藪になっていた。岐阜城陥落によって、武家屋敷は明屋敷（村）になったが、郊外にあった諸寺院が一齐に進出し、ほとんど寺院街になった。いまも五宗派九か寺

がある（次節参照）。

江戸時代になると防御施設は不用になり、文政五年（一八二二）に西側の土居が取り払われ、若松町が生まれた。いまでも若松町の西側に総堀が残っている。幅は半間ほどに狭まっているが、若松町側は玉石積みになっている。

明治七年、南側司町に岐阜県庁が開設された。これまで町はずれだった場所が一転して官庁街の隣地になったのである。山崎米穀店や仕出しのうお一は、官公署をお得意先として繁昌した。山崎家は濃尾大震災にも倒壊しなかった立派な造りである。戦前、この町には建築関係の職人、とくに瓦葺き師が多かった。寺の敷地に職人向けの借家が建てられていったようである。福井神仏具製作所は先代が大工から木地師に転職したのだという。彫刻・時絵・金具などの職人と連携して多種多様の神仏具を作るということで、横蔵寺の厨子や大垣まつりの山車など文化財の修復にも携わった。



若松町裏の総堀跡

## 啓運町

啓運町の正式な開設年月はわからないが、明治時代半ばに、法華寺の所有地に開かれ、法華寺裏と呼ばれた。法華寺の山号をとって啓運町と名付けられたのは、大正時代のものである。始めは大工・指物師や引き売りの商人などが住む九尺四間の長屋が多かった。木造町から入る南北の通路も、細い路地であった。高木むすび糸店は岐阜縮緬を織っていたが、名古屋の間屋で屑糸を原料にする織物があることに気付き、結び縮緬を考案したという。いまは工場を鏡島に移している。

## 矢島町通り

矢島町は、東海道線鉄道の開通で、岐阜駅に直通するメイン道路になった。いま矢島町一丁目は、金華地区で一番のビル街になっている。三、四階建てが多い中で、ひととき目立つのは十六銀行事務センターである。もともと同行の本店、のち竹屋町支店があったところで、所在地は中竹屋町になっているが、矢島町側に、新しく岐阜中央支店が開設されたこともあって、こちらが表に見える。街路樹がイチョウになったのは、高層ビル街化を想定していたためだろうか。



矢島町一丁目のイチョウ並木



矢島町一丁目西側の景観



赤壁の武山医院

相次ぐ道路拡幅により、表通りに古い建物は見られないが、意外に古くから続いている家が多い。一丁目中組に、江戸時代から続く名門武山医院がある。先祖は、赤壁の雅号を持つ文人でもあり、岐阜県医学校創設にも尽力した。いまも赤煉瓦風の建物で、子息が愛知県から出張診療して、維持されている。中川家も、先祖林庵が尾張の眼科医で、信長の眼病を治療するため岐阜に招かれ、みごと治療して中川少将の名を与えられたという。下組の水野家は、もと京都西本願寺の典医だったというが、三代目の弥三郎が侠客となり、勤王に協力して非業の死を遂げた。

水野家の筋向かいに万力ビルがある。この先祖は、万力呉服店加藤与三郎で、万力町を開設したことや、柳ヶ瀬に県下初のデパートを建てたことで知られている。

二丁目には、風変わりな「おとらやビル」が建っている。その先祖は、糶味噌商平田藤左衛門といい、篤志家として名高い。私財を投じて総堀の土橋を立派な木橋（平田橋の碑がある）に架け替えたり、大仏殿の修理に尽力した。

アーティスト・日比野克彦は一丁目の出身で、いま地元活性化のため、年末の長良

川で「こよみのよぶね」をプロデュースしている。

二丁目の秋葉神社は、社格と社地を持つ立派な神社である。元は堀端にあったが、道路付け替えのため移転した。湊町の秋葉神社が金華地区の鬼門に当たるとすれば、こちらには裏鬼門である。



秋葉神社



おとらやビル



万カビル

## 飯原服飾専門学校

飯原<sup>いははら</sup>キミ子校長は、県庁に勤めていたが、結婚退職して、上大久和町の自宅で知人などに頼まれて洋裁を教えていた。そのうち洋裁学校を開くことを考えるようになり、自ら東京の文化服装学院に進学して、同校の連鎖校になる資格を取った。伊勢湾台風後に現在地に進出し、昭和五四年に現校舎を建設した。高卒以上を対象とする専門課程もあり、男子学生もいるという。

服飾の分野でもコンピュータ技術が必須になり、CADの演習もある。ハローワーク所轄の職業能力開発コース（会計実務など）も開講している。



## 明照幼稚園

機関車型の赤と青の園バスが、町のお馴染みになっていく。明照幼稚園は、昭和三〇年に本誓寺境内に開設された。団塊の世代の入園難を、住職自身が体験したことがきっかけだったという。

昭和四二年に、学校法人本誓寺学園に改組した。定員六〇名である。平成二一年には新園舎が完成し移転する。ひなまつり音楽発表会や、秋の運動会をはじめ多彩な行事がある。五月の「はなまつり」には、白象の作り物を引いて大仏殿までパレードしていたが、いまは境内だけに止めている。七月の「おじぞうまつり」では盆踊りと、夜店の買い物体験をする。秋には、地域とのふれあい広場が持たれる。園児の安全確保のため、あまり開放的な運営ができない時代になっている。



## 二二 外郭を守る諸寺院 — 信長ゆかりの古刹と浄土真宗寺院 —

？どうしてお寺がたくさんあるの？

金華地区には、たくさんのお寺がある。伊奈波神社周辺のお寺は、斎藤道三、織田信長が集めたようであるが、岐阜町の西と

北にたくさんあるお寺は、どうしてだろう。



### 矢島町西裏の古刹

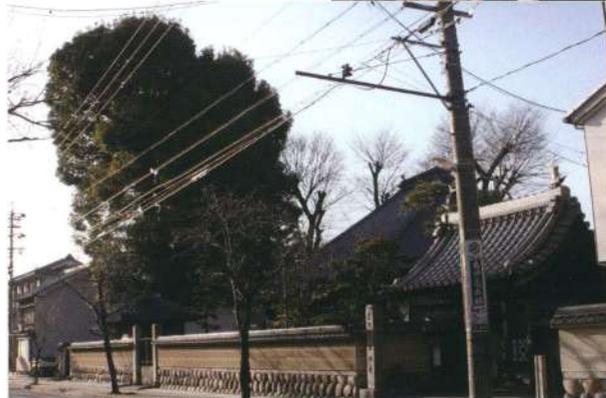
矢島町筋の西奥には、信長と縁のある寺院が多い。ここは、山と川に守られた岐阜城下が唯一平地に開けた部分である。信長は、城下防衛と、その勢威を示すために、



本誓寺



秋葉総本殿火防祭



勝林寺

重臣たちの屋敷と寺院を計画的に配置したようである。

「岐阜市寺院明細帳」(明治一〇年頃の届出書をもとに編集)によると、当時金華地区で、境内が一〇〇〇坪以上ある寺院は、蓮生寺・法華寺・正興寺・妙照寺の四か寺であった。しかし官有地として保護されているものに限ると、法華寺(一一五五坪)・本誓寺(七六七坪)・覚林寺(五八四坪)・常在寺(五七一坪)・勝林寺(五〇八坪)の

順になる(以下は省略)。町場を東西から挟み込むような配置になっている。

本誓寺(浄土宗)は、寺伝によれば享祿年間(一五二八〜三二)に、三宅村(現岐阜南町)から現在地へ移転してきたという。斎藤道三の父、長井新左衛門尉が活躍していたころである。江戸時代には、知恩院直末で美濃僧録の有力寺院であった。岐阜城攻めの前後には、城主織田秀信からも東軍の福島正則からも保護状を与えられた。この寺に、

長祿二年（一四五八）鑄造の尾張国甚目寺の撞き鐘が伝わっている。これは、信長が岐阜の時鐘にするため、取り寄せたものだという。

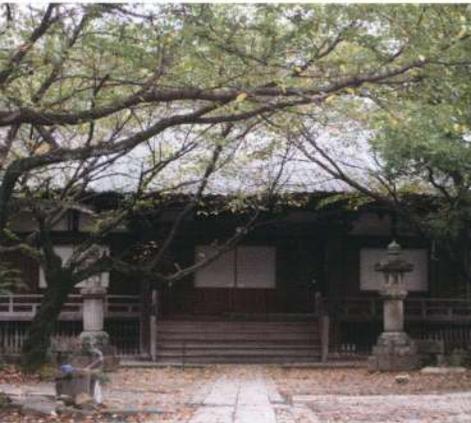
勝林寺（曹洞宗）は、寺伝によれば、もと尾張国小牧村にあつて少林寺といい、僧鶴翁が、信長の子息たちの手習い師匠であつたという。永祿一〇年（一五六七）、信長の岐阜入城に伴って岐阜に移り、その際勝林寺の号を与えられた。

慶長五年（一六〇〇）岐阜落城のとき、住職が殺され什物を略奪されて廃寺同然になつた。その後元和八年（一六二二）に本寺正眼寺（現稲沢市にあつた）天澤和尚によつて再興された。岐阜町で、唯一の曹洞宗寺院（自福寺を除く）だったので、毎年、静岡県袋井市の可睡齋による秋葉総本殿火防祭や名古屋市大光院による烏瑟沙摩明王祭なども行われる。境内にはクスノキ・ムクノキ・エノキの大木があり、八本が岐阜市の保存樹に指定されている。

法華寺（日蓮宗）は、寺伝によれば、信長が崇敬していた寺の住持日陽を清須城下から招き、永祿年中に建立した寺である。戦前には境内に「信長公お手植えの松」という老松があつた。天正七年、かの有名な

安土宗論で、日蓮宗が断絶の危機に陥つたとき、日陽が信長に申しひらきをして、宗門再興の許可を得たので、本山から感謝状を受けた。門前にいまも「宗門再興之道場」という碑が建っている。歴代の岐阜城主からの寄進状もあり、岐阜町の惣年寄賀島家や十八楼の主だった賀島鴟歩の墓もある。お手植えの松はなくなつたが、その後には植

えた桜がみごとに育つたので、花まつりの日は本行事のあとで文字通り花の下で小宴を張るようになった。



法華寺



「宗門再興之道場」碑



「平和の鐘」



万灯



現正寺



長照寺

施餓鬼会

長照寺（日蓮宗）は、天文六年（一五三七）に、武蔵国生まれの僧日述が草創したという。この寺で法華の守護神とされる鬼子母神の祈祷会が行われるが、現住職は、何百日もの荒行を仕遂げて、それを執行する資格を得ている。

現正寺（日蓮宗）は、文禄四年（一五九五）元禄三年（一六九〇ともいう）に妙顕寺塔頭より日政が岐阜に来て開基したという。日蓮宗各寺院は七月九日の「平和の鐘」に積極的に参加しているが、当寺は、先代住職がフィリピンで戦死していることもあって、終戦の日にも半鐘叩きを行っている。

日蓮宗の三か寺は、それぞれ本山が異なるが、日蓮上人の命日に当たる一〇月三日には、お会式の法要がある。前夜に会式花（桜の造花）や万灯という特有の飾りを立てる。三か寺集まっているので、以前は、沢山の提灯が点って賑やかだったという。ほかに節分星祭りや盆施餓鬼の法要も行われる。

## 木造町のか四か寺

木造町・下新町・中大桑町などには、明

治四一年まで、大字稲束という部分があった。これは、慶長五年（一六〇〇）岐阜城陥落後に、武家屋敷の跡地を町方に入れず、別に明屋敷村を編成したからである。明治八年に、忠節村と合併して稲束村になった。木造町の寺院は、この武家屋敷跡に建立されたものである。ただ、すでに町方に何らかの寺地を持っていた護国寺と即得寺は町方に編入されるなど、例外があつてややこしい。

護国寺（臨濟宗）は、天正一四年（一五八六）に岐阜城主池田輝政が、長久手の戦いで戦死した父と兄の菩提所として、建立した寺である。父信輝は信長の乳兄弟であり、のちに織田秀信からも信長・信忠の位牌所に指定された。もとは岐阜城山下で六〇〇〇坪の敷地が与えられていたが、慶長五年岐阜城陥落のさいに焼失してしまった。尾張藩支配下の寛文三年（一六六三）に現在地に五分の一の替え地が与えられたのである。

正興寺（日蓮宗）は、もと京都要法寺（興門派・日蓮本宗）の末寺であり、他の日蓮



護国寺



正興寺

宗寺院とは門派が異なる。慶長一四年（一六〇九）に今泉村から現在地に移転した。信長の眼科医だった中川家の位牌と墓碑がある（前節参照）。ここも鬼子母神大祭が執り行われる。

矢島町筋に近い寺院と護国寺は、信長以降の岐阜城主が城下に集めた、いわば官立的な要素がある。

これに対し、岐阜落城後に、織田秀信の家臣屋敷を入手して建立された、浄土真宗・真宗寺院は民間活力の権化ともいえる。本願寺は、このころ東西両派が対抗して全国



即得寺



蓮生寺



法光寺

に教線を広げていた。岐阜町近辺でも慶長八年（一六〇三）に、西掛所（御坊）が開かれ、寛永元年（一六二四）に、東掛所（御坊）が開かれている。法華寺が氏家ト全屋敷跡というのと、即得寺が百々越前守屋敷跡、蓮生寺が木造左衛門屋敷跡というのでは、時代も移転の事情もかなり異なっている。正興寺は後者に近いようだ。

即得寺（浄土真宗本願寺派）は、寺伝によれば、天正一二年（一五八四）に、加納広江村より当地へ移った。ただし百々屋敷を入手して寺容を整えたのは、慶長五年（一六〇〇）以後の筈である。開基善教は駿河国賀島村出身で賀島姓であるが、米屋町賀島家とは全く別系である。尾張中島郡中村（現羽島市か）で蓮如の教化を受けて兄弟で

### 町北の浄土真宗・真宗寺院

出家し、のち加納へ草庵を移したもののいう。蓮生寺（浄土真宗本願寺派）は、寺伝によれば、慶長九年（一六〇四）に、現在地、すなわち木造屋敷に移って蓮生寺と改称した。開基善教は証如の弟子ではじめ信州府中（現松本市）で欲生寺を創建し、その後井ノ口へ転地したものである。

法光寺（浄土真宗本願寺派）は、いま所在地は下新町になっているが、もとは明屋敷分字下之屋敷であった。やはり織田秀信家臣の屋敷跡であろう。寺伝によれば、慶長五年ころに桑田村（早田）から移転した。前身が真言宗だったため、この宗派としては寺の造りがやや異なっている。

普賢寺（浄土真宗本願寺派）は甚衛町にあるが、こは林甚右衛門屋敷跡である。やはり慶長五年に羽栗郡若宮地村（現岐阜南町）から移転した。



普賢寺

西野町にある西別院は、慶長八年に創立されたが、そのとき木造横町にあった願誓寺がその境内へ移転した。また蜂屋横町（蜂屋兵庫屋敷跡）には上宮寺があったが、これも貞享四年（一六八七）にその隣へ移転した。金華地区の四か寺とこの二か寺が西別院の役寺だったという。

浄安寺（真宗大谷派）は、中大桑町にあるが、もと明屋敷分字斎藤屋敷の地である。ここは三品甚五兵衛屋敷跡といわれ、やはり慶長五年に早田村から移転した。始め、長嶋のうち唐櫃村（現三重県木曾岬町）に創立され、天文一四年（一五四五）に井ノ口長井洞へ、次いで、天正一二年（一五八四）に早田村へ引越したという。

真光寺（真宗大谷派）は、やはり中大桑町、

もと明屋敷分字齋藤屋敷の地である。ここは齋藤齋宮（後の俳諧師徳元）屋敷跡である。始め尾張国三ツ柳村（現羽島市）に創立され、慶長八年に移転してきた。

法運寺（真宗大谷派）は西材木町にある。寺伝によれば、開基法運坊は堀将監という齋藤龍興の家臣だったが、主家滅亡ののち頭如に隨身して鳳堆寺を創立した。その寺は慶長五年の岐阜兵火によって焼亡した。その後、正保二年（一六四五）に、齋藤国濟屋敷跡（真光寺の東隣、国濟と齋宮は同一人物か）で法運寺として再興したが、これも明和の火事で焼失した。寛政一二年（一八〇〇）に、元の西材木町に戻って再建したとする。



浄安寺

以上のように、浄土真宗・真宗の寺院は関ヶ原の戦い後に一斉に、総構えの外縁部に配置されていた武家屋敷を取得して、いまの寺地を開いたのである。もしかすると、江戸幕府に、危急の際に軍隊が宿営できるよう、旧武家屋敷を、浄土真宗寺院にしておくという意図があったかもしれない（佐々木映徹氏談）。しかし、どの寺にも特に優遇されたという言い伝えはない。

これらの寺院の境内には、大イチョウが見られるが、これは火事するとき、水を吹いてお堂を守るとされている。法光寺と浄安寺のイチョウは、市の保存樹に指定されている。また毎年の法要のうち、親鸞聖人の命日（旧暦一月二八日）に行われる報恩講が重視されている。本願寺派は新暦一月一六日を命日として、その前に各寺で報恩講を行い、大谷派は新暦一月二八日を命日としている。



法運寺



真光寺

平成一九年五月、「金華歴史文化懇話会」が発足し、「ふるさと岐阜・魅力発見大作戦」が始まりました。その六本柱のうち「ふるさと金華・歴史発見」の担当者のひとりに選ばれてから、二年間がアツという間に過ぎてしまいました。

今回「まちまるごと博物館」という構想があることを知りました。岐阜市には金華山・長良川という観光資源がありますが、それを単なる史跡名勝として宣伝するだけでは人が来ない時代になりました。一方、地域の人口減少・住民の高齢化がどんどん進んで、生活基盤が劣化する兆しも出ています。そこで、金華地区を「町歩き」が楽しめる場所にする事で観光地としての魅力を補強し、地域の活性化にもつなげようという考えだと思えます。

日本の古い都市は江戸時代の城下町が多い中で、岐阜は川港を中心に発達した問屋商人の町だったという特色があり、また第二次世界大戦の戦災を免れた古い町並みがかなり残っています。しかし二〇年前ならいざ知らず、もはやハーブ面でもソフト面でもこの構想の実行は手後れだという声もあります。

私の経験からすると、観光の魅力は、ただ建

物や景色を見るだけでなく、そこで暮らす人たちと話をすることで格段に高まります。ですから、住民が自分も地域のもてなし役であるという自覚を持つことが大切です。といっても、特に身構えてどうこうするというものではありません。自分から町歩きを楽しみ、出会う人と笑顔で声をかけあうようにすることです。本書編集の目的はそのために役立ちたいということでした。具体的には「金華の住民が町歩きをするための案内書」とすること、「その場で目に見えるものの話」を集めることです。その方法としてはまず、地域の人たちと町についての勉強会を開くことでした。

しかし、結果はこのようなものになってしまいました。私の能力の不足と時間の不足によるものです。衆知を集めて作るはずの内容が、個人的な作業に留まってしまいました。せつかく多くの人に聞かせていただいたお話を十分に把握できていません。苦しまぎれに書物などを調べて穴埋めした部分が目立ちます。地域的な記述の密度にも大差ができてしまいました。聞き取りには話し手と聞き手の記憶違いや聞き間違いがあつて、再確認が必要ですが、それもでき

ていません。歳時記も私のノートのままで、不要の検討ができていません。つまり本書は完本ではなく、これからも勉強会を続けるための私の中間報告に過ぎません。

多くの方に「昭和一〇年ころの町並み図」を作っていたいただきましたが、今回は収録できませんでした。本当に申し訳ありません。今後それを使って地区ごとに町歩き会をすることを考えています。みなさんの手で完成本ができることを期待しております。ご協力いただいた方々から御礼とお詫びを申し上げます。

なお、内容充実を図るものとして、藪下浩・寛真理子・大塚清史の三氏による「金華街角コラム」と、八神武夫氏編の「ふるさと金華の寺院」が収録されています。

平成二一年三月

篠田壽夫





## 板垣退助と岐阜 — 「板垣死すとも自由は死せず」 —

### 板垣退助と岐阜中教院

明治一五年（一八八二）四月六日、岐阜を訪れた自由党総理の板垣退助は、金華山麓の岐阜中教院で、一時間半におよぶ演説をおこなった。明治一〇年代前半には、全国的に自由民権運動が盛りあがり、明治一五年早春に、岐阜県にも濃飛自由党が結成されている。板垣の来岐は、県下の運動を発展させるために、濃飛自由党が招いたものであった。

板垣は、東濃で遊説をしたのち、四月五日に岐阜に入り、六日の懇親会に臨んだ。演説後に、気分がすぐれない板垣が会場を出ようとした矢先、刺客に襲われたのである。そこで発したとされる「板垣死すとも自由は死せず」は、名ぜりふとして語り伝えられている。事件を知った同志は続々と岐阜に集まり大騒ぎとなったが、幸い板

垣は軽傷で、四月二五日に大阪へ向けて出発した。自由民権運動は、これをクライマックスとして衰退に向かうが、岐阜は、運動の一大舞台として史上にその名を留めることになった。

### 銅像の建立

この事件を記念して、大正七年（一九一八）四月二一日、板垣夫妻を迎え、岐阜公園内で板垣像の除幕式がおこなわれた。その場所は現在の板垣像が立つあたりで、その後、毎年遭難記念祭が催されている。

遭難場所（現在の「信長の庭」辺り）には記念標石が建てられたが、平成一一年の発掘調査で、地中から見つかったコンクリート製の標柱がこれと思われる。

しかし、銅像は戦時中の金属供出で姿を消し、台座だけとなってしまった。戦後直後の一時期は、

胸像がその上に載せられていたが、昭和二五年五月三日に二代目全身像の序幕式が挙行され、彫刻家・柴田佳石による板垣像が、事件現場に立つこととなったのである。これが今の板垣像だが、平成一一年二月に現在地、つまり初代銅像があつた場所に移された。

像の台座正面には、自由党総裁で、序幕式当時の総理大臣であつた、吉田茂の手になる「先生夙唱自由説、民権民主済時難、算来明治功臣多、将相全才誰有如」の題辞があり、早くから自由民権を唱えた板垣を、将軍と宰相の才を兼ねそなえた人物として、讃えている。裏面にあるのは、昭和二五年四月付けの、山田永俊による長文の由来書で、遭難事件の概要と、初代銅像建立の経緯、戦時中の供出を経て再建を成し遂げた喜びが述べられている。



戦後直後の板垣退助胸像



初代板垣退助像

# 正法寺の籠大仏 — 日本三番目の大仏？ —

大仏を護ってきた人たち

正法寺の所在する町名の大仏町は、明治四二年（一九〇九）に付けられた。

同寺の、大釈迦如来像にちなむものという。「籠大仏」の名で親しまれるこの仏像は、正法寺第一一世の惟中和尚が発願して造立



大仏の図（明治初期）岐阜市歴史博物館蔵

を始めた。寛政六年（二七九四）

七月、加納藩士の田辺政六は、着手されたばかりの大仏を拝観し、日記に次のようにしている。

「この寺で今年、大仏の建立が始まった。まだ首ができてはいるだけだが、首の大きさは一丈二尺（三・六メートル）、耳は一間（一・八メートル）、座像で高さは四丈（一二メートル）だそうだ。日本で京都・奈良の次は、岐阜の大仏だと評判である。五百羅漢も現在で二百体ほどできている。まだ大仏堂はなく、境内のどこかに建てるそうだ。この大仏は、下地を籠で組立て、その上に厚く（紙を）貼り、金箔を置く予定というが、まだ顔は反古で貼ってあるだけである。」

大きさは、一三八ページに掲載した実寸と少し違うが、造像技法のあらましは伝えている。しかし「反古」は間違いで、実際には経典である。

京都・奈良に次ぐ、日本三番目の大仏と言われているが、京都方広寺の大仏は、寛政一〇年（一七九八）に焼失してしまった。もちろん鎌倉の大仏も、このときにはあつたが、地理的に遠いためか数えられていない。

造立にはかなり時間がかかっているが、資金だけでなく、大仏に貼る経典を集めるのが、難航したのであろう。岐阜を訪れた浄土宗の徳本上人が迎えられて、文化八年（一八一二）八月二十七日に開眼供養をつとめ、像が完成したのは、さらに後の天保三年（二八三二）四月と伝える。大仏堂がいつ出来たかははっきりしないが、岐阜県図書館には、大仏堂の敷地を確保するために、水路を曲げたときの絵図が残されている。

弘化三年（一八四六）に、岐阜に来た尾張藩士の細野要齋は、以前に藩主の徳川齊荘が岐阜町に来

たときに堂を修理したと聞いた。齊荘の来岐は天保一四年（一八四三）・同一五年で、そのとき大仏堂は、すでに修理が必要な状態だったわけである。

安政五年（一八五八）には、大仏堂や仏像の修理のため、募金をすることが尾張藩から許され、藩領内の町や村に触れが出された。要齋は、安政六年にも大仏を拝観し、堂内の柱に高さや目・口などの大きさが書かれていたことを、記録している。

全国的に珍しい技法で造られた籠大仏は、御前立の阿弥陀如来坐像、胎内仏の薬師如来坐像とともに、岐阜県重要文化財に指定されている。正法寺住持の熱い思いだけでなく、それを支えた江戸時代の金華地区の人たちの力量を示す仏像といえよう。

全国的に珍しい技法で造られた籠大仏は、御前立の阿弥陀如来坐像、胎内仏の薬師如来坐像とともに、岐阜県重要文化財に指定されている。正法寺住持の熱い思いだけでなく、それを支えた江戸時代の金華地区の人たちの力量を示す仏像といえよう。

# 岐阜提灯 — 世界に誇る日本の伝統工芸 —

## 岐阜提灯の起源

全国にその名を知られる岐阜提灯。江戸時代後期の風俗記録、喜多川守貞著『守貞謾稿』(嘉永六年序・一八五三)には、「岐阜提灯 岐阜ハ濃ノ地名、其地ヨリ出ス。挑灯骨極テ細ク、紙薄ク、絵美ニシテ孟蘭盆ニ富者専ラ用之」と記されている。この「細いヒゴを巻く」「薄い紙を張る」「美しい絵柄を入れる」という特徴は、

現在まで連綿と受け継がれ、実用的な日用品にとどまらず、伝統的な工芸品としての付加価値を高めてきた。  
その起源は定かでないが、慶長年間創始と伝える説があるほか、二代尾張藩主徳川光友の時代、上今町に秋草の彩画を施した上品な提灯を作る提灯屋があり、代々「お買い上げ」を受けたのが最初ともいわれている(長瀬寛二編『岐阜みやげ』)。

## 岐阜提灯の復興

幕末、その製造は一時衰退したが、明治十一年(一八七八)、岐阜に明治天皇が行幸されたのを機に、実業家・勅使河原直次郎を中心に復興が図られた。その製造は、金華地区が中心で、明治三四年の「岐阜提灯同業組合広告」では、米屋町の勅使河原合資会社をはじめ、小熊町尾関商店、常盤町村瀬栄次、常盤町岡部要助、上今町市



「縞揃女弁慶」(見立て三井の鐘)  
歌川国芳画(天保14年~弘化4年)  
当時の岐阜提灯をモデルに描いたと思われる浮世絵。



岐阜提灯 御所形 月に秋草図  
明治時代後期  
明治天皇下賜と伝える岐阜提灯。



勅使河原合資会社旧社屋  
(米屋町2番地・明治40年頃建築)

橋商店と、八ッ寺町の泉商店が名を連ねている。各製造元は、形状や意匠を凝らした提灯の製作に励み、提灯に入れる絵柄の下絵を、地元の日本画家・牧田種麿や佐脇波登麿をはじめ、川端玉章や川合玉堂などの著名絵師にも依頼した。

明治二〇年八月には、伊奈波神社で岐阜提灯品評会を開き、四軒の製造業者が、参道や拝殿などに提灯を飾り、来賓の投票で順位を決めている。

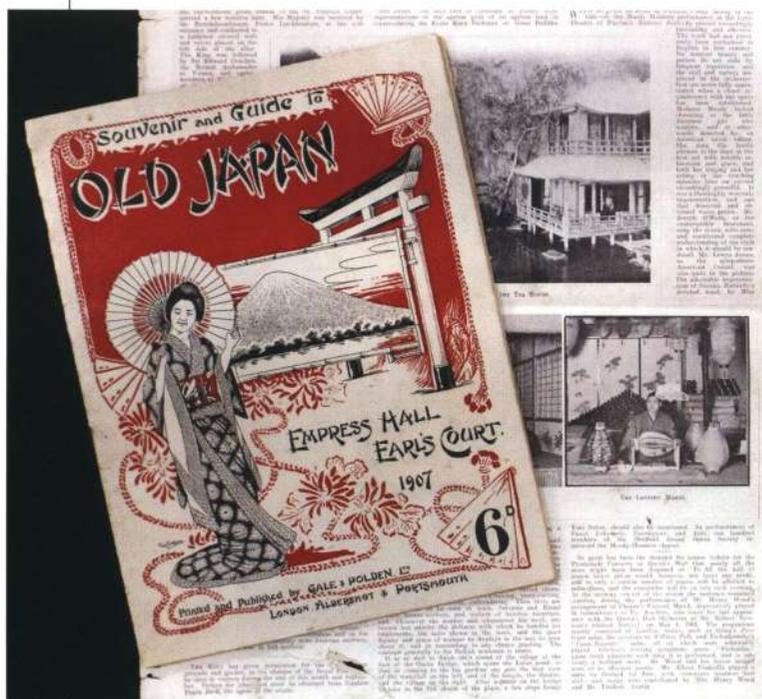
さらに、内国勸業博覧会や海外における博覧会へも、岐阜提灯の出品を積極的におこなった。そして、品評を受けることで、製造技術の向上を図り、やがて国内をはじめ海外の博覧会でも、高い評価を受けるようになったのである。

岐阜市内の岐阜提灯生産数量は、明治三六年に二十二万六千百九十張、生産額三万五千七百五十円、職工数百九十名を数え、同三九年には生産数量六十三万

五千張を数えるまでになった。

さて、明治四〇年、英国ロンドンで「オールド・ジャパン」展が開催された。会場には、金閣風の建物、庭園、桃山建築風の寺院など、日本の伝統的建築物が再現され、その周囲に、大工、友禅職人、銅細工師などの職人による、デモンストレーションブースを配置した大規模なものである。この時、湊町の堀丈吉氏が、提灯職人として現地へ赴き、張りの実演をおこなった。その様子は現地の雑誌にも紹介されており、岐阜提灯が装飾品として、海外でいかに好まれていたかを知ることができる。

現在、岐阜提灯は、国の伝統的工芸品に指定され、金華地区には今も大手の業者をはじめ、提灯製造・販売及びその関連業者が多数所在している。



オールド・ジャパン展のカタログと紹介記事  
(明治40年)  
中央右側の写真が「ランタン・メーカー」の堀丈吉氏。



日英博覧会会場と紙製品展示ブース  
(明治43年)

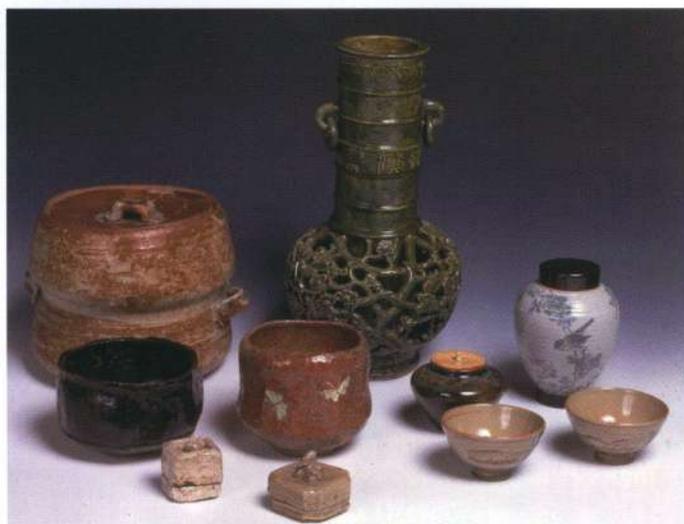
英国で開催された博覧会。岐阜提灯や紙製品も出品され、名誉大賞、金賞等を受賞した。

\*掲載資料は、いずれも岐阜市歴史博物館蔵

## 金華山焼 — 時と人を越えた伝統の技 —

### かけらの落ちてている畑地

岐阜城への登山口の一つである七曲<sup>ななま</sup>がり道を登ると、松山町と夕陽丘町の境で小さな崖に突き当たり左右に道が分かれる。崖の上に出てみると、現在は駐車場に整備されているが、数年前までは、小さな畑地であった。



昔はこの畑地を何気なく散策してみると、足下<sup>もと</sup>に色とりどりの陶器の破片を見つけることができた。縄文時代や弥生時代の遺跡でも足下には土器や石のかけらが散乱し、大昔に人々が生活していた場所であることを知ることができると。この畑地も遺跡であろうか。

### 金華山焼の収集

岐阜公園内にある岐阜市歴史博物館は、昭和六〇年に開館した博物館であるが、ふるさと岐阜にゆかりの深い郷土歴史資料の収集と保管、研究が活動の一つの柱である。岐阜市の伝統工芸である和傘<sup>わがさ</sup>や提灯<sup>ちよんちん</sup>、さらに団扇<sup>うちわ</sup>等は当然のことであるが、「金華山焼」と称されるふるさとの焼き物を積極的に収集し、展示会や館蔵品図録を通して紹介をしている。

「金華山焼」は、時代も作者も

制作意図もさまざまな焼き物であるが、岐阜市のシンボルである金華山の麓で焼かれた陶器という意味で「金華山焼」と称されるものである。作陶家の違いによる個々の焼き物の名称を使用しようという提案もあるが、時と人の違いを超えた岐阜市全体の工芸品として「金華山焼」と総称することに大きな意義がある。ふるさと岐阜の誇りの一つとして未来に繋げていきたいものである。

### 武士の制作した金華山焼

織田信長が岐阜入城の後に、金華山の麓で焼き物を作らせたという不確実な伝承があるが、金華山焼として初期と考えられる作品は、岐阜市歴史博物館が所蔵する、高台<sup>こうだい</sup>の脇に二重の環の中に「黙」という印を押した茶碗である。この茶碗は「黒六」、すなわち江戸



安藤百曲「黒茶碗」

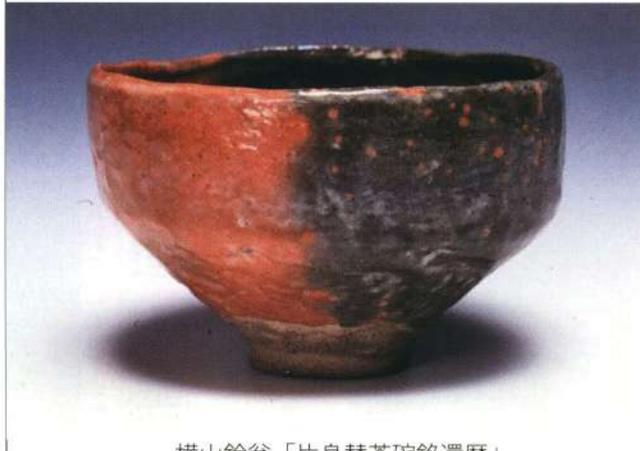


黒田六一郎「赤茶碗」



時代後期の天明年間（一八世紀中頃）に、尾張藩岐阜奉行であった黒田六一郎が制作した楽焼き風の赤茶碗である。

歴史博物館の所蔵品には、高台脇に「百曲」という印を押した黒茶碗がある。この茶碗は、黒田六一郎より数十年後、岐阜奉行所の手代であった安藤百曲が制作した物である。百曲は、茶碗、水指、香合、蓋置など、確かな作陶技術に支えられた優れた作品を残して



横山鈴翁「片身替茶碗銘選曆」

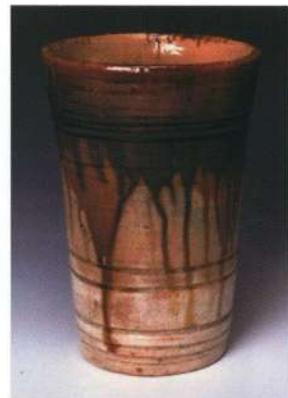
いる。

江戸時代末の横山鈴翁は、御用商人であったが風雅を好み、黒田や安藤のような楽焼風の作品が知られているが、黒織部茶碗や灰釉や鉛釉などを施した作品もあり、瀬戸に見られるような復古調の作風をしている。

### 明治時代以降の金華山焼

江戸時代の金華山焼は、尾張藩士や御用商人の手により個人的に制作されてきたが、明治時代に入っても私的な作陶活動は継続されていた。その中で明治二九年二月に金華山の南麓梅林公園近くに窯が開かれた。「金華山焼釜三」と称したが、この窯を築いた福田旭水は焼き物の量産化を図り、ブランド化を目指し、「金華山焼」の名称で岐阜名産の一つとして販路を拡大した。

大正元年に岐阜公園に窯を築き作陶活動を行ったのが、矢島寿山



福田旭水「水指」

である。矢島は、私的でもなく量産化でもなく純粋な陶芸作家としての道を歩み、中国趣味的な個性あふれる作品が異彩を放っている。

旭水と同じ頃、作陶活動を行ったのが、林晃三である。林は、茶道具を中心に作陶し、志野や織部や伊賀等の伝統的な釉薬を使用した「千歳焼」と称する作品を制作した。歴史博物館所蔵の黒茶碗には、「金華山山下千歳窯創始大正卯四初秋」とへら書きされている。大正四年は大正天皇の大嘗祭が行



矢島寿山「花生」

われた時であり、喜ばしい気持ちから「千歳窯」と命名したものであろう。

七曲がり口の崖の上、畑地に陶器の破片がたくさん落ちていた場所、ここが林晃三が大正四年に千歳窯を築いた場所である。

先人たちが、時と思いをそれぞれ違えて作陶してきた「金華山焼」であるが、いつの日にか再び復活する日の来ることを夢見るのも楽しいものである。



林 晃三「伊賀写水指」

## 金華水防団 — 金華を襲った水害 —

### 金華水防団

長良川に接し、度々洪水に見舞われてきた金華地区。昭和三二年（一九五七）、水防法の規定に基づき、水防団の設置、区域、組織などを定めた岐阜市水防団設置条例が制定された。これを受け、昭和三四年七月、当時の金華広報連合会長後藤喜八氏、同副会長若染一雄氏の尽力により、若染一雄氏を初代団長に、金華水防団が結成された。担当区域は、御手洗から四ツ屋公園までの長良川。堤防延長は二千三百メートルである。

水防団員は、一般的に消防団員が兼務していることが多い。しかし、岐阜県ではこの金華水防団が所属する岐阜市水防団、ならびに羽島市水防団、木曾川右岸地帯水防事務組合、海津市高須輪中水防団の四団体は、全国的にも珍しい専任水防団となっている。

周辺地区では、本町七丁目と四

屋町の境から下流の長良川の左岸は、明治三二年設置の、加納輪中水害予防組合による加納輪中水防組が出水に備え、右岸では、昭和九年、名称を変えた長良川北水害予防組合が、川北水防組を組織していた。それに比較して、金華地区では、水防団結成までの歴史が浅く、当初は大変苦勞したと伝えられている。

### 金華を襲った水害と陸間

昭和三四年九月、伊勢湾台風により長良川は大出水となった。岐阜市忠節の測水所では、二七日午前五時に、警戒水位を三メートル上回る五・五メートルの水位を記録し、長良橋付近の内堤防を越えた水が、河原町地区及び御手洗を冠水させ、さらに本堤防も溢流して大宮町、大仏町、松ヶ枝町、梶川町の一部までもが浸水した。

金華地区の被害は、全壊六棟、半壊九棟、床上浸水四七〇棟、床

下浸水二三〇棟を数えるとともに（二八日判明分）、観覧船や荷船なども多数流失した。

さらに、翌年八月に襲来した台風一一、一二号では再び長良川が増水し、校区では床上浸水二一八



台風 10 号で増水した長良川（平成 10 年 10 月 18 日）



浸水した長良橋電車停留所（大正 14 年 8 月 17 日）  
加納輪中水害予防組合編『水防要覧』（昭和 5 年）より

棟、床下浸水五〇棟（二六日現在）の被害が発生、さらに翌三六年六月の梅雨前線豪雨、九月の第二室戸台風でも浸水被害が発生した。

いずれも長良橋付近からの溢流浸水が大きな原因であったが、当時の陸閘は角材を落とし込む方式のため、その角材調達が間に合わないことがあった。

そのため、昭和三七年六月長良橋南詰に、長良橋通りを閉鎖して浸水を止める高さ三・三六メートルの防水扉「大宮陸閘」が新設された。これに伴い、岐阜県知事、岐阜市長、岐阜県警察本部長、名古屋鉄道株式会社の四者で、陸閘操作に関する協定が結ばれた。

現在、大宮陸閘の場合、長良川右岸長良橋水位観測所の水位が標高一九・八メートルに達し、なお上昇する恐れのある場合は全閉し、それ未満に減水し、増水の恐れがないと全開する。この水位は各陸閘毎に決められており、例えば観覧船事務所前の「港町陸閘」では一九・三三メートルである。

## 伊奈波貯水槽

一方、大雨の場合、金華山から一気に流れ出る水による被害も多く、特に、伊奈波神社参道の流水により、その付近の住宅が、床下浸水することが多かった。そのため、昭和五六年、神社前広場地下に伊奈波貯水槽が建設され、ここで一旦水量を緩和してから、用水路へ放出するようにした。



ゲートを閉めた大宮陸閘



ゲートを閉めた港町陸閘



岐阜市水防団連合演習における金華水防団の土のう積み工

## 長良川の鵜飼 — 日本一の格式を誇る —

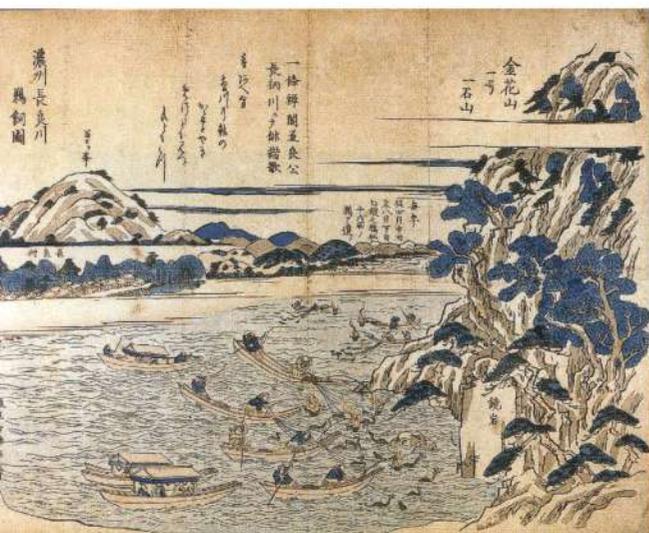
### 将軍家献上鮎鮓

海外にまで、その名を広く知られている長良川の鵜飼。現在、日本に二か所で鵜飼が残っているなか、その知名度、集客度（観覧船乗客数）は群を抜いている。その理由の一つは、長良川の鵜匠が高い格式を保ってきたからである。



長良川鮎鮓図巻（明治時代）  
江戸時代の御鮎所における鮎鮓作りの様子を描いた作品。

- (中段右) 鮎のエラを取る
- (上段) 覆面をした御鮎元が鮎に飯を詰めて桶に並べる。
- (中段左) 鮎を入れ終わった桶の上に笹を並べ荒縄を置く。
- (下段左) 桶に蓋をし、割り竹ではさんで押し締め、梱包する。
- (下段右) 焼干鮎作り



濃州長良川鵜飼図（江戸時代末）  
鏡岩の前の淵で漁をする鵜舟。

江戸時代、鵜匠は徳川幕府、尾張藩の保護を受け、給米料などが支給され、鵜匠頭は苗字帯刀を許されていたほか、川での優先的な漁業権が認められていた。その代わり、獲れた鮎は献上用の鮎鮓に漬けるため、定められた量を「役鮎」として、尾張藩長良川役所の手代立会いのもと、鮎鮓調製を担当

当する御鮎所の役人に引き渡していた。御鮎所は益屋町内（現在の林稲荷神社西側一帯）にあり、河崎家が代々御鮎屋（後に御鮎元に改称）として業務をおこなっていた。ここで作られた将軍家御膳御用の鮎鮓は、元和元年（一六一五）から年二四度、人足が担ぎ、問屋をリレーして江戸へ送った（回数

は年により増減がある）。その経路は、御鮎所を出て鞆屋町、米屋町、白木町、常盤町を通過し、加納、笠松、一宮を経て美濃路に至る岐阜街道を通った。そのため、この道は別名「御鮎街道」とも呼ばれている。さらに美濃路を通過して熱田で東海道に入り、岐阜から江戸まで五日間で到着するように手配していた。

### 明治時代の鵜飼

この献上鮎鮓の制度は、幕末に御鮎所とともに廃止され、鵜匠も地位や特権を失い、経済的にも困窮するようになった。そのため、明治二年（一八八八）長良地区で遊船を組織化して「長良遊船組合」を結成し、鵜匠と契約して観覧の便宜を受けるかわりに、乗船料の一部を鵜匠に支払う制度を確立した。同三年には岐阜地区の業者も合流して「長良川遊船株式会社」となり、現在の岐阜市鵜飼



「長良川遊船乗場」絵葉書（大正時代）  
看板を掲げた平屋の建物が、岐阜遊船  
株式会社の事務所。

観覧船事務所の位置に、事務所  
を設けた。

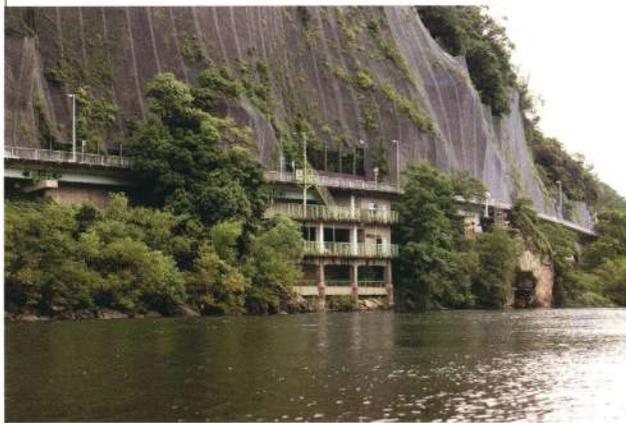
その後、昭和二年（一九二七）  
に岐阜市直営となり、現在に至っ  
ている。また、明治二三年に長  
良川筋三か所に「御獵場」を設  
置して、鵜匠は宮内省主猟局所  
属となった。現在は、宮内庁式  
部職鵜匠として、その任にあたっ  
ている。

### 鵜飼見物の名所

さて、鵜飼観覧で特に名高い  
場所は、江戸時代末より金華山  
麓鏡岩付近であった。現在の鵜  
飼納涼観覧所付近に鏡岩と呼ぶ  
平滑な大岩がそびえ、その下は  
淵となった好漁場であった。江  
戸時代より、鵜飼を描いた絵画  
作品はしばしば当地周辺で取材  
をしている。また、土産物とし  
て好まれた鵜飼の名所絵も、鏡  
岩周辺を描いたものが多かった。  
しかし、大正時代末、日野に至



大正時代末の納涼台



現在は閉鎖されている鵜飼納涼観覧所  
この付近に鏡岩があったと伝えられている。

る道路工事で鏡岩は破壊されたと  
伝えられている。現在は、鵜  
飼シーズン中に対岸が鵜飼観覧  
船の一時係留場所となっている。  
上流の「まわし場（鵜飼漁の  
準備をする河原）」から狩り下っ  
てきた鵜舟は、ここから観覧船  
を従え鵜飼を見せながら下って  
いくのである（天候や水位によ  
り中止や変更もある）。

今も淵周辺は樹木が生い茂っ  
て自動車のライトをさえぎり、  
右岸も県道から距離があるため、

漆黒の闇の中、篝火に照らし  
出された鵜と鵜匠の幻想的な姿  
を楽しむ、絶好のロケーション  
となっている。

### 総がらみ

6艘の鵜舟が揃って漁をしながら進む。  
観覧船は「パーク前」（オヤマシタ）と  
呼ぶ、ホテルパーク前の河原につけて  
おこなう。

\*掲載資料はいずれも  
岐阜市歴史博物館蔵



## 濃尾震災と岐阜 — 俄然天地鳴動する —

### 激震に襲われ

明治二十三年（一八九〇）春は、連年の不景気や凶作などで、米価が高騰して飢えた人があふれ、各地で救援金募集や困窮者への米・麦の支給が、おこなわれるありさまだった。さいわいその秋は豊作で、翌二四年も平年作の見通しがあり、一息つこうとした矢先の一〇月二八日午前六時三七分、マグニチュード八・〇を超える大地震が、岐阜県を中心とした地域を襲った。

その激しさは、「倒れた身体が横に白を引きまわすように転がされた」などと記録されている。そして、直後に起こった火災が、さらに被害を大きくした。この大災害は「濃尾震災」と呼ばれている。

地震発生四日後の一〇月一日に発行された「岐阜日日新聞号外第一」掲載の「震災当時岐阜市の実

況」には、地震発生時の状況を次のように書いている。「俄然天地

鳴動すると同時に、大地は動揺して、或いは高く、或いは低く、見る見る欠裂を生じて、おびたしく噴水し、人家は、右に揺り左に舞い、たちまち転覆して、人畜を圧死し、震動およそ一分三十秒間にして止む」。震動時間は、被害にあった人によって、十秒とも十分とも答えており、極限状況での人間の感覚の頼りなさを、思わせる。ただし、測候所の地震計を破壊するほどの激震の後も、余震が繰り返し、二八日午後だけでも、百回以上の震動が記録された。

強烈な震動が止んで、呆然としている人びとの耳に、火災を知らせる半鐘の音が響きわたった。最初に出火したのは、岐阜市秋津町の蚕糸組合事務所と伝えるが、すぐに木造町・下新町・七曲町（現在の本町六丁目）・鍛冶屋町（同

四丁目）にも火の手が上がった。

家族や家を失い、うろたえる市民は、消火につとめる者も少なく、秋津町・七曲町・木造町はようやく消し止めたものの、他の二町の火は、東北に向かって広がった。さらに、午後二時ころから西北風が強く吹き、あおりたてられた火勢は、東南方向へと町を焼き尽くしていった。

このとき、かなりの人数が、家財とともに伊奈波神社に避難していた。しかし、西北風をまともに受けて、山上も山下も一面の火の海となり、集まった人たちは、荷物を捨てて、家族ちりぢりになって逃げのびた。午後三時ごろには宏壮な社殿は、ただ礎石を残し、うっそうと茂っていた老樹も、枯れた幹を見せるだけとなってしまった。

市内に広がった火災は、師範学校生徒や囚徒たちの活躍で次第に

消し止められたが、倒壊家屋で道をふさがれ、井戸水は枯渇し、消防用具も倒れた家の下になっていて使えず、消火活動は困難をきわめた。金華地区の南端を、東西に横断する堀が、最後の防火線となり、死力を尽くして消火につとめたものの、一部は堀を越えて南に燃え広がり、地震から丸一日以上たった二九日の午後二時になってようやく鎮火した。この堀は震災当時は「糞堀」という、ありがたくない名で呼ばれていたが、かつては岐阜城下町の南の備えであったもので、現在は暗渠になっている。

濃尾震災で、岐阜市（この時期の岐阜市は現在よりもずっと小さな区域）では、死傷者約一五〇〇名、総戸数の三分の二が全半壊し、三分の一が全焼した。岐阜県・愛知県では、二万五千人以上が死傷し、道路や橋、堤防を含めて被害



伊奈波神社門前の状況

ははかりしれなかった。  
 若宮町二丁目には、このとき亡くなった人びとの慰霊のために、衆議院議員であった天野若円が建立した震災記念堂がある。明治二六年の震災三回忌にさいして開堂式を挙行し、若円の没後も、毎月二八日には慰霊が営まれ、現在にいたるまで続けられてきた。記念堂が所蔵する分厚い「震災死亡人台帳」には、金華地区の人約六〇名が含まれ、その中には川合玉堂の父、川合勘七の名もある。

### 濃尾震災による金華地区の被害

『震災被害取調材料』より。数字は原文のまま、土蔵なども含むと思われる

	全壊家屋	半壊家屋	全焼家屋	半焼家屋	現在の町名など		全壊家屋	半壊家屋	全焼家屋	半焼家屋	現在の町名など
米屋町			60		新桜町の一部を含む	珠城町			52		矢島町1丁目上組
桜町			80		伊奈波通1丁目	間之町			16		
万力町			32			加茂町		11	46		矢島町1丁目中組
白木町			155		栄扇町の一部を含む	相生町			36		矢島町1丁目下組
常盤町			41			榑町			14		伊奈波通3丁目
扇町			21		栄扇町・白木町の一部	矢島町		4	90		矢島町2丁目
加和屋町		13	84		本町1丁目。梶川町の一部を含む	栄町			18		栄扇町・矢島町2丁目・松屋町の一部
愛宕町			14		伊奈波通2丁目	木造町	23	16	16		
末広町			110		新桜町の一部を含む	上ヶ門町	1	3	6		本町7丁目
靱屋町			56		新桜町の一部を含む	七曲町	24	9	4		本町6丁目
大和町			8			車之町		65	5		本町5丁目
中竹屋町			67			鍛冶屋町	3		49		本町4丁目
上竹屋町			30			下新町			79		
釜石町			30		本町3丁目	下大桑町			58		
布屋町			12			中大桑町			52		
本町			33		本町2丁目	上大久和町			36		
松屋町			102		栄扇町の一部を含む	西材木町			31		
魚屋町			19			東材木町			37		
上新町			33			北今町			32		今町1丁目
久屋町			22			上今町			34		今町2丁目
中新町			22			中今町			25		今町3丁目
蜂屋町			17			下今町			23	1	今町4丁目
大工町			45			富茂登	1	290	57	4	※
甚衛町			12			稲束	196	195	10	1	啓運町が含まれる

※湊・上材木・御手洗・玉井・元浜・川畔・大宮・木挽・山口・益屋・上茶屋・下茶屋・松下・松山・夕陽ヶ丘・松ヶ枝・大仏・梶川の各町

## 信長館の発掘調査

### 信長天下布武の道

永禄六年（一五六三）小牧山城に拠点を移した織田信長は、父信秀以来苦汁を飲んできた美濃の本格的な攻略に着手した。

虎視眈々こしたんたんと美濃攻略を狙っていた織田信長のもとに、永禄十年（一五六七）八月、斎藤方の重臣で西美濃三人衆といわれた、稲葉一鉄・氏家卜全・安藤守就が味方となることを伝えてきた。

信長は、この好機を逃さず積極果敢に美濃尾張の国境を一気に突

### ——国史跡を目指して——

破、城下に殺到し、稲葉山城いなばやまを包囲した。すでに東美濃を制圧され、西美濃を攻略された斎藤氏の稲葉山城には、援軍の来る見込みはまったくなかった。

八月あるいは九月ともいうが、城主斎藤龍興は、長良川を船で逃れ、ここに信長は、十年に及ぶ攻防戦の末、斎藤道三、義龍、龍興と三代にわたり美濃を支配した斎藤氏を追放することができた。

信長は稲葉山城を占領した後、城下の井口を岐阜と改め、楽ちやく市楽座いちらくざを行い、これ以後「天下布武」の印判を用いた。

このことは、尾張、美濃を支配下において信長が「全国制覇」に本格的に乗り出すという強い意思表示に他ならなかった。

### 信長館とフロイス

永禄一二年（一五六九）六月、岐阜を訪問した一人の外国人がいた。その人の名をルイス・フロイスというが、キリスト教の布教を行ってきたポルトガルのイエズス会宣教師である。

フロイスは、すでに四月八日に京都二条御所建築現場で信長に面会し、キリスト教布教の承認を得ていた。しかし、信長が岐阜に帰国してからキリシタン排斥が激しくなり、再度許可を求めるために岐阜にきたのである。当時の岐阜町は多くの人々が往来し「バビロンの賑わいに匹敵する」という言葉でその繁栄を表現されている。フロイスは数日後、信長に面会したが、信長は新築間もない岐阜城天主や山麓の御殿を自身で案内した。

フロイスは日本滞在中の様々な情報をイエズス会へ報告した。後にポルトガルへ帰国したフロイスが、報告書や自身の記録を参考に日本滞在中の見聞をまとめたのがその著書「日本史」である。

フロイスが絢爛豪華けんらんごうかと表現した信長館の様子はこれによりある程度知ることができる。



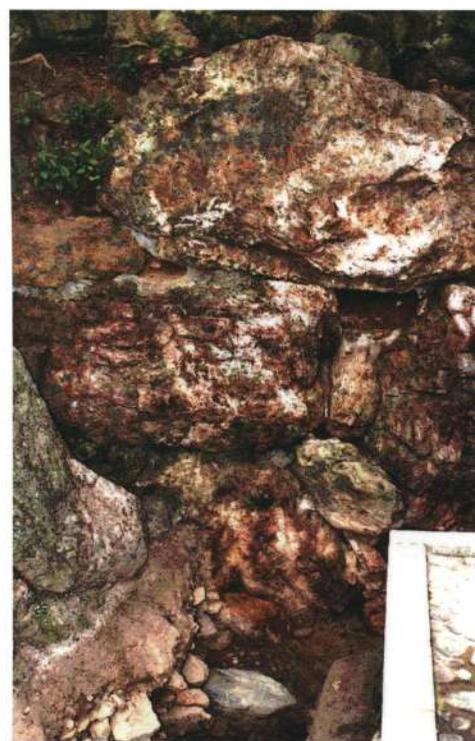
再現された岐阜町（岐阜市歴史博物館）

## 信長館を掘る

信長館跡の発掘調査は昭和六〇年から始まり、数回の発掘調査の成果を踏まえて岐阜公園は信長縁の歴史公園として整備された。信長館への出入口と思われる部分は、岐阜市民が信長時代の息吹を感じとる事のできる巨石通路として復元されている。

平成一九年（二〇〇七）、岐阜市は、岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所との協同により信長館跡の解明を目的として発掘調査を始めた。

一九年度の予備調査の結果により岐阜公園内には、永年の公園整備にもかかわらず信長時代の遺跡が比較的良く保存されていることがわかってきたので、平成二〇年度の発掘調査は調査



平成20年度の発掘調査で確認された3段積みみの石垣

面積を大幅に拡大して実施している。

フロイスは、信長館を細部にわたって記述している。

その著書「日本史」から紹介すると、信長館は「おどろくべき大きさの裁断されない石の壁が取り囲んでいる」と記述している。これは具体的には整備された「巨石通路」を示すものと思われるが、明治大帝像背後の巨石石垣の下部は信長時代に築造された可能性があり、これもフロイスのいう「石の壁」であったと想像できる。またフロイスは、「極めて新鮮

な四つ五つの庭園があり、いくつかには池があり入念に磨かれた鏡のような小石や目にまばゆい白砂があり、美しい魚がいる」と紹介しているが、今年度の発掘調査で、日本庭園の池の周囲に観られる「州浜」らしき部分が発見されている。

さらに「三階は山と同じ高さで、一種の茶室のついた廊下がある」と記録しているが、今回の発掘では、槻谷の最奥部で信長時代の石垣や焼土等が発見され、茶室のような特別な建物があったと想定される。

信長館の主殿がどこに存在したのか今は不明であるが、織田信長が天下布武の拠点にした岐阜城は、国史跡を視野に入れた発掘調査を今後も継続し、やがては全体像が明らかになるであろう。



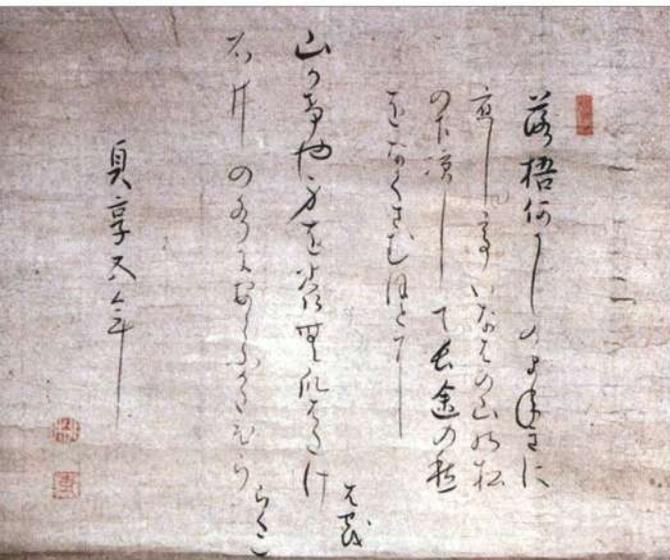
## 芭蕉と岐阜町 —— 金華の人たちの熱意が ——

### 芭蕉と安川落梧

「おもしろうてやがて悲しき鶉舟哉」。

芭蕉が、長良川の鶉飼を見てこの句をよんだのは、貞享五年（一六八八）夏のことであった。

芭蕉を岐阜町に招いたのは、本町（現在の本町二丁目）の豊かな呉服商、安川落梧である。



落梧は、当時の岐阜町における俳諧グループの中心人物であった。

この前年の一月二六日、落梧は、名古屋に来ていた芭蕉を訪ねて、初対面を果たした。

そこで作られた連句は、落梧がまず「困の寒さかさねよ稲葉山」と、芭蕉を岐阜へ誘う句を詠み、芭蕉が、「よき家続く雪の見どころ」と、まだ見ぬ岐阜の風景に思

芭蕉筆 懐紙(杉山家蔵)

「落梧何がしのまねきに  
応じて、いなばの山の松  
の下涼して、長途の愁  
をなぐさむほどに

ばせを  
山かげや身を養む瓜ばたけ  
石井の水にあらふかたびら

貞享五年

いを馳せて詠み継いだ。

安川家には、落梧と同行した丹羽蕉笠（材木商の丹羽氏の分家）の手になるこの連句の懐紙が、伝えられている。その末尾には「翁来り給う日に時雨して」との前書に続けて「今朝はなお空ばかり見る時雨哉」という落梧の句が書きたされており、芭蕉の来るのを待ちかねている落梧の姿が思い浮かぶ。

芭蕉と会ったすぐあとに、落梧と蕉笠は、岐阜から手紙を出してあらためて芭蕉を岐阜へ招待し、「来年初夏には必ずお訪ねします」との返事を得た。

### 芭蕉の岐阜町訪問

約束には少し遅れたものの、芭蕉が、妙照寺の僧である己百とともて京都を出立し、落梧の住まい近くにある同寺に旅装をといいたの

が、翌、貞享五年夏であった。

その訪問の日程については、はっきりしない点が多い。六月八日（現在の暦では七月五日）という説と、五月中旬（七日ともいう）に岐阜町に来て、一度大津へ行き六月八日に再訪した、という説と、主に二つの説がある。七月初めには名古屋へ出発しているから、芭蕉の岐阜町滞在は、長くて二か月弱ということになる。

因みに、岐阜町は、二年前の大火で約一五〇〇軒が焼失するといふ大被害を受けており、芭蕉は、正に新築なつたばかりの「よき家続く」町並みを目にしたことだろう。また芭蕉は、信州更科で仲秋の名月を見ようと、同年八月に名古屋から旅立つが、このとき、岐阜町にもう一度立ち寄ったともいわれる。

己百は、芭蕉を岐阜に案内するとき「しるべして見せばや美濃の



田植歌「道案内をして、美濃の田植え歌をお聞かせしたいものです」とよみ、芭蕉は、「笠あらためん不破の五月雨」(歌枕として有名な不破の関を越えて、五月雨の季節の美濃国に行くのですから、蓑だけでなく笠も新しくしてまいりましょう)と続けた。これが、芭蕉の岐阜町訪問の第一歩の作品である。こののち芭蕉は、「宿りせんあかさの杖になる日まで」(妙照寺にて)、「城跡や古井の清水まず問わん」(妙

照寺隣の松橋喜三郎家にて)、「夏来てもただ一つ葉の一は哉」や、中河原の豪商である賀島鷗歩の水楼(十八楼)を訪れて、「このあたり目に見ゆるもの(は)皆涼し」などの名吟を金華地区で残し、十八楼からの眺めをするに「十八楼の記」を著した。

元禄二年(一六八九)付けの芭蕉の序文がある『あら野』には、「おもしろうて…」、「夏来ても…」の二句が掲載されている。また、岐阜町にいる芭蕉のもとには、名古屋や関からも俳人が訪ねてきた。同書には、芭蕉と同じとき、鶺鴒を見た名古屋俳人の「鶺鴒のつらに篝こぼれて憐れ也」「声あらば鮎も鳴くらん鶺鴒舟」も納められている。

『あら野』には、このほかに岐阜、つまり現在の金華地区の俳人約二〇名の作品もある。すでに名前をあげた以外に、杏雨(落梧の弟)、一髪(「繡屋」であったという。芭蕉の岐阜町訪問時には不在)、素秋、李桃、藤蘿、

梅餌(御鮎所の河崎家の一族と思われる)らで、句数は落梧の発句一一句・野水(名古屋)との連句一作品、一髪の発句一八句が筆頭である。

また、安川家に伝わる落梧のグループの作品には、『あら野』に載る人の過半数を含む三〇名の名前が数えられる。そのうち一水は河崎氏であるが、それ以外は、残念なことに俗名などがわからない。

元禄二年には、己百は芭蕉の「奥の細道」の足跡をたどる旅に出た。現在でも、同じ道筋を訪ねる人は跡をたたないが、己百は、最も早く行動を起こした一人である。約二年に及ぶ長い旅の中で、最上川岸辺の柳・宮城野の萩・松島の松を大切に手折って持ち帰り、落梧への土産としている。

落梧は、元禄四年五月に四〇歳の若さで他界した。墓は伊奈波の法円寺にある。芭蕉は元禄七年の盆に「風雅に心深き」者

として、落梧の名をあげてしんでいる。

落梧の死により、彼を中心とした俳諧グループは活動を停止したらしい。しかし、このときに育った俳諧への思いは後に、芭蕉の弟子である各務支考の時代へと引き継がれていくことになる。

芭蕉は、突然岐阜に來たのではなく、落梧ら、金華地区の人たちに招かれたこと、その熱意が当地区で育っていたことは、もっと注目されるべきであろう。



加藤栄三・東一記念美術館

若き日の信長像



明治天皇像

岐阜公園内には見所がたくさんある。豊かな自然や文化施設に恵まれ、先人の偉業を讃える石像物を一つ一つたどるのも楽しい。



母は尊し像



狂俳発祥之地碑



小木曾旭晃句碑



ひとつば



日中友好庭園



滝

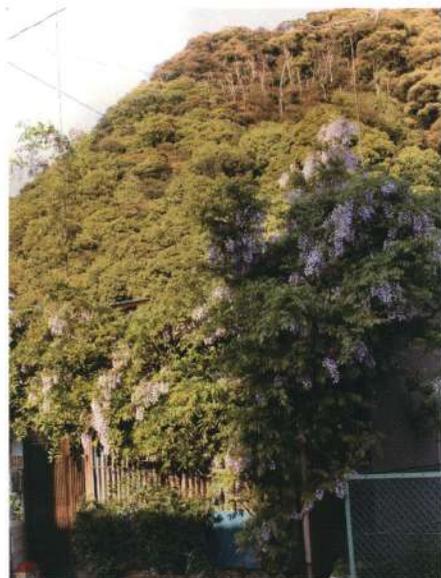


平成の滝



# 春夏秋冬 付歴史年表

金華歳時記



一春 — 伊奈波神社の桜と岐阜まつり —



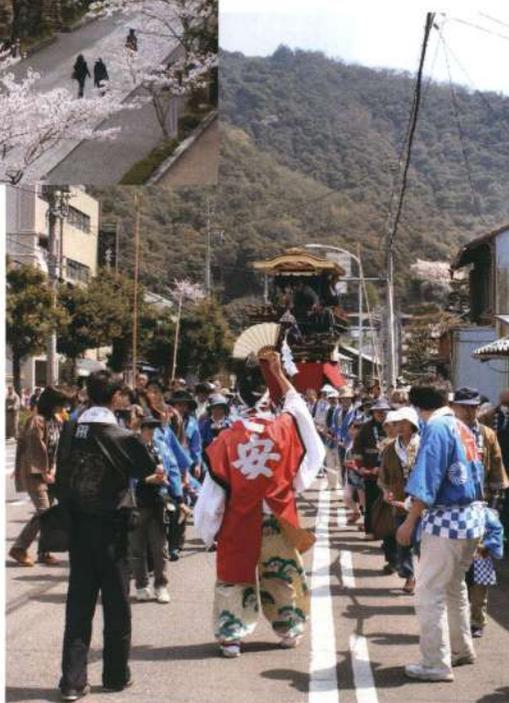
御神幸の出発



桜が匂う伊奈波神社参道



常在寺前を進む安宅車





宵宮の山車揃え



みこしの準備で賑わう木造町



神前に向かうこどもみこし



こどもみこしコンクール



3 3 3 月

下旬 中旬 上旬 日

催事  
 旧暦1月晦日  
 ・伊奈波神社花の撓大祭（10:00本殿）  
 旧暦初午祭・美峰稻荷・林稻荷・三光稻荷ほか  
 彼岸中日



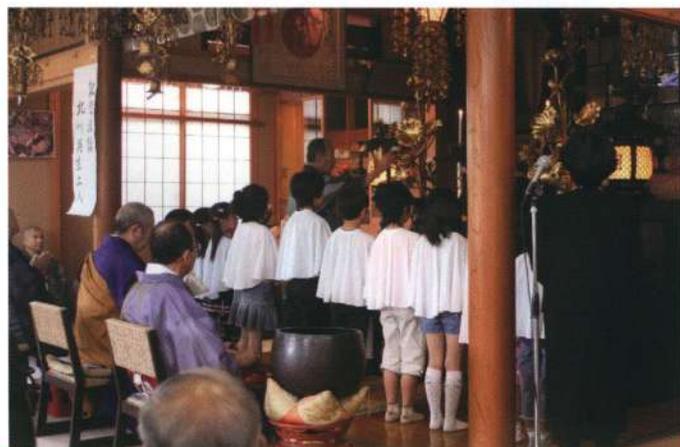
シイの花でむせるような金華山



ひな人形の展示（人形の堀田）



金華仏教会花まつり



甘茶をめしあがれ







岐阜新聞全国花火大会



長良川中日花火大会



二夏 — 長良川の鵜飼と花火大会 —



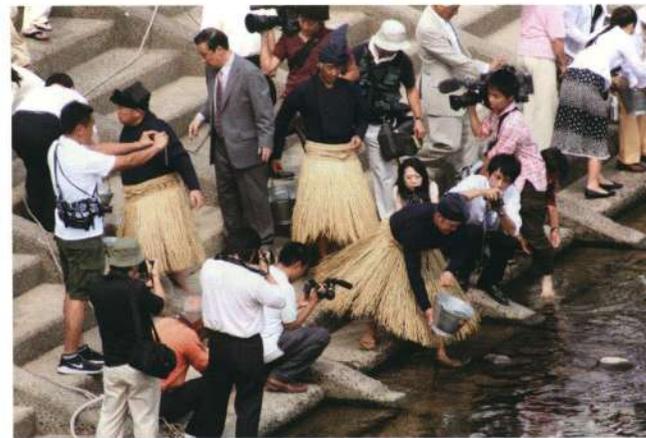
鵜飼のクライマックス「総がらみ」



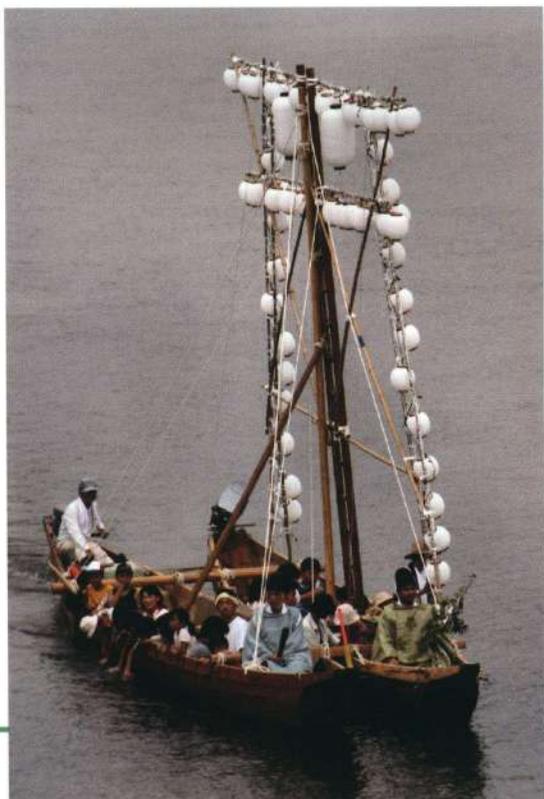
出発を待つ観覧船



漁を終えた鵜匠と鵜



鮎の放流



川まつり

川面のお祓い

提灯船



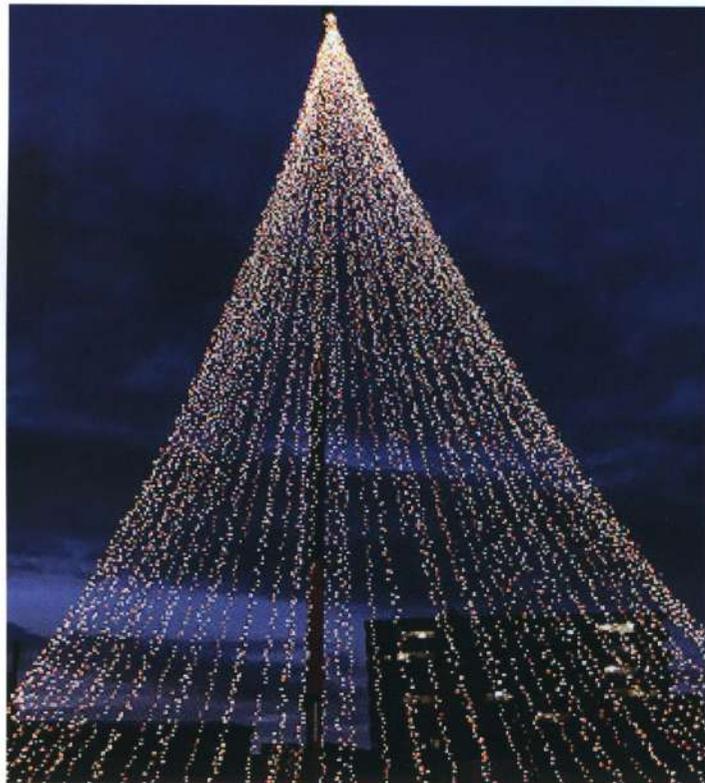
7 7 7 7 7 6 6 6 月  
 14 15 中旬 9 初〜8月初 23 下旬 9 日

催事  
 伊奈波和歌三神社献詠披講祭(13:00)  
 ホタルの夕べ・岐阜公園・伊奈波神社  
 伊奈波愛宕神社祭(9:00)  
 施餓鬼会(諸寺院)  
 岐阜空襲犠牲者供養「平和の鐘を鳴らす運動」  
 (9:00金華仏教会)  
 護国神社大祓(16:00)河童祭(翌日10:00)  
 正法寺大仏施餓鬼会(19:00)  
 大仏フェスティバル



「平和の鐘を鳴らそう」(時鐘楼)

岐阜公園イルミネーション



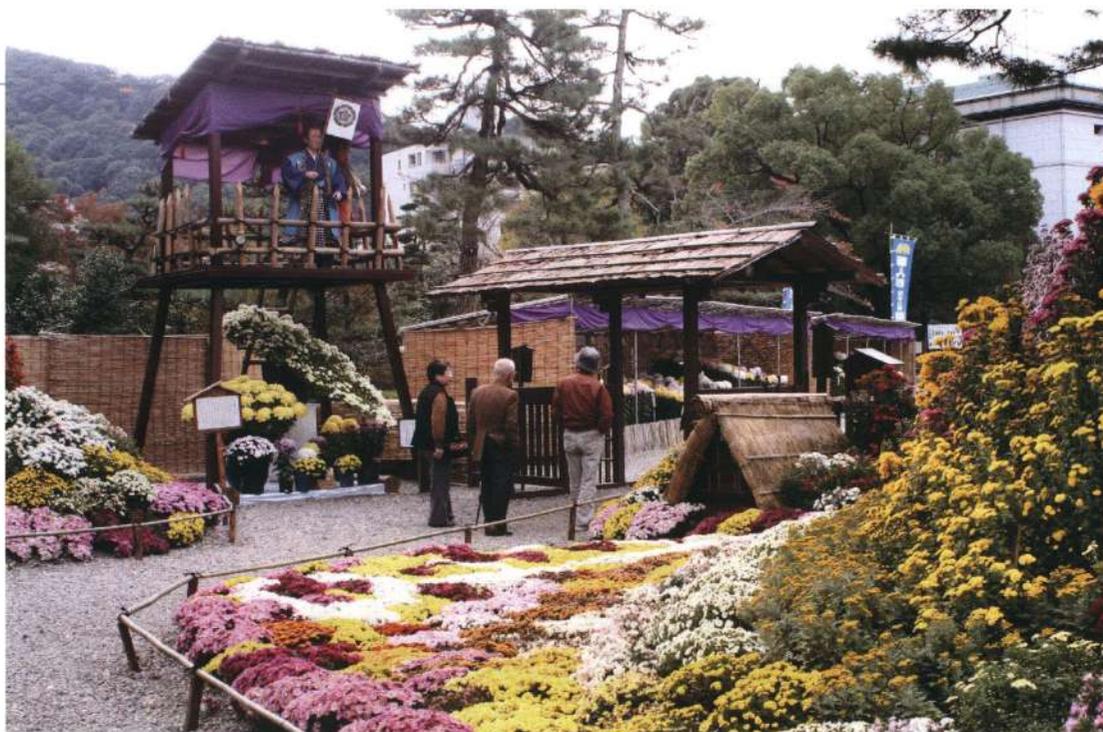
開幕の盆踊りと点灯式



市民手作りのイルミネーションの数々



三  
秋  
— 岐阜公園の紅葉と菊花展 —



菊花・菊人形展





三重塔

岐阜公園の紅葉



大池



平成の滝

10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 9 9 9 9 月  
 下旬 下旬 下旬 下旬 28 第4土日曜 15 15 13 毎日曜 第1土日曜 23 下旬 中旬 日

催事  
 木造町金比羅神社祭・秋葉神社祭(1月も開催)  
 長良川瀬張り網漁始まる、十一月まで  
 彼岸中日  
 伊奈波忠魂碑慰霊祭(15:00)  
 ぎふ信長まつり  
 まちなか歩きスタンプラリー(岐阜公園周辺)  
 お会式(日蓮宗寺院)  
 鵜飼終い  
 岐阜護国神社秋季例大祭  
 金華地区文化祭(金華公民館)  
 安乘院不動明王例大祭(14:00)  
 川と海のクリーン大作戦  
 岐阜公園菊人形・菊花展  
 金華山題目塚法要  
 お十夜法要(含政寺など浄土宗寺院)



滝庭園のヒガンバナ



金華地区文化祭





瀬張り網漁



安乘院不動明王例祭



岐阜公園植木市



岐阜公園越冬こも巻き

11	11	11	11	11	11	11
下旬	下旬(日曜)	中旬		8	7	第1土日曜

報恩講(真宗寺院)	金華地区防災訓練(8:00 岐阜小校庭)	岐阜公園越冬こも巻き	七五三祝・伊奈波神社・護国神社	伊奈波金山神社祭(11:00)	峯本宮祭(9:00)	岐阜公園植木市
-----------	----------------------	------------	-----------------	-----------------	------------	---------

四冬 — 金華山とまちの雪景色 —



信長のまち



雪の岐阜城（吉田尚弘氏撮影）



金華山雪景色

町の雪景色

眺望閣上から見た金華地区南部



上材木町



大和町



木挽町



岐阜大仏殿





実業団女子駅伝

わいわいハウスの餅つき



空手道連盟の奉納寒稽古



2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12	12	12	12	月	
8	上旬	上旬	20日前後	17	16	15	13	中旬	12・13	第2日曜	第2土曜	上旬土曜	5日以後の日曜	1	1	下旬	第3日曜	15	15	1

催事

- 新嘗祭・伊奈波神社(11:00)
- 伊奈波神社御神樂祭(14:00)
- 善光寺秋葉三尺坊大祭(火災除けの護符配布)
- 全日本実業団対抗女子駅伝競走大会  
(12:00 長良川競技場)
- 冬至…こよみのよぶね(長良川)
- 歳旦祭・伊奈波神社・護国神社ほか
- 岐阜市空手道連盟寒稽古(11:00 護国神社・長良川)
- 岐阜市消防出初め式(9:00 明德小学校)
- 栽松寺大般若会(11:00)
- 岐阜珠算連盟はじき初め大会(10:00 伊奈波天満宮)
- 金華地区新成人を祝い励ます会(参集殿)
- 可睡斎秋葉総本殿出張火防祭(11:00、15:00 勝林寺)
- 報恩講(浄土真宗寺院)
- 勝林寺大般若会(13:00)
- 伊奈波神社筒粥神事(9:00 本殿)
- 金華山福えんま大王大祭(11:00)
- 伊奈波神社左義長神事(8:30 遙拝所前)
- 初庚申…川原庚申堂・般若寺・地藏寺
- 節分会…伊奈波神社・善光寺ほか
- 節分…伊奈波神社手筒花火奉納
- 針祭(伊奈波神社)



伊奈波神社の節分祭



金華山防災訓練



奉納手筒花火



善光寺の節分会

# 金 華 史 年 表

和暦	西暦	月	日	事項
大永三	一五二五			長井氏が土岐・斎藤氏を追放。新左衛門尉(道三の父)が稲葉山城主となるか。
天文八	一五三三			長良川大氾濫により井ノ口に大被害。
天文三	一五三九			斎藤道三が稲葉山城を修築する。
弘治二	一五五六	四	九	長良川の戦い。斎藤義龍が父道三を討つ。
永祿一〇	一五六七	四	五	信長が稲葉山城を占領。井ノ口を岐阜と改名。
永祿一二	一五六九	五	九	ポルトガル人宣教師フロイスが岐阜に滞在する。
天正一	一五八三	八	四	織田信孝が秀吉に敗北、池田元助が岐阜城主となる。
慶長一	一六〇〇		三	織田秀信の岐阜城陥落する。
元和一	一六一五			長良川鮎鮪の調進制度整う。
元和五	一六一九			岐阜町が尾張藩領となる。
寛永一三	一六三六			長良川役所が早田村馬場から中河原へ移転。
明暦一	一六五五			岐阜古屋敷の再整備始まる。
延宝四	一六七六	三	四	東伝寺の宅平が伊奈波で操り・見世物興行を始める。
貞享二	一六八五	六	三	尾張藩主徳川光友が伊奈波神社社殿を造営する。
貞享三	一六八六	六	三	岐阜大火。
貞享五	一六八八	六	六	芭蕉が妙照寺に滞在する。
元禄八	一六九五	六	六	尾張藩が岐阜奉行を新設する。
寛保三	一七四三	閏四	六	寛保の大火(火元七軒町)。
明和五	一七六八	七	二	明和の大火(火元木挽町)。
寛政六	一七九四	四	一	正法寺の大仏建立始まる。
天保三	一八三二	四	一	正法寺の大仏完成。
慶応四	一八六八	一	一	水野弥三郎が赤報隊と加納城下へ入る。
慶応四	一八六八	一	一	郷学教倫館が設立される。
明治四	一八七一	四	一	岐阜町郵便取扱所を鞆屋町に設置。
明治四	一八七一	一	〇	美濃国一円が岐阜県に統一される。
明治六	一八七三	二	三	旧尾張藩役所を校舎に大観舎を設立。御手洗に有道義校設立。
明治七	一八七四	六	二	岐阜県庁が司町新庁舎に移転。
明治七	一八七四	一	一	長良川に船橋ができる。
明治八	一八七五	〇	一	第十六国立銀行が松屋町に開業。
明治一〇	一八七七	〇	三	富茂登村に岐阜中教院が本格開業する。
明治一〇	一八七八	〇	三	明治天皇岐阜に行幸。



美濃国長良川烏鬼行之図

# 金 華 史 年 表

昭和九	昭和八	昭和八	大正二〇	大正一八	大正一七	大正一六	大正一六	大正一四	大正一四	大正一三	大正一二	大正一一	大正一一	明治四四	明治四四	明治四三	明治四二	明治四一	明治四一	明治三九	明治三一	明治三〇	明治二九	明治二七	明治二四	明治二二	明治二二	明治二一	明治二一	明治二〇	明治一七	明治一五	明治一二
一九三四	一九三三	一九三三	一九二二	一九一九	一九一八	一九一七	一九一七	一九一五	一九一五	一九一四	一九一三	一九一二	一九一一	一九一一	一九一〇	一九〇九	一九〇八	一九〇八	一九〇六	一九〇六	一八九八	一八九七	一八九六	一八九四	一八九一	一八八九	一八八八	一八八八	一八八七	一八八七	一八八四	一八八二	一八七九
五	八	六	〇	四	一	一	一	五	〇	八	〇	三	五	一	三	五	三	一	〇	七	一	一	〇	七	一	八	一	一	四	二	一		
			二五	二二	二二			一六	一五					二八	二七	一八	一五			七		三		二八	一	一			六				

厚見・各務・方県三郡の郡役所を伊奈波に設置。  
 板垣退助が中教院で刺客に襲われる。  
 長良橋を恒久の木橋に架け替える。  
 東海道線の大垣・加納間が開通。  
 金津遊郭開業。  
 丸山（岐阜）公園開園。  
 岐阜市制施行。  
 濃尾大震災発生。  
 市役所が白木町新庁舎へ移転。  
 権現山「時の鐘」始まる。  
 岐阜市区町村の廃止分合実施。  
 長良川遊船会社設立。  
 名和昆虫研究所が大宮町へ移転する。  
 歩兵第六十八連隊が北長森村へ移転。  
 岐阜公園に武徳殿が落成。  
 市内名改正。  
 金華山頂に模擬城完成。  
 金華小学校が大工町新校舎へ移転。  
 美濃電軌市内本線が本町まで開通、道路も幅八間に改修された。  
 美濃電軌市内本線が長良橋まで開通、道路も幅八間に改修された。  
 伊奈波通りが幅八間に改修された。  
 市内電車複線化。  
 岐阜公園を再開園する。  
 長良橋が鉄橋で完成。  
 美濃電軌市内本線を長良軽便鉄道に接続する。  
 伊奈波公園整備。  
 岐阜公園に三重の塔完成。  
 板垣退助銅像除幕式を挙行。  
 市役所が美江寺町新庁舎へ移転。  
 木造町新道の開設に着工。一二年完成。  
 松竹座・松竹館が市役所跡に開館。  
 長良川改修工事始まる。  
 上水道第二期工事竣工。  
 忠節用水路上流部工事竣工。



岐阜市街大地震之図

# 金 華 史 年 表

昭和四一	昭和四〇	昭和三九	昭和三八	昭和三八	昭和三六	昭和三五	昭和三五	昭和三四	昭和三二	昭和三一	昭和三一	昭和三〇	昭和三〇	昭和二九	昭和二八	昭和二六	昭和二五	昭和二五	昭和二四	昭和二四	昭和二四	昭和二三	昭和二三	昭和二二	昭和二〇	昭和二〇	昭和一八	昭和一五	昭和一四	昭和一一
一九六六	一九六五	一九六四	一九六四	一九六三	一九六一	一九六〇	一九六〇	一九五九	一九五七	一九五六	一九五六	一九五五	一九五五	一九五四	一九五三	一九五一	一九五〇	一九五〇	一九四九	一九四九	一九四九	一九四八	一九四七	一九四六	一九四五	一九四五	一九四三	一九四〇	一九三九	一九三六
二九	〇	二	六	三	九	八	八	九	一	〇	七	七	四	二	五	四	九	五	九	二	七	一	五	八	八	七	四	二	一	三
一	九	二	六	二	二	一	一	二	五	二	四	一	〇	一	一	三	一	一	一	一	一	〇	一	九	九	七	一	九	三	二

躍進日本大博覧会を岐阜公園で開催。  
 長良川分派口締切完成。  
 岐阜護国神社社殿竣工。  
 金華山頂の模擬城が焼失。  
 家屋疎開を開始。  
 岐阜空襲。  
 松竹館営業再開。  
 岐阜日々全国花火大会が復活。  
 岐阜市立第一中学校が開校。金華小に併置。  
 金華保育所認可。  
 県立図書館が岐阜公園に移設された。  
 岐阜納涼博覧会開催。  
 金華中学校を伊奈波中学校と改称する。  
 金華弘報委員会（広報連合会の前身）発足。  
 岐阜公園に水族館を再建。  
 岐阜公園に水族館が開館。  
 第一回金華校下市民大運動会開催。  
 大衆鵜飼観覧所開所。  
 新長良橋開通（歩行者・自転車のみ通行可）。  
 金華山ロープウェー開通。  
 児童科学館開館。  
 岐阜城再建落成。  
 新長良橋取付道路予定地を強制収用する。  
 県立図書館新館が岐阜公園に完成。  
 伊勢湾台風による大被害発生。  
 古城の滝完成。のち凌雲の滝・松韻の滝もできる。  
 一号・二号台風による大被害発生。  
 第二室戸台風による大被害発生。  
 金華山ドライブウェイ開通。  
 日中友好記念碑の除幕式。  
 岐阜公園に野外音楽堂が完成。  
 金華橋開通。  
 岐阜国体夏季大会を開催。一〇月二四日秋季大会を開催。  
 岐阜市新庁舎竣工。一一日岐阜県新庁舎完成。



金華山ロープウェー



躍進日本大博覧会正門



ふるさと金華の寺院

金華地区には三十三箇所の寺院があります。

・ どうしてこんなに多くの寺院が集中してあるのだろうか。

・ 三十三ヶ寺すべての創建・移転時期及び由来・寺宝等が知りたい。

・ おまわりする心によりどこを学びたいなどいくつかの思いがありました。

そこで、NPO法人わいわいハウス金華は、金華地区の歴史・文化を再発見し、後世に残したいという強い願いから、金華地区にある三十三ヶ寺すべてに同じ形式で調査をお願いしました。

この調査に対して、金華仏教会のご賛同をいただき、温かいご支援と各寺院のご理解とご協力を賜り、資料集を作成することができました。

金華仏教会並びに各寺院に厚く御礼申し上げます。

平成二十二年三月

NPO法人わいわいハウス金華

理事長 吉田 好成

掲載順・金華仏教会会員名簿による

金華 33ヶ寺への調査依頼文書

平成 19 年 11 月 吉日

各寺院様

NPO法人わいわいハウス金華  
理事長 吉田 好成

調査依頼について（お願い）

日頃から当施設にご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、今年度、岐阜市とNPOとの協働ガイドラインに基づき「ふるさと岐阜・魅力発見大作戦」の「岐阜町・金華の魅力」事業の一環として、岐阜市歴史博物館と金華歴史文化懇話会のメンバーが御伺いし、貴寺院の歴史等をご指導いただき、金華の歴史資料にまとめたいと存じます。

なお、調査においては下記内容等についてお聞きしたいと存じますので、ご記入いただければ幸いです。

記

- 1 宗派・寺院名
- 2 住職名
- 3 現住所
- 4 本尊
- 5 開山
- 6 由来と秘話及び寺宝等
- 7 年間行事等

以上

金華仏教会 会長からの金華 33ヶ寺への調査協力依頼

平成 19 年 11 月 吉日

各寺院様

金華仏教会 会長  
勝林寺 等 峰一

調査依頼のご協力についてのお願い

晩秋の候 皆々様には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、標記について、別添資料に調査依頼がありましたので年末年始何かとお忙しいと存じますが、是非ご理解をいただきご協力をお願い申し上げます。

なお、調査については、皆様方の日程を事前に打ち合わせをさせていただきますのでよろしくお願ひ申し上げます。

## 一 松久山覚林寺

しょうきゅうざん かくりんじ

臨済宗妙心寺派

住職 鶉飼 孝一（一四代）

住所 岐阜市益屋町八番地

本尊 薬師如来像

開山 悟溪宗頓禅師

由来 元和元年（一六一五）織田家の家臣、木下兵衛佑の孫で、木下

長三郎延勝が出家して、雲心如閑禅師となり当寺を創建した。

開山は上加納瑞龍寺悟溪宗頓である。その後、享保年間（一七一六〜一

七三二）に当寺六世大椿祖吟禅師が再建した。

井ノ口山下に伝来した古仏を祀るお寺で、本尊「薬師如来」は言い伝え

により秘仏になっている。

薬師如来は、東方浄瑠璃世界の教主。一二の大願を発して、衆生の病苦

などの苦患を救い、身体的欠陥を除き、悟りにいたらせようと誓った仏で

ある。

年間行事

施餓鬼会（七月二〇日）



## 二 萬松山岐陽院

ばんしょうざん ぎやういん

臨済宗妙心寺派

住職 田中 恵孝（一五世）

住所 岐阜市木挽町一番地

本尊 阿弥陀如来像

開山 崇福寺八世物堂宗接和尚

由来 当院は、崇福寺八世時代、寛文年間（一六六一〜一六七二）岡

田豊前守支配の節、大堀を配領して、自力及び信徒の資助を持って埋め立

て小宇を建立し、物堂を移し、相儀して岐阜鬼門除の祈念所とした。鬼は

陰精なる者故に寺号を岐陽と名乗る。これをもって、崇福寺代々の隠居所

と御願上候処である。

寺宝

物堂和尚筆・出山佛

年間行事

玉秀・福寿稻荷大明神（旧曆初午）

山門施餓鬼会（七月八日）



### 三 教圓山地蔵寺

きょうえんざん じぞうじ

宗派 臨濟宗妙心寺派  
 住職 高橋 文洪(一一世)  
 住所 岐阜市木挽町一五番地  
 本尊 薬師如来像  
 開山 大法正眼国師盤珪大和尚  
 由来 当山は、享保一三年(一七二八)の開基で、月江理清禅尼の発願により、岐阜市下竹屋町土居原にあった庚申堂を移した。享保一十九年(一七三四)に美江寺町の天台宗観昌院塔頭瑞応院を譲り受け、官許を得て寺号を教圓山地蔵寺と改めた。

大法正眼国師盤珪大和尚を開山始祖に、真性浄明禅師逸山大和尚を、創建祖に勧請して法燈を建立し、臨濟宗妙心寺派所属の寺院となった。  
 この庚申堂がなければ地蔵寺の創建は不可能であった。庚申待や千鉢地藏供養で賑わう寺である。

年間行事  
 地藏盆、山門施餓鬼、千鉢地藏祭(八月二四日)  
 施餓鬼会(七月二〇日)  
 庚申待(庚申の日・年六〜七回)

本来は庚申の日の夜に庚申社や庚申堂に集まって、お神酒や精進料理をお供えして祭事をして、一晩中飲み食いをして過ごし、ご利益は長寿や病魔退散といったことであった。  
 当山では、庚申待として昼前に法要を厳修し、おときをふるまい、解散するという略式にて、修行している。



### 四 黙山自福寺

もくざん じふくじ

宗派 曹洞宗  
 住職 古川 泰道(四世)  
 住所 岐阜市松山町一三番地  
 本尊 釈迦牟尼仏  
 開山 黙山元轟大和尚(草創開山)  
 牧牛素童大和尚(開山)

由来と秘話及び寺宝等 宝暦三年(一七五三)黙山元轟大和尚により金龍山と称する寺院があったが、時代不詳に廃寺となった。今なおこの地は黙山と称されており境内には黙山和尚座禅石が現存している。

自福寺は大正一五年(一九二六)春、福島県より寺号を移転し、牧牛素童大和尚を開山として開かれ、現在の住職が第四世である。  
 当寺には明治一九年五月に難遁社(なんとんしゃ)により設立された日本最古と言われる火葬場があり、金龍山の庵で葬儀が営まれていたものを、今では自福寺が管理している。

当寺には市街地から移転された広大な墓地霊園があり、夏のお盆、春秋のお彼岸には沢山の参拝者で賑わっている。

年間行事  
 彼岸施食会法要(春秋彼岸)  
 開山忌法要(一月二〇日)



## 五 金鳳山正法寺

きんぼうざん しょうぼうじ

宗派 黄檗宗

住職 小林 孝道（一六代）

住所 岐阜市大仏町八番地

本尊 釈迦如来像（かご大仏）

開山 大休和尚

由来と秘話及び寺宝等 天和三年（一六八三）文殊菩薩の辻堂として建立され、享保二年（一七一七）京都宇治黄檗山万福寺の末寺黄檗宗金鳳山正法寺となる。

大仏は、寛政六年（一七九四）第一二代惟中和尚が発願し、第一二代肯宗和尚が遺志をついで、三八年間の歳月を費やして、天保三年（一八三三）四月完成した。大仏の開眼供養には、尾州侯の使者を賜り、織田信長公の居城以来の盛儀であったといわれている。惟中和尚は、大地震及び天明の大飢饉（一七八二〜八七）百姓一揆などが頻繁に起き、多くの人々がなくなった。被害者の慰霊のために、奈良東大寺大仏の聖徳を敬って、大仏の建立を決意された。

この大仏は、周囲一・八メートルの大イチョウを真柱として、骨格は木材をもつて組み、外部は竹材にて編み粘土を塗り、一切経、阿弥陀経、法華経、観音経などを張り、その上に漆を施し、金箔をおいた日本一の乾漆仏像である。大仏は、像高一三・七、顔の長さ三・六三、目の長さ〇・六六、耳の長さ二・一二、口の幅一・三一、鼻の高さ〇・三六メートルをそれぞれ計り、胎内仏として薬師如来像が安置されている。

年中行事

大仏フェスティバル（七月中旬）

大施餓鬼（七月一五日）



## 六 白鳳山浄安寺

はくほうざん じょうあんじ

宗派 真宗大谷派

住職 大館 慶緑（二七代）

住所 岐阜市中大桑町三一番地

本尊 阿弥陀如来

開基 大館彦右衛門

由来 大館彦右衛門は、暦応二年（一三三九）覚如法主に帰依し、名を明閑と改め、天文年間、伊勢長島のカロフト嶋に創建する。天文一四年（二五四五）厚見郡井ノ口長井洞に引越し、天正一二年（一五八四）早田村に移り、慶長六年（一六〇二）現在地に移る。

当時は井ノ口総道場といい、寺号はなかった。その後、羽柴美濃守から寄合所と号を許され、さらに、徳川家康から寺号を許された。教如上人が当寺へお成りになった。

寺宝 詩人・山田鼎石（ていせき・釜石町）の墓がある。

寺宝

羽柴美濃守許状（慶長五年書）

斎藤道三書簡（天文二三年書）

阿弥陀如来画像（室町時代）

九字名号（宗祖染筆）

聖徳太子画像（明治時代）

斎藤義龍判物（天文二三年）



## 七 鷲林山常在寺

じゅりんざん じょうざいじ

宗派 日蓮宗

住職 北川 英生(三七世)

住所 岐阜市梶川町九番地

本尊 釈迦牟尼仏・十界曼荼羅

開山 世尊院日範上人

由来と秘話及び寺宝等 室町期宝徳二年(一四五〇)三月、当時の美濃国守護代齋藤妙椿により創建。四世日蓮上人と齋藤道三は本山妙覚寺で兄弟弟子であった。道三が岐阜に来て後に岐阜城主になるが、子息日饒、日覚は五世、六世となり当寺を継ぐ。

道三は井の口の街づくりに力を入れ、一方で当寺を保護した。子息義龍との戦いで討死、義龍もまもなく病死、その子息龍興も信長に追われ福井へ逃れる。

現在は、道三・義龍・龍興三代を祀る齋藤家菩提寺である。

寺宝として、道三・義龍画像(国重文)等がある。

年間行事

新年祝祷会(一月)

春・秋の彼岸会(三月・九月)

盂蘭盆会(七月)

御会式(一〇月)

齋藤道三公・齋藤家年忌法要(四月)

花祭・釈尊降誕会(四月八日)



## 八 宝珠山真光寺

ほうじゅざん しんこうじ

宗派 真宗大谷派

住職 土岐 智子(二四世)

住所 岐阜市中大桑町二一番地

本尊 阿弥陀如来像

開基 土岐頼久(釈尊観)

由来 開基土岐頼久(釈尊観)は、証如法主に帰依し、専観と改名し、真光寺を尾張国三ツ柳村(現・羽島市正木三ツ柳)に天文十一年(一五四二)創建した。尾張・七宝山聖徳寺(天文二十二年、織田信長と齋藤道三が見した寺として有名)の末寺として開山した。のち本願寺第一〇世証如に帰依し、本尊寺号を受けた。

慶長八年(一六〇三)、明屋敷村の齋藤徳元の屋敷跡である当地に移住する。

濃尾震災で損失、明治三十七年十一月に再建した。

年間行事

報恩講(二月一日)



## 九 瑞雲山清泰寺

ずいりんざん せいたいじ

浄土宗

住職 浅野 義光(一〇世)

住所 岐阜市松ヶ枝町二一番地

本尊 阿弥陀如来像

開山 善蓮社聴誉称諦徳三大徳

由来と秘話

文化年中(一八〇四〜一八一七)に、西材木町の天野利兵衛が、撰州勝尾寺にて、徳本上人に帰依して弟子となり、徳三と称した。当寺は、文化一三年(一八一六)五月徳三大徳を開祖とする徳三の教えを受け継ぐお寺である。

天台宗美江寺住職知霊が、境内にある観音堂を使用して、念仏講中を作らせた。徳本上人示寂後講中をもって存続してきたが、明治一〇年美江寺より曳堂(えいどう)して独立、富茂登村にて、清泰庵と称し、その後清泰寺と改称し、明治三四年現在地に移転した。現在の建物は昭和五年に改築したものである。

当寺は、もと東京都小石川区原町、一行院の末寺であった。本尊は阿弥陀如来像にて、文政元年(一八一八)一月犬山城主成瀬隼人正より開基徳三大徳に賜ったものである。

寺宝

徳本行者坐像(文化一〇年四月撰州勝尾寺にての自作)(灯明出現の舍利という)

徳本行者の舍利五粒

徳本上人御化導中の御髪

紀州千津川御水行中の御髪

麻地木欄色一七条仕立御常用の袈裟

木綿地鼠色御膚付き二五條袈裟等



## 一〇 白華山禅林寺

はつかざん ぜんりんじ

臨済宗妙心寺派

住職 山口 梁岳(三世)

住所 岐阜市槻谷一三番地の三

本尊 十一面観世音 弘法大師

開山 二世禪梁大和尚大禪師

由来と秘話及び寺宝等

明治三二年(一八八九)伊自良村甘南美寺馬頭観世音菩薩の分霊を迎え祀り、白華庵を建てた。観音様の名前をとって白華山禅林寺と命名した。

一世創建・開山は徴宗文和尚大禪師である。寺には、本尊・弘法大師像をはじめ、子安観音が祀ってある。

また、シロアリ翁として有名な名和昆虫研究所・名和靖氏の本物の位牌が祀られている。

岐阜公園の高台・金華山登山の百曲り道の近くにあり、見晴しは素晴らしい。百段近い石段を登ると夫婦で植えた一五〇〇株のアジサイが来客を迎える。寺は長良川から岐阜北部が一望できるちよつとした異空間である。「アジサイ寺」として有名である。

年間行事

大施餓鬼会(七月一七日)



11 青面山般若寺

せいめんざん ほんにゃじ

天台宗

住職 高木 誠海

住所 岐阜市木挽町四番地

本尊 青面金剛(庚申様)

開山 盛哲和尚

由来と秘話及び寺宝等 明暦三年(一六五七)、本寺美江寺五世盛純の弟

子盛哲和尚が創建し、明治四二年までは美江寺に所属していた。

庚申堂を本堂とし、古い三猿像や庚申厨子、また大般若経全巻がある。

境内の広さは二六五坪で、年貢地を持っていたが戦後無くなった。

什物

阿弥陀仏立像

不動明王坐像

閻魔王

地藏菩薩等

年間行事

奇数月の庚申の日法要(奇数月の二〇日前後)



12 鳳堆山法運寺

ほうたいざん ほううんじ

真宗大谷派

住職 堀 晃運(一六代)

住所 岐阜市西材木町九番地

本尊 阿弥陀如来像

開山 法運坊(俗名・堀将監重行)

由来 堀重行は斎藤家家臣の四天王の一人であったが、斎藤龍興落城

後、顕如上人に出家を申し出て帰依し、上人より法運坊と鳳堆寺の名をい

ただき、永禄七年(一五六四)井水川の南に鳳堆寺を建立した。

一六世紀半ば当時、長良川は現在のように堤防があつたわけではなく、

洪水になると鳳凰が羽根を広げたような流れが形成され、鳳川(おおとり

がわ)とも呼ばれていたという言い伝えが当寺にある。この鳳川のほとり

に建立されたから、鳳堆寺と名付けられたとのことである。

元和三年(一六一七)二月本堂再建を第四代宗玄が宣如上人(第二三代)

に相願い、厚見郡明屋敷内斎藤国斎(くになり)の屋敷に、元和五年より

取り掛かり、正保二年(一六四五)二月一五日に完成し、寺号を鳳堆寺か

ら「法運寺」に改名した。

明和五年(一七六八)の大火で当寺も焼失した。寛政一〇年(一七九八)

西材木町に本堂建立を寺社方御役所に願ひ出

て、寛政一二年一〇月完成した。明治二四年

(二八九二)一〇月二八日の濃尾大震災で焼

失した。大正六年(一九一七)本堂再建に取

り掛かり、大正八年に完成した。

現在の本堂は四代目の本堂である。

什物

祖師(親鸞聖人)真影

蓮如上人絵像

太子高祖絵像

平太郎記(拝読文)・六字名号

年間行事

修正会(元旦)・報恩講・永代経法要



## 一三 三光山妙照寺

さんこうざん みょうしょうじ

宗 派 日蓮宗  
住 職 堀 智仙(三〇世)  
住 所 岐阜市梶川町一四番地  
本 尊 日蓮聖人 奠定の大曼荼羅  
開 山 五千院日舜聖人

由来と秘話及び寺宝等 京都・大本山妙顕寺第八世日広聖人の弟子である五千院日舜聖人の開山で、天文三年(一五三四)四月住とある。当初、厚見郡今泉村に創建、慶長五年(一六〇〇)に岐阜中納言織田秀信公より現在地を寄進され移転したが、旧竹中半兵衛屋敷跡であった。境内奥の「三光稲荷社」は竹中半兵衛の守護神として屋敷内に祀り信仰されたと伝えられ、寺は「さんこうざん」と呼び親しまれ、多くの人々の信仰を集めている。本堂は、寛文二年(一六六二)に棟上げした。日蓮宗の建物としては全国的に古く、江戸前期の雰囲気をよく残している。瓦のふき替えは享保四年(一七一九)の記録がある。

庫裏は、現存する県内の神社仏閣の中で最古の建物で貞享五年(一六八八)六月八日、松尾芭蕉が己百の案内で来岐し約一ヶ月滞在した。(当時の住職は第五世円光院日応上人)芭蕉が直接触れた建物がほぼ当時のまま現存するものは少なく貴重な建物である。

松尾芭蕉の句碑、カキツバタの池、各務支考句などがある。尾張徳川家の御休憩所であった。

本堂、庫裏ともに、岐阜市重要文化財。

年間行事等

新年祝祷会(一月)

三光稲荷初午大祭(三月)

春・秋彼岸供養法要(三月・九月)

永代供養百部経法要(五月一六日)

お盆施餓鬼法要(七月二〇日)

お会式法要(一〇月一三日)

日像聖人会(一一月)

年越し除夜の鐘(一二月三一日)



## 一四 歓喜山安楽寺

かんぎざん あんらくじ

宗 派 浄土宗 西山禅林寺派  
住 職 青木 俊孝(二四世)  
住 所 岐阜市伊奈波通二丁目一六番地  
本 尊 阿弥陀如来像  
開 山 音海舜杷和尚

由来と秘話及び寺宝等 永禄六年(一五六三)の開創で、本尊阿弥陀如来は鏡島の立政寺より拝受されたものである。織田信忠公が戦乱の中で志半ばで戦死した者たちを弔うのにふさわしい地として浄土宗寺院を岐阜善光寺の門前に集めた。伊奈波八ヶ寺の一つである。

現在は、霊験顯なる子安地藏尊をまつる寺として多くの信仰を集めている。子安地藏尊は当山の中興上人が女人の安産と子どもの無病息災の願を御かけなされて毎朝日の出前に初水を取り、御祈祷されたのに始まり、今日においてもその遺訓を守り御祈祷を修している。また地藏尊の前には重軽(おもかる)地藏があり、願いを心に念じて軽く上げれば願いは叶うと言い伝えて試みる人も少なくない。

豊川稲荷

子安地藏尊

薬師如来

聖徳太子立像

大聖歡喜天像

正観世音菩薩立像

弘法大師

大元師明王

成田山不動尊

一代守本尊等が祭られている。

年間行事

節分祭(二月)

初午祭(三月)

大施餓鬼会(七月)

地藏祭(八月)



## 一五 護国山含政寺

ごこくざん がんしやうじ

宗派 浄土宗西山禅林寺派  
 住職 白木 良則(二四世)  
 住所 岐阜市伊奈波通一丁目六八番地  
 本尊 阿弥陀如来像  
 開山 輪海空圓上人  
 由来と秘話及び寺宝等 永禄三年(一五六〇)創建。元々は岐阜市則武の地に創建され、後に織田信忠公が浄土寺院を善光寺門前に集めた際に、現在の地に移築され伊奈波八ヶ寺の一つとなる。  
 創建時より、岐阜市西荘にある立政寺(織田信長が足利義昭に拝謁した場所)の末寺として現在に至る。現住職は二四世である。  
 本尊阿弥陀如来の他、観音菩薩、勢至菩薩、地藏菩薩、法然上人、善導大師、弘法大師をお祀りしてある。  
 年間行事  
 御忌会法要「法然上人の遠忌法要」(三月春分の日)  
 施餓鬼会法要(八月第一日曜日)  
 永代経祠納者法要(九月秋分の日)  
 十夜会法要(一〇月)



## 一六 法東山極楽寺

ほうとうざん ごくらくじ

宗派 浄土宗西山禅林寺派  
 住職 中井 孝和(二九世)  
 住所 岐阜市伊奈波通一丁目三四番地  
 本尊 阿弥陀如来像  
 開山 月空春栄大和尚(開創・天正一二年)  
 由来と秘話及び寺宝等 天正一二年(一五八四)厚見郡今泉村に二階堂左門藤原行家極楽寺を建立。  
 文禄・慶長年間(一五九二〜一六〇〇)に稲葉宮大門に、織田中納言秀信公より当地をいただき現在地へ移る。  
 伊奈波八ヶ寺の一つである。  
 建築物には、山門、本堂、庫裏、地藏堂、便所がある。  
 住職の墓碑には開山(後に建立したもの)、三世、五世、八世、二四世、二六世、二七世のものがある。



## 一七 凌雲山栽松寺

りょううんざん さいししょうじ

宗 派 臨濟宗妙心寺派・大衆禪学道場

住 職 栽松 完道(一一一世)

住 所 岐阜市伊奈波通一丁目二七番地

本 尊 阿弥陀如来像(無量寿仏)

開 山 鉄厩禪師

由来と秘話 当寺は慶長元年(一五九六)僧・是三法師が創建した。往古

は天台宗の古刹にて、栄枯盛衰の歴史を経て、承応二年(一六五三)加納光国寺より維石上座を請して、禪宗に改めたが、法系は続かず、安永二年(一七七三)洞戸村興徳寺より鉄厩禪師を開山に請じて法脈を興し、以来法燈伝承して今日に至る。

寺 宝

十六善神(軸装巻・文化年間作)

十六羅漢像(一六幅・文化五年作)

三十三観音像(木造三十体・嘉永年間作)

年間行事

修正般若会・新春禅道会(一月)

涅槃会(二月十五日)

彼岸法要(三月・九月)

花まつり(四月八日)

施餓鬼法要(七月・八月)

だるま忌・開山忌(一〇月五日)

釈尊成道会(一二月八日)

寺の活動

提唱 企業も家庭も個人もその栄光は座禅から

仏教精神に基づいた青少年育成と現社会に生きる人造りに寺を開放して社会の資本となるように努めている。

月例の坐禅会 月例法話会 人生相談

年2回の禅道会 企業人の研修会

グループ研修等



## 一八 大雄山妙覚院誓願寺

だいゆうざん みょうがくいん せいがんじ

宗 派 浄土宗西山禅林寺派

住 職 雄山 瑞年(三二世)

住 所 岐阜市伊奈波通一丁目四三番地

本 尊 釈迦如来像

開 山 悦空善讚上人(池田輝政の祖父)

由来と秘話及び寺宝等 永禄一二年(一五六九)織田信長は尾張の清州に

あった当寺五世岩空上人に帰依し、岐阜に移した。それは現在の場所ではなく、当時の今泉村(現在の常盤町、上竹屋町、泉町付近)に数町歩の土地を与え、長良川から用水路を造って水を引き、堀を巡らして門中に数棟の堂宇を建立し、外敵に備える出城の形の大寺院を造った。

その後、天正一〇年(一五八二)正月、現在地に移転した。池田信輝に引き続いて輝政は姫路城主になった後も当寺を厚く庇護した。家紋は池田公と同じ「池田備前蝶」である。

当寺は、岐阜市中世史によれば、美濃三大寺(誓願寺、立政寺、護国之寺)の一つと記されているように、戦略的にも重要な意味を持っていた。

日本画家の大家・川合玉堂画伯は、米屋町の魅兵さんの向かい辺りに住み、七歳ごろより当寺の三〇世瑞倫上人に就き、漢学と書を学んだ。



## 一九 善光寺安乗院

ぜんこうじ あんじょういん

真言宗醍醐派

住 職 松枝 秀顕(二一世)

住 所 岐阜市伊奈波通一丁目八番地

本 尊 善光寺如来像(一光阿弥陀三尊仏)

開 山 元龜年間(一五七〇)一五七二)

由来と秘話 戦国時代、甲斐の武田信玄は信濃善光寺より本尊善光寺如来

を持出し、甲府に新善光寺を建立してお祀りした。信玄没後、織田信長により善光寺如来は天正一〇年(一五八二)岐阜に迎えられた。これが岐阜善光寺の前身。岐阜城下町繁栄策のためと言われている。本能寺の変後は、尾張・甚目寺、京都・方広寺、浜松・鴨江寺を経て、信濃・善光寺にお歸りになった。

信長時代に善光寺如来がお祀りされていた岐阜伊奈波の霊蹟には、信長の嫡孫・織田秀信により稲葉善光寺堂が建立され、善光寺如来の御分身がお祀りされた。それを安乗院と満願寺によって護持していたが、明治時代の廃仏棄釈・神仏分離によって伊奈波神社の別当であった満願寺は廃寺となり、その後安乗院一山でお護りするようになった。岐阜善光寺は、わずかな期間であっても「善光寺如来」そのものをお祀りされたお堂が前身という点で、他の全国二百善光寺と異なっている。安乗院は愛護山林泉寺といい、明治維新までは愛宕社の別当として活躍していた。

年間行事

初詣(正月) 節分星祭(二月三日)

末光稻荷大神初午祭(三月旧暦初午)

大黒天例祭(五月十五日)

大施餓鬼会(七月一〇日)

キュウリ封じ(七月一六日以後の日曜日)

お十七夜(八月一七日)

水子地藏大祭(九月二四日)

不動明王大祭(柴灯護摩供)(一〇月二八日)

秋葉三尺坊祈禱会(二月一五日)



## 二〇 普照山善澄寺

ふしょうざん ぜんちょうじ

浄土宗西山禅林寺派

住 職 長間 玄朗(三五代)

住 所 岐阜市伊奈波通一丁目六五番地

本 尊 阿弥陀如来像

開 山 光空智音大和尚

由来と秘話及び寺宝等 天正三年(一五七五)に織田信長の家来が建てた。

本尊阿弥陀如来像並地藏尊は天正年中の頃織田信長公が久しく比叡山の伽藍に安置してあったのを当山建立の折、二尊を比叡山より遷した。享和二年(一八〇二)本堂と庫裏を再建する。

本堂に掛けてある水引はベタ金で値打ちの高いものである。

石像・弘法大師坐像

木造・弘法大師坐像(本堂)

木造・善導大師坐像

木造・宗祖法然上人坐像

観世音菩薩立像(左)

三尊像・阿弥陀如来像(中央)

大勢至菩薩立像(右)

年間行事

春の永代経、御忌(四月)

施餓鬼会(八月)

お十夜会(一〇月)



## 二二 浄土院本龍山大泉寺

じょうどいん ほんりゅうざん だいせんじ

浄土宗西山禅林寺派

住職 真鍋 顕久(二一世)

住所 岐阜市万力町七番地

本尊 阿弥陀如来像

開山 創建：智通菩薩の法孫文譽法子等訓上人

由来と秘話及び寺宝等 天文元年(一五三二)三月一日創建された。

浄土院本龍山大泉寺門前に、浄土院が建てられていた。ここを松尾芭蕉

は泊まる所とし、旅情をなぐさめていた。

山かげや 身をやしなはむ 瓜はたけ 松尾芭蕉

年間行事

御忌法要(三月)

お施餓鬼(七月)

御十夜(一〇月)



## 二二 遍照山法圓寺

へんじょうざん ほうえんじ

浄土宗

住職 颯田 常彦(三五世)

住所 岐阜市伊奈波通二丁目二〇番地

本尊 阿弥陀如来像

開山 廣蓮社大譽上人

由来と秘話及び寺宝等 応永六年(一三九九)当寺を開山する。山県郡大

桑村の城主齊藤山城守の創立である。天文三年(一五三四)に同村の檀家

五〇〇六〇戸と共に現在地に移転した。

江戸時代後半、尾張藩の儒学者が三日間にわたり町民向けに儒書の講釈

を行った。初日は三千人、翌日は八千人に増え、最終日には一万五千人が

集まった。

貞享・元禄期に活躍した俳人安川落梧(元禄四年五月没)、息俳人安川

呉井(享保二〇年二月五日没)の墓碑がある。

本願念仏信仰の実践道場として、また大衆の文化芸能の場として社会に

貢献している。

年間行事

春秋の彼岸会

施餓鬼会(七月第三日曜日)

別時會(一二月)

永代祠堂会

写経会



## 一三 興隆山現正寺

こうりゆうざんげんしょうじ

宗派 日蓮宗  
住職 高木 慈興(二四世)  
住所 岐阜市矢島町一丁目七五番地  
本尊 日蓮聖人奠定の大曼荼羅  
開山 華徳院日政上人

由来と秘話及び寺宝等 稲葉城家老氏家ト全の屋敷跡といわれている。信長岐阜侵攻以後、清洲在の日蓮宗法華寺は三分し、一は高須、一は名古屋、そして岐阜へと移転した。塔頭であった草龍院(現・現正寺)も岐阜へ移転し現地に所在した。(年月不明)

文政五年(一八二二)の法華寺由緒書に「元禄年中争論仕寺中相離」と記載されており、この頃独立して「現正寺」と称したものと思われる。本堂も文政年間に建てられたものである。当山の記録では元禄二年(一六八九)現正寺を公称したとある。

明治二四年濃尾大震災で本堂大破、庫裏全壊したが焼失は免れた。平成二年一月宗祖七百遠忌記念に、本堂、庫裏落慶法要を行う。

先代慈雲院日潤上人は、戦時中岐中(現岐阜高)で教練教官を勤めていたが、昭和十九年七月応召。同八月にフィリピンに出征、レイテ島に到着しているが以降不明。昭和二十年七月戦死と  
いうことになっている。

陸軍中尉

年間行事

新年祝祷会(一月一日)

彼岸会(春・秋)

花まつり(四月八日)

岐阜空襲慰霊半鐘突(七月九日)

盆施餓鬼法要(七月十七日)

宗祖報恩お会式(一〇月一三日)



## 一四 霊方山護国寺

れいほうざんごこくじ

宗派 臨済宗妙心寺派  
住職 服部 利明(二四世)  
住所 岐阜市木造町三一番地の一  
本尊 釈迦牟尼仏像  
開山 大徹法源禅師 慶長七年(一六〇二)二月一日  
由来 本寺院は天正年間(一五七三〜一五九二)池田輝政が天台宗の

廃寺に父信輝の冥福を祈り、菩提所として建立した。天正一二年(一五八四)四月九日、長久手合戦で討死した父信輝は、国のために戦死したので、碑名も護国院殿とした。護国院は信輝の法名である。

元金華山麓の古屋敷にあったのを、元和元年(一六一五)徳川家康公が当地岐阜にお成りの節、今の木造町に移築された。なお享保年間(一七一六〜一七三五)の時再建した。

薬師堂(薬師如来)  
地藏堂(地藏尊)

年間行事

大般若(一月)

大施餓鬼(七月)

達磨忌並びに開山忌(二月)



## 二五 鷲林山正興寺

じゅりんざん しょうこうじ

日蓮宗

住 職 橋内 正徳(三七代)

住 所 岐阜市木造町一三番地の一

本 尊 久遠実成本師釈迦牟尼仏

開 山 十界の大曼荼羅

開 山 日尊上人

日尊上人は、師匠の日興上人が法華経講義中、庭の梨の樹木より枯れ葉が舞い落ちるのに気を取られ目を移した態度に叱責され破門となる。そのお詫びに全国三四ヶ所の寺院を創建しこの功績により、一二年目に破門が解かれた。当山はその内一〇番目に創建された寺院である。

由来と秘話及び寺宝等 嘉元元年(一三〇三)に創建され、約五百年前の御曼荼羅がある。本堂は明治二十四年の濃尾大震災で倒壊したが明治三十年に本堂を再建。大正時代鐘樓門建立。

平成十三年五月、立教開宗七百五十年、正興寺開山七百年の記念事業に客殿を新築。襖絵には近代水墨画院会長山田大作画伯の水墨画が奉納されている。織田信長公の御殿医(信長公侍医)のお墓がある。

初代は天光院殿従五位前少将宗因日頭大居士で、位牌堂には最上段に中川家七代の立派な位牌が並んでいて、墓所には中川家一門のお墓が祀られている。

年間行事

新年御祈祷会(一月八日)

節分星祭法要(二月三日)

彼岸会法要(三月二十一日)

釋尊降誕会、鬼子母神大祭(四月八日)

盆施餓鬼法要(七月二一日)

御会式報恩法要(一〇月一三日)

永代経法要(一一月二一日)

月例法要(毎月八日)



## 二六 青巖山勝林寺

せいがんざん しょうりんじ

曹洞宗

住 職 等 峰一(一八世)

住 所 岐阜市木造町六番地の一

本 尊 釈迦牟尼佛像

開 山 天澤義恩大和尚

開 山 由来と秘話及び寺宝等

もとは尾張小牧村にあり少林寺と号していた。開祖鶴翁僧が、織田信長公の御子息達の手習い師匠であった。天正年間(一五七八〜一五九二)に現在の小牧市より移転された。

織田信長公は、当寺の移転の節、軍功を祝し少林寺の少の字を「勝」の字に改め、御朱印並びに種々の物品を多数寄附した。

享和二年(一八〇二)二月二十七日再建し、現在に至っている。

年間行事等

秋葉総本殿出張火防祭(一月二二・一三日)

祈祷大般若会(一月一三日)

涅槃会(二月一五日)

春彼岸会(三月)

明王殿大祭(五月二八日)

盆会大施食会(七月二〇日)

秋彼岸祭(九月)

宗祖御忌大布薩会(一一月三日)



## 二七 如意山即得寺

によいざん そくとくじ

宗 派 浄土真宗本願寺派

住 職 賀嶋 明光（一九九世）

住 所 岐阜市木造町四九番地

本 尊 阿弥陀如来像

開 山 釈善教 俗名・賀嶋弥左衛門尉興彦

由 来 応仁の乱後、尾州中島郡に住居していた折、蓮如上人の尾州行化に巡り合い、法名・釈善教を賜り得道（とくどう）する。その時、弟興隆も得道し、法名・釈順教を賜る。二人は六字名号を各々授与され、これをを本尊として、即得寺を開基。しばらくして中島郡中村郷より加納へ移る。第三世釈教覚の時代に、現在の地に移り、堂宇を建立、現在に至る。当代は第十九世。

寺 宝

蓮如上人御染筆「六字の名号」二幅

蓮如上人子息、実如上人「阿弥陀如来方便法身像」一幅

顕如上人「小形・十字名号」（甲の名号と言われる）

本堂並びに内陣荘厳（江戸時代前期・平成一八年修復）

書院（大正時代初期）

山門（江戸時代後期）

年間行事

修正会（一月一日）

報恩講法要（一月一三日）

歓喜会法要（八月一三日）

春期永代経法要（五月末）

秋期永代経法要（一〇月末）



## 二八 法光山長照寺

ほうこうざん ちようしょうじ

宗 派 日蓮宗

住 職 小川 如光（四〇世）

住 所 岐阜市矢島町一丁目七四番地

本 尊 日蓮聖人奠定の大曼荼羅

開 山 日像菩薩

開 基 円乗院日述上人

由来と秘話及び寺宝等 延徳二年（一四九〇）開基・円乗院日述上人は京の兵乱を避け、日像菩薩像を捧持し当地に留錫されしに創る。当地唱題最初の霊場として百間四方余の地を与えられし、と旧記に云う。

延徳二年の創建以来、平成二〇年で五一八年のお寺である。明治二四年の濃尾大震災で本堂、書院、庫裏。そして、仏具、寺宝什器（じゅうき）古記録等全壊焼失した。現在の本堂、書院、庫裏等は、昭和時代に先代住職により再建されたものである。

本堂に祀られている鬼子母神（きしもじん）は、先代住職と現住職の七百日に及ぶ荒行中の隨身守護仏で、所願成就・安産子育ての鬼子母神様として信仰を集めている。

年間行事

新年祝祷会（正月）

節分豆撒き・星まつり祈願会（二月）

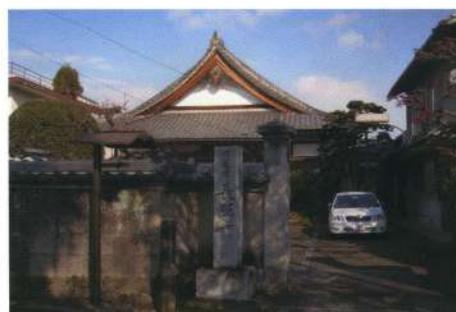
彼岸先祖供養法要（春・秋）

鬼子母神大祭祈禱会（四月）

盆せがき法要（七月）

宗祖日蓮聖人報恩会式（一〇月）

永代祠堂供養法要（十一月）



## 二九 和光山普賢寺

わこうざん ぶげんじ

宗派 浄土真宗本願寺派

住職 巖根 滋朗(一七世)

住所 岐阜市甚衛町五番地

本尊 阿弥陀如来像

開山 正了法師像

由来と秘話及び寺宝等 以前は、岐南町若宮地にあったが、慶長五年(一六〇〇)関ヶ原合戦後、現在地に寺院を建立する。

現在地は織田家の家臣林甚衛門の邸跡であり、甚衛町の町名もこれに由来する。

明治二四年(一八九一)一〇月二八日の濃尾大震災により、建物崩壊し、火災により全て焼失したが、本尊だけは、門徒の殉教的努力により猛火を逃れ安全に避難することができた。第一三世佛乗、第一四世義準、第一五世智昭が再興の念強く、昭和の初期に本堂を建立し、第一六世史朗庫裏を建て替え、書院を造作し現在に至る。

年間行事

元旦会(年始)

彼岸会(春秋彼岸)

盆会(八月)

報恩講、永代経(一二月)



## 三〇 桑田山法光寺

そうでんざん ほうこうじ

宗派 浄土真宗本願寺派

住職 宇野 徹心(一九代)

住所 岐阜市下新町三六番地

本尊 阿弥陀如来像

開山 天長年間(八二五年)真言宗の寺院として岩倉村地区に開山

由来と秘話 天長年間、真言宗の寺院として岩倉村に開山した。寺宝に空海作といわれる薬師如来木像があるのはそのためである。

円空住職が大永二年(一五二二)本願寺第九代実如上人に帰依し、浄土真宗に改宗し、船橋願誓寺(西野町)の配下の寺院となった。

当時の境内地は広く、現在の長良川の対岸近くまであり、本堂は現長良川の川中に、山門は車町(本町五丁目)にあり、谷汲街道の岐阜の関所の役目を果たしていたという。

明治時代に寺領は国有地となったが、当寺院は国有地になっていなかった。慶長五年(一六〇〇)本堂を現在地に移した。現在の本堂は、宝暦六年(一七五六)建立され、濃尾大震災、太平洋戦争の空襲も免れた。このため、岐阜市に残る寺院建物としては古いものである。境内にあるイチヨウの木は樹齢二五〇年、本堂建立時のものと思われる。境内にあるイチヨウの木は樹齢二五〇年、本堂建立時のものと思われる。

江戸時代には境内に寺子屋があり、明治時代初期まで町人・商人の子どもたちの教育に力を入れていた。

寺宝

蓮如筆六字名号、蓮如筆正信偈文

薬師如来木像(伝空海作)

年間行事

報恩講(一月一三日)

蓮如上人御正法要

総永代経法要(五月一三日)

お盆会法要(八月)

特別永代経法要(九・一〇月)

仏教婦人会報恩講法要(一二月)



### 三二 啓運山法華寺

けいうんざん ほつけじ

宗派 日蓮宗

住職 高木 秀明(三五世)

住所 岐阜市矢島町二丁目五五番地

本尊 大曼荼羅

開山 法華院日授上人

由来と秘話と寺宝等 当寺は、約五百年前、延徳三年(二四九二)、尾州

清洲にて、織田常勝が織田助次郎左衛門の常勝祈願所として創建した。

第五世本覚院日陽上人は、織田信長の崇敬を受け、織田信長が岐阜入城

の折、祈願所として岐阜へ移されたと伝えられている。

天正七年(一五七九)五月、安土宗論の際、日陽上人が宗門存亡の危機

を憂い、日蓮一宗が断絶におよぼうとしたのを、日陽が信長のもとへ駆け

つけ、心をくだいた説得が実り、信長自ら日陽上人の手を取り和解ができ

たという。宗門を再興したこの功績によって、総本山身延山久遠寺・大本

山本国寺より感謝状と「宗門再興道場」の称号を与えられた。代々濃州寺

院の触頭に任じられた。

現在の本堂は江戸時代に建てられたもので、ほかに鐘楼、庫裏などがあ

り、参道口には「織田右府祈願所法華寺」と刻まれた石柱がある。

寺宝として、天正四年二月織田信長、天正一

〇年七月織田信孝、文禄五年七月織田秀信の

寄進状がある。

年間行事

祈祷祭(一月三日)

節分会(二月三日)

花まつり(四月八日)

お盆施餓鬼会(七月一六日)

お会式(一〇月一三日)

永代経(一一月一六日)



### 三二 瑞華山感應院本誓寺

ずいかざん かんおういん ほんせいじ

宗派 浄土宗

住職 浅野 義光(四六世)

住所 岐阜市矢島町二丁目四六番地

本尊 阿弥陀如来像

開山 一四四六年頃

唐蓮社演誉上人吟暢疑念大和尚

由来と秘話 知恩院末であり、天正九年(一五八一)まで、誓願寺と称した。

唐蓮社演誉上人吟暢疑念大和尚は、念仏道場を羽島郡岐南町字三宅に創

建された。享禄年中(一五二八)現在地・岐阜に移転する。

一〇代中興徳蓮社釈誉達無専念大和尚は、三河久松氏の出であり、母

堂は、徳川家康の婿、加納城主奥平信昌の乳母であり、そのため帰依が

厚く、慶長六年(一六〇二)一〇月加納城下に西方寺を創建隠居する。

貞享三年(一六八六)と、大正と二回の火災にあつたが、その都度再

興した。

戦災は免れた。

寺宝 梵鐘は、織田信長が岐阜城主の時、尾張甚目寺から取り寄せ、報時の

鐘としたが落城後寄進されたものである。

長禄二年(一四五八)在銘。

また、織田秀信の感状、福島正則の制札な

どがある。

境内墓地には、長祐禅定尼・長享二年(一

四八八)一〇月七日在銘の連続五輪塔がある。

現在、明照、こじかの二幼稚園を経営する。



## 三三三 大宝山蓮生寺

だいほうざん れんしょうじ

浄土真宗本願寺派

住職 佐々木 映徹（一九世）

住所 岐阜市木造町一〇番地

本尊 阿弥陀如来像

基尊 教秀法師

沿革 蓮生寺は、開基教秀師が信州松本より、天文五年（一五三六）

門徒二〇余名と共に井ノ口に移住し、明屋敷に庵をかまえたのが始まりで

ある。永禄一〇年（一五六七）織田信長公岐阜入城の時、教秀師を召出さ

れ十間四面の処を拝領し、寺号を蓮生寺と号した。

慶長五年（一六〇〇）織田秀信公落去の際、家老の木造左工門具政の屋

敷を拝領し、慶長十一年（一六〇六）現在の寺地となり、三代目普通師の

代に至り京都本願寺第一二代宗主准如上人より、寺号を蓮生寺と改名され、

これより蓮生寺と号し、今に至っている。

寺宝

本堂須弥壇にご安置してあるご本尊・阿弥陀如来立像は江戸時代大仏師

康雲によって、鎌倉時代の作であると鑑定された。

平成八年（一九九六）一部文書と共に岐阜市重要文化財の指定を受けた。

年間行事

報恩講（一月）

彼岸会永代経法要（三月・九月）

盆会総永代経法要

仏教婦人会例会（偶数月）

仏教壮年会例会（奇数月）

初参式（五月）



## おわりに

◎ おまいりする心のよりどころ

世の中は、常に変化流転しているから何が起るかわからない。

もし、何かが起こっても心を乱さず、正しい対処ができるようにし

たい。

① 尊い仏の教えのお導きにより、温かい心を養い、正しい智慧の目

を開きたい。

② 天地自然の大きな恵みを深く感じ、これに感謝したい。

③ 自分に与えられた人格を正しく育て、磨いていきたい。

④ 小さな欲心や執着によって、目の先のものにとらわれないよう

に、広い心を持ちたい。

⑤ 人と争ったり、苦しみ悩むことを通して、自分自身の愚かな部分

に気づいていけるようにしたい。

仏教とは、仏が説く教えであり、仏になるための教えである。

（参考・引用文献：服部祖承著『続々仏教を学ぶ』）

# 金華の寺院一覽表（金華仏教会会員名簿順）

寺院名	宗派	住所	住職	電話番号
一 覺林寺	臨濟宗妙心寺派	益屋町八	鶴飼孝一	二六三一九〇九一
二 岐陽院	臨濟宗妙心寺派	木挽町一	田中恵孝	二六五一〇〇五五
三 地藏寺	臨濟宗妙心寺派	木挽町一五	高橋文洪	二六二一九〇五五
四 自福寺	曹洞宗	松山町一三	古川泰道	二六三二四四四八
五 正法寺	黄檗宗	大仏町八	小林孝道	二六四二二七六〇
六 淨安寺	真宗大谷派	中大桑町三一	大館慶縁	二六三二六六三二
七 常在寺	日蓮宗	梶川町九	北川英生	二六四二二四二三
八 真光寺	真宗大谷派	中大桑町二一	土岐智子	二六三二九五四五
九 清泰寺	淨土宗	松ヶ枝町二一	淺野義光	二六二一九九〇一
一〇 禅林寺	臨濟宗妙心寺派	槻谷一三―三	山口梁岳	二六二一九九〇一
一一 般若寺	天台宗	木挽町四	高木誠海	二四五―三〇五〇
一二 法蓮寺	真宗大谷派	西材木町九	堀 晃運	二六三二九四九一
一三 妙照寺	日蓮宗	梶川町一四	堀 智仙	二六四二七七九三
一四 安樂寺	淨土宗西山禅林寺派	伊奈波通一―一六	青木俊孝	二六二二七七三二
一五 含政寺	淨土宗西山禅林寺派	伊奈波通一―一六八	白木良則	二六二二二五三五
一六 極楽寺	淨土宗西山禅林寺派	伊奈波通一―三三四	中井孝和	二六四二二五六〇
一七 栽松寺	臨濟宗妙心寺派	伊奈波通一―二七	栽松完道	二六二二四二二七
一八 誓願寺	淨土宗西山禅林寺派	伊奈波通一―四三	雄山瑞年	二六四二四八三四
一九 善光寺	真言宗醍醐派	伊奈波通一―一八	松枝秀顕	二六三二八三二〇
二〇 善澄寺	淨土宗西山禅林寺派	伊奈波通一―一六五	長間玄朗	二六三二三五五八
二一 大泉寺	淨土宗西山禅林寺派	万力町七	真鍋顕久	二六三一―一五八八
二二 法圓寺	淨土宗	伊奈波通一―二〇	颯田常彦	二六二二八四一六
二三 現正寺	日蓮宗	矢島町一―七五	高木慈興	二六三二八三〇九
二四 護国寺	臨濟宗妙心寺派	木造町三一―一	服部利明	二六五二八八二六
二五 正興寺	日蓮宗	木造町三一―一	橘内正徳	二六四二〇九八一
二六 勝林寺	曹洞宗	木造町六一―一	等 峰一	二六二二二六八五
二七 即得寺	淨土真宗本願寺派	木造町四九	賀嶋明光	二六三二八三三三
二八 長照寺	日蓮宗	矢島町一―七四	小川如光	二六三二二七〇七
二九 普賢寺	淨土真宗本願寺派	甚衛町五	巖根滋朗	二六五二二七〇一
三〇 法光寺	淨土真宗本願寺派	下新町三六	宇野徹心	二六五二二七九八
三一 法華寺	日蓮宗	矢島町一―五五	高木秀明	二六二二二五三二
三二 本誓寺	淨土宗	矢島町二―四六	淺野義光	二六三二九五四五
三三 蓮生寺	淨土真宗本願寺派	木造町一〇	佐々木映徹	二六三二九八九二

ふるさと岐阜・魅力発見大作戦  
**岐阜町金華の誇り**  
 二〇〇九年三月三〇日発行

編集  
 特定非営利活動法人わいわいハウス金華  
 岐阜市歴史博物館

発行  
 岐阜新聞社

発売  
 岐阜新聞情報センター（出版室）  
 〒五〇〇―一八八三  
 岐阜市今沢町二番地  
 岐阜新聞社別館四階  
 ☎〇五八―二六四―一六二〇

印刷  
 トミタ印刷